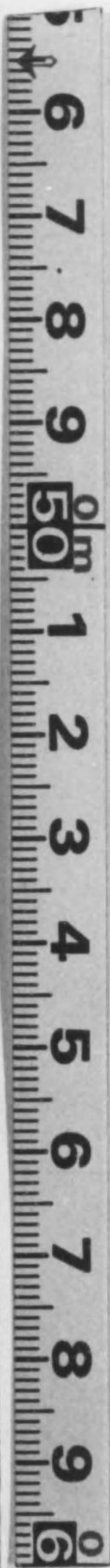


980. 2-035ㄅ



1200500760683

0.2  
35



始



35.4. 4

980.2  
0.35



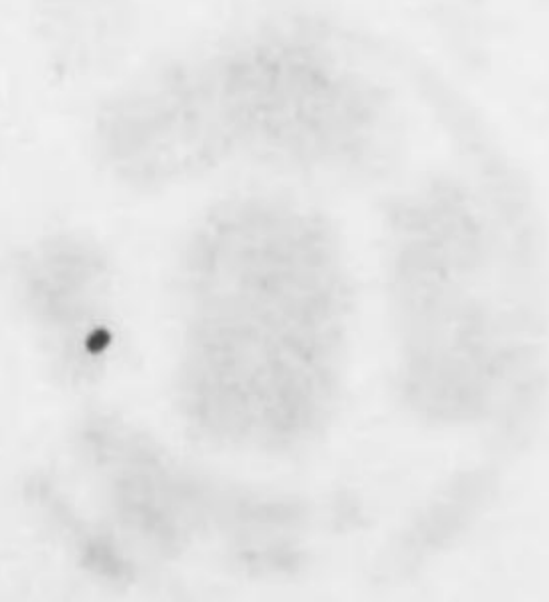
# 露西亞文學史

大泉黑石著



霞ヶ關書房





凡例

953  
25

- 一、此の一卷に盛られてゐる内容は、「發生の時代」又は「起原の時期」にあつた露西亞文學が「近代」に入らうとするまでの發達の狀態を研究し、それを年代順に纏めたものであるから、云ひ替へれば露西亞古典文學の文化史的研究である。
- 二、その古典の時代から「近代」に移るまでの露西亞文學の發達の模様就ての研究は、何れ後日を期して改めて稿を起すことにしてゐる。

著者識

## 序

口傳文學は其の民族の想像力、即ち民族が持ち合せてゐる詩的能力の一切を包括して云ふところの文學上の總計であつて、それはその民族口傳によつて、云ひ換えれば人の口から耳へ、口から耳へと、代々傳へられた原始的の形の儘の文學である。私は今此の口傳文學の發生を、私の父の國であるロシアに就て述べるために、先づその時代のスラヴ民族の生活に伴ふところのまことに神祕的な迷信から始めようと思ふのである。それはロシアとしての有史以前にさかのぼるとき、私はそこに自然——偉大なる北國の自然と云ふ外界からはつきりと、その存在の區別を立てゝゐた無智無學の一民族を考へずにはゐられないのである。まことに彼等は自分等の力弱いこと、頼り少ないこと、心細いことを充分に認識してゐた。その三つの心の状態は、たとへば熱と寒氣、飢と渴、不幸と悲哀、光と闇と云ふやうなものに、絶えず彼等を犠牲にしてゐた或る大きな自然の力——彼等の力では逆も打勝つことの出来なかつた大きな強い力と相接し、且つその偉大なる力の下に五體を投げ出してゐるのだと云ふところから來たのは無論のことであつて、従つて彼等は、その偉大なる力の所有者である「自然」より以上に恐しく、峻嚴なる對象を持たないのである。

彼等は、その自然の中に神としての最高意志を認め、その神の足もとに、何時も小兒のやうな敬虔な心と、絶對服従の心と、諦めの心とを以て、身命を任せて逆らふことがないのであつた。

だから自然界に於ける春夏秋冬の不思議な現象を神の手による神祕的な奇蹟として眺めてゐた。この心持は今の露西亞人の心にもまだ深く刻み残されてゐるが、有史以前の彼等の口を通じてゐる自然界の勝利の沈黙も、怒りの恐威も、今述べたやうに光と闇とか、熱と寒氣とか云ふ風に、全然相反した風物との接觸のことゝにつれて、心をうつものとなつてゐたのである。これを具體的に云へば、彼等は、何れの國にもさうした時代があつたやうに、太陽・月・曉・黄昏・電光雷鳴・雨風を崇拜した。次に彼等は自分達を圍繞する家畜を、ある原始的な幻想によつて崇拜したのである。第一は私たちの所謂神人同形説で、次を獸人同形説にあてはまる所の一種の宗教を持つてゐたと見られるであらう。この大自然の力——それは動的にしる、靜的にしる——の崇拜は彼等が春秋に行ふ盛大なる祭典によつて明らかにすることが出来る。この祭典の儀式に語られた典詞に於ても知ることが出来る。自然界の變動の前に自分達の獨立生存を續ける目的で、その自然の天助を切願するために、かうして抑制された彼等の希望は、彼等自身の神祕極まる動作と言葉によつて現はされてゐたが、その動作と言葉にまでも、彼等は魔術的の力をこれに與へ、自らも信じてゐたのであつた。この民族の自然界に於ける心の苦悶は、民族の中の代表的人物に

よつて深刻に裏書きされてゐた。それはその時代のこの民族の中の英雄達に他ならないのである。彼等はその英雄を「ボガツイリ」と稱してゐた。「ボガツイリ」は民族の力の代表者であつた。私たちの目から見て、正にこの民族が具體するところの抒情詩的神話の立場から云ふと、彼等の祭典なるものは、民族詩の歴史をつくるためには實に豊富な泉であつた。その外にも、國民の「詩の歴史」を探るためには断片的の存在物がある。是等も又この國民の信仰時代の状態を説明して呉れることが出来ないものでもない。

かくの如き古代の遺物を今一通り此處に擧ぐれば、それは「謎々」であり、「諺」であり、「妖術的呪咀」であるが、それ等を通じて私たちは彼等が古代のてぶりを知ることが出来る。しかしそれは要するに國民文學としての立派な形式を具へてゐたのではない許りでなく、私がこれから述べやうとするロシア文學の遠祖となるべき要素と見られてゐる遺物は、この神話時代の「祭典語」と「神話語」と「ボガツイリの語」即ち「英雄語」である。是等は何れも、民族傳説と神話とに密接な關係を持つてゐるもので、民族の思想を迷信或は超自然的のものから物質化するまでの経過としての時期を組み立てた時代の産物と見られる。

この「祭典語」、「神話語」によつて、その時代に無数の神々——例へば牛馬の神「ヴォロース」や「ウエリース」、太陽の神「ダジュボグ」、電光の神「ベルーン」などを知る、私たちは、下つて

民族自身が歴史的課程を辿つて行くうちに、實際に人間が何んなものであるか、人間の力がどんなものであるか、と云ふことを知り始めて、今まで、いかにも不思議な力を備へてゐるものとして恐れられてゐた「自然」に對する争闘が起り、從來の不可思議な自然の力は「闇黒の神々」として斥けられるやうになると同時に、その「闇黒の神々」の手から民族を救ひ出すべき光輝ある人間を、民族の眞實の守護神として、崇拜するやうになり、その守護神と云ふのが、とりも直さず、先刻述べた「ボガツイリ」(英雄)であつて、この「ボガツイリ」を讃美するための謡(英雄謡)に於て、私たちは次のやうな事柄を知ることが出来るのである。それはこの時代の「英雄謡」が、主としてウラジミル太公期と、韃靼侵入期のものに限られてゐて、この英雄の謡の起る時代に、實際に起つた歴史的事件を取り扱つたものである。私はこの英雄謡を別に「史謡」と名付けてゐる。以下項を追ふて説きたいと思ふ「史謡」は、この英雄の謡であると記憶していただきたい。ところで、私は露西亞文學史家の例に従つて、此の史謡の時代を「舊ボガツイリ」期と「新ボガツイリ」期又は「キエフ」期に分ちたい。前者に屬するものは、概ね神話謡に似、後者に屬するものは主として、「ウラジミル太公」の物語に盡されてゐる。前者に民族の人間化の特徴があるとすれば、後者には、民族自身がより人間的であり、自然を敵とし、若しくは邪神として、これと闘ひこれに従ふと云ふ思想から脱して、人間同志の闘争、例へば、スラヴ民族の敵と闘ふと云

ふ點に特徴があると思はれる。さて今少し詳細に舊「ボガツイリ」に就て述べれば、是等傳説俗謡は「スヴィヤトゴール」(後例参照)や、「ヴォルガ」や、「ミクラ・セリア・ニノヴィッチ」等の人物に關する傳説的逸話が、その殆んど全部を占めてゐるが、「ミクラ・セリア・ニノヴィッチ」へ來れば、時代は幾分「新ボガツイリ」に繰り入れるべき性質を帯びて來る。「新ボガツイリ」に就て著しく目立つて見えるのは、謡の數が前者のそれよりも餘程多いことである。(「新ボガツイリ」を「ボレニスイ」と云ふ人もある。「ボレニスイ」は「ボール」即ち平野の意から轉化したものである。この時代の謡は地方々々へ撒き散らされた人々によつて作られたもので、後に至つて是等の人々はキエフに集り、ウラジミル太公に隸屬して了つた。此の時代の謡の主要人物と云ふのは、ドブリニア・ニキチチ(後例参照)や、ミュロンのイリヤなどで、是等の人物は同時期の傳説物語の殆んど何れの中にも目醒ましい活躍をしてゐる。この期の謡の特徴と云ふのは、その物語自身に變化の多いこと、人物に生氣があふれてゐることなどであらう。私は、別にノヴォゴロド期の史謡を認めて、それを「舊ボガツイリ」と「新ボガツイリ」の後につけたが、この「ノヴォゴロド期」と云ふのは「町の國」或は「國を形造る一つの町」としてのキエフ市の歴史から岐れて起つたもので、私の考へでは、キエフ期とは全然別箇のものである。前に二期に分けた傳説俗謡の時代に新しく「ノヴォゴロド期」を加へて此處に三つの期を作つた。又是等の三期に屬する傳説

俗謡を「ブイリナ」(史謡)と一般の「俗歌」とに區別立て、特に「ブイリナ」に就て有る限りの知識を傾けたいと思ふ。(「俗歌」の中には全然「ボガツイリ」(英雄)の動作が含まれてゐない。それによつて私は區別を立てた)。

## 目次

第一篇	口傳文學と其時代	
第一章	傳説俗謡の研究	三
第二章	史 謠 三 曲	八〇
	(一) 英雄スヴィアトゴル	
	(二) ドブリニアと龍	
	(三) ヴオルガとミクラ・セリアニノ	
	ヰキツチ	
第二篇	記述文學と其時代	
第一章	傳説文學時代の背景と文化草昧時代の文學	二九
第二章	演劇と戯曲	一五九



第三篇 近古文學と其時代

詩と詩人……………一九

(一) ワシリイ・アンドレヴィッチ・ジューコーフスキー……………一九

(二) イワン・アンドレヴィッチ・クルイロフ……………二〇

(三) アレキサンドル・セルヂヴィツク・プウシユキン……………三三

(四) ミハイル・ユリエヴィッチ・レルモントフ……………三八

(終り)

露西亞文學史

## 第一篇 口傳文學と其時代

### 第一章 傳説俗謡の研究

其の一

今の散文小説は無名詩（ベジミアニア）の變體である。無名詩は青年詩（モロデイエツキア）の進歩體である。青年詩はコサック詩（カザチエスキア）より生れ、コサック詩は昔話（ストーリーナ）から脱胎したもので、昔話は所謂傳説俗謡及び史謡（ブイリナ〔今日の抒情詩〕）の特徴を失つた形式であると思ふ。ロシアの文學は現今の形式を取るまでに、傳説俗謡（史詩・俗唄を含む）から、これだけの變態を経て來たのである。傳説俗謡は露西亞大陸文學の前身であり遠祖であつた。露西亞を研究する人や、露西亞文學を研究する人は此處から出發すべきであらう。傳説俗謡或は史謡を等閑に見るのは大いなる誤と云はねばならぬ。

佛蘭西や希臘を神々が建てた國とすれば露西亞は人間が建てた國と云つても差支へない。だから、前者の傳說的俗謡を、神話によるとすれば、後者の俗謡は、正に人間の口碑に基づくものと見なければならぬ、露西亞の傳説は神のものでないからである。

神話に基礎を置いて居ない、人間同志の話に源を發するものだといふことを豫め斷つて置く。(序文概説)

露西亞の史謡を三つに分けて見れば、ウラジミル期の一團(又はキエフ期)、ノウオゴロド期の一團と、それからモスクワ期の一團となり、これらを「若き英雄」期の謡として、此の外に三つの「若き英雄」期の謡がある。

(俗謡中、シベリアよりアアレスに至る、アイスランドよりシプラスに至る個所から集めたものが頗る多い。以下項を追ふて、此の史的俗謡に關して、私が知れる限りの事を述べる積りである。)

### 其一の二

史詩俗謡(傳説俗謡)は色々あるが、其の共通點とも云ふべきは、凡てが跑韻脚で、仰揚々格より成る曲尾で終つて居ることであらう。

五段、六段乃至七段のもあれば、ぐつと短く四段で打ち切つたものもある。「ミハイルの廻路」などは全部跑韻脚である。詠謡音調(調子)は餘り澤山ないし、リズムにも一定の限りがあつて、唄ふ者によつては無論流義を異にするだらうが、歴史的の人名地名或は偽歴史的の人名地名は一定してゐるさうである。兎に角、史謡には嚴然とした一定の特色があるのである。これを唄ふ者は、史謡式の所作事に従つて唄ふのだ。

- 1 「イリヤと親しき友」
- 2 「イリヤと偶像」
- 3 「イリヤと三筋路の冒險」
- 4 「イリヤの變裝」
- 5 「イワン・コディノウキッチ」
- 6 「ヴォルガとミクラ」
- 7 「ヴォルガ・ウセストラウキッチ」
- 8 「ヴォルガ・ウセストラウキッチの魔法師」
- 9 「ヴォルガと村人の子」「ミクラ・セリヤニノヅキッチ」
- 10 「ムロンのイリヤと獵師フアルコン」

- 11 「ムロンのイリヤとカリン天子」
- 12 「ムロンのイリヤ農英雄と豪氣のスウイヤトゴル」
- 13 「英雄スウキヤトゴル」
- 14 「チュリロ・ブレンコウキツチは、おしやれもの」
- 15 「ノウオゴロドの勇士ワシリ・ウストラエヴィツチ」
- 16 「四十一人のお巡禮」
- 17 「おとなしきドナイ・イワノヴキツチ」
- 18 「富めるノウオゴロドの客、商人サヅコ」
- 19 「法王の子の勇ましきアリヨシヤ」
- 20 「龍退治のダブルイニアとマリーナ」
- 21 「ボカルの貴人、スタルヴ・ゴヴデイノヴキツチ」
- 22 「デイク・ステパノウキツチ」
- 23 「懐しき遍路者、ミハイル・イワノウキツチ」
- 24 「獵夫ダニコと彼が妻」
- 25 「ダブルイニヤの龍」

- 26 「ダブルイニヤとアリヨシヤ」
- 27 「商人の悴イワンと彼の馬」

以上二十七曲は多數に存在する俗謡の中でリブニコフ氏、ヒルフエルデン氏、キルシヤ氏、ダニレフ氏、キリエフスキー氏、サハロフ氏の蒐集になるもので、一番人口に膾炙して居るものである。(唄名の頭に番號を附けたのは、後に至つて謡を研究する場合に、番號を参照するため、其の外に意味はない。)

此處に掲ぐる「イリヤの變装」(青い酒)の中へ出て来る人物で、ウラジミル太公といふのは、ウラジミル、モノマチユス(一〇五三年生。一一二五年死)の事である相で、この人は酒宴を催すことの盛大なる點に於て、歴史に名を残してゐる人である。ウラジミルはウラヂキ——ミリ(世界の統治者)のつゞまつたものである。露西亞の傳説や歌謡にはよく此のことが書かれてあるから、誰でも知つて居るだらう。此のウラジミル太公を「美しき太陽」といふのは、露西亞傳説「天と太陽」によるので、何でも、光と熱の表象と云ふよりは寧ろ反對に、受動的な、溫和、佳麗の意を表はすもので、青い酒)の謡の中に表はれてゐる様に、俗に云ふスペインあたりの elvenero (善王)の事だと思はれる。ドブリニアは「怪物退治」の主人公で、イリヤは農士である。ボガツイリの子孫は偉大なる體軀と力とで有名な豪傑ばかり揃つてゐるさうで、自らクレスチアニエ、

イリウシニと稱してゐるのが、つまり此の連中である。

青い酒

——イリヤの變装——(4 参照)

「我、さま／＼の地に行けり。されどキエフを見ざる事久し。いでや、これより行きて、かの市人のさまを見む。」

かく吹きぬイリヤ、とある日に。

ウラジミル公の樂宴は開かれてゐぬ

彼が王市に入り來る時に。

イリヤはまともに酒宴の筵に入りて命のまゝ群客に加はる。

命のまゝ四方へ福をもて、頭を下げぬ。

美しき太陽のウラジミル公と

アブラキシアの公妃へ

されどウラジミル公は彼を識らざりき。

「汝の名、汝の部落、汝が祖先より繼げる姓は何と言ふぞ」

イリヤは答へぬ

「美しの小さき太陽、輝くウラジミル公よ、我は森の彼方より來れる、ニキタと言ふ者なり」

「おゝ。汝勇敢不羈の奴。予等と共に座して宴に加はり麵麩を喰へ。末座に空席あり、その他

の席は、今日予と共に祝へる貴人や宰相の妻、富める商人、大勇女や、露西亞六十士によりて

充ちて居るぞ。」

老コサックは此の言葉に快からず

末座にて麵麩を裂き喰はんとは！

されば彼は叫びぬ。

「おゝ、美しき太陽のウラジミル公よ、君は烏共と伍して喰ひ祝はんとし、我を烏共に加へて

末座に着かしめん所存か。否々、我は仔烏と共に麵麩は喰はじ。」

此の言葉に美しき太陽の太公は怒り、

神速に立上りて、物凄き夜の如く

色をなし吼えたてぬ、野獸のごとく。

「やよ、汝等優勢の露西亞英雄よ、汝等は

烏と呼ばれて忍び得るか、いやさ、忍ぶ氣か。小烏と呼ばれても——。英雄よ、彼奴を討て。

片腕に三人づゝかゝりて廣間へ引立て、狂暴なる彼の首を刎ねよ。」

彼等が引立てんず時、イリヤは片腕を打ち振りぬ。

三人の英雄は倒れて息絶え果て

今一腕を奮ふ時、他の三英雄もまた斃れたり。

かくなれば、ウラジミル公は

彼の十二勇士に命じて彼れを討たす。

十二勇士が一度に彼に打ち向ふとき

後ろより六勇士躍り出でて

共に力を奮へど、皆斃されぬ。

故を問ふ者あらば答へて言はむ

かくの如き汚辱を受くる時

イリヤの心は燃ゆるがためと。

イリヤは強弓に矢をついで

「矢よ、飛んで王公の窓を貫き、黄金の尖塔を破りて、神の社の靈驗ある十字架を打ち仆せ。」

かく心に呪文を稱へたり。

やがて彼は掻き集めぬ

壊れ落ちしすべての小尖塔と、すべての十字架とを。

それを携へて王立の酒場へ行き

貴重なる尖塔を無数の寶に代へ

青き酒を求めて飲み始めぬ。

彼は、やがて、酒場の食客を招き集め

青き酒を飲む者をして、

貴重なる尖塔を酒に替へ

手傳はせて、飲みつぶしぬ。

「我等が王公の尖塔を酒に替へて飲み居ると知らば、公は何とするぞ。」

と食客等は言ふ。

「まゝよ、飲め飲め、面白き友達よ。明日にもならば、我こそはキエフの町の王公となりて民

を治め、君等を宰相にしてくれやうぞ」

キエフの王公ウラジミルはこの災厄の様を知り

此の町に来る何奴の仕業かと思ふ。

この時に若きドブルーイニヤ・ニキチチは云ふ。

「我は優勢なる英雄を皆知れども、たゞ一人知らざる者あり。そは老コサツク、ムロンのイリヤと云ふ。戦に死せりと布告も聞かず。されば、そは森の彼方より來れるニキタにてはあらずして、正にムロンのイリヤなるべし。殿は賓客を遇するの道を知らず。彼が立去るに禮を用たざりしなり。」

ウラジミル公は驚き呆れて

「然らば、誰を遣はして、彼を名譽の酒宴に招かむか。勇敢なるアリヨイヤ、ポボウキツチは彼に向つて言ふことを知らず。チュリロ・ブレンコウキツチは侍女や婦人の前にて氣取る藝の他は何事も出來ず。予等は剛巧の者を遣さねばなるまじ。誰か、讀み書き、且つ道理ある論を吐く者ぞ。汝、ドブリニア・ニキチチ。事態かくの通り故、參れよ。行きて彼の面前にて、石の床に額づけよ。その濡れる母地に幾度も。かくて「御身を迎ひに、ウラジミル公よりの使者は來れり。御身老コサツク、ムロンのイリヤを名譽ある、崇むべき祝宴に招かむとて。公は御身を知らざりしがために、たゞそれが爲に、麴麴を喰はせんとて末座に着かせたるが、今や御身を歡喜衷心より遇し、過去の恨を含むなどの仰せなり」と申せ。汝の地位は今日まで最も低けれど、最も高位をさづけ呉れやう。困厄より奇智を以て脱しなば」と。ドブリニアは心に思へらく

「我はイリヤの手にかゝり、忽ちにして死することなしと云へず。されど我れ若し美しき太陽

のウラジミル公の言に隨はざれば、猶惡しかるべし」と。

やがて彼が王立酒場へ現はるゝ時、

イリヤは其處に飲みわたり。

力強いイリヤの肩へ手をかけ、

遺言を述べれば、

「幸福なる哉、汝、若きドブリニア・ニキチチよ。わが後より來るとは！汝若し我が前面より近づきなば、既に汝は灰と化し居らむ。汝行きて「速やかに全市に布告を出し、三日の間あらゆる酒場を公開し、無料にて人民に青き酒を飲ませよ、青き酒を飲まざる者には銘酩の麥酒を飲させ、それも飲まぬ者には砂糖水を與へ、凡ての人民には、ムロンのイリヤ、老コサツクが、キエフの町に光榮を下しに來ることを知らしめむ」と告げよ。右の如くに行ひ、尊き祝宴を張れ。然らざる時は、太公は明朝より、其の統治權を失はんのみ。」

とイリヤは答へぬ。

ドブリニアは韋駄天に馳け戻り

速やかに、速やかに、布告しぬ。

かくて勢のある酒宴は催されぬ。

食ふためにあらず、飲むためにあらず、

老コザックを見物せんがためのみ。

雲霞の如き人々は酒場に群がりたり、

イリヤは公殿に入り、禮を施しぬ

すべての人に、特に公と公妃に。

このとき公は神速に立ちて言ふ

「おゝ、汝老コザック、ムロンのイリヤよ。予の傍に汝の席あり。左もよし、右もよし。猶三番目もよし。汝の好む處に座せよ」

とてイリヤの白き手を取り

甘き口に接吻しぬ。

彼等は共に、甘き馳走の、卓子の四角の椅子に着せしに

イリヤは最高の座を避けて次席に着き

彼に従へる酒場の醉漢痴呆共を側に置きぬ。

かくて、すべての者は楽しく

飲み月つ食ひ始めたり。

かくて、イリヤは和睦しぬ、ウラジミル太公と。

### 其一の三

フランス、イタリー、スペインなどで、その國の史詩俗謡が唄はれてゐたのは餘程古いけれ共、文字で書き現はされたのは悉く中世期頃であるらしい。當時無名の人々によつて、俗謡が文章の形を採つたまゝ、現今まで少くならず残つてゐる。然し乍ら文章以前の謡を聞き傳へてゐる人は殆んどないさうである、

例へばかの「フアロエ、アイランズ」なども、中世期の中葉には古風なものであつたにもかゝらず、十九世紀から二十世紀にかけて傳へられて來た文章を見ると、それが大部分新しい形に變つて居るのを見ても解るだらうと思ふ。

何れの國でも傳説と云ふものはある。その傳説が人の口から耳へ、口から耳へと口傳さるゝ時は、其處に大した變化はないけれども、一度文字を以て表はさるゝ場合には、誇大されたり、縮小されたり、兎も角も、文章の體裁に重きを置くために、いくらかづゝ本來のものとは違つて來る。ところで、フランス、イタリー、スペイン、ギリシヤでは、傳説を夙く文章にした。かくて作者は隨意に着色し削減し、勝手な手加減を加へて、人工を施したが、露西亞はさうでない。



露西亞の傳説は、右のやうな文章の形で全國に撒き散らされたものでなくて、眞個に口から耳へ、口から耳へと移つて行つたので、従つて、傳説を謡つた俗曲も亦同様である。今に至り依然として往時のまゝである。千年も千五百年も前に傳はり始めたものが、今でも其儘跡を留めて居るのである。

#### 其一の四

此の史詩、傳説俗謡は不思議にも北部に盛んに唄はれた。露西亞の北部は森林に河川に湖沼が多い。しかし、茫々たる平原に土を耕す人々の間には、餘りもて囃されなかつたさうである。俗謡を唄ふ人といふのは、別に定まつて居るといふ譯ではないけれども、純然たる農夫に少なくて、大工、左官、仕立屋と云ふやうな職人に多かつたといふ。無論半職人半農夫である。是等の人々が卒先して唄ひ、それを眞似て、老人であらうが、子供であらうが、男女の區別なく唄つたもので、そんな人々が、俗謡の中に、自分等の祖先の行動を充分に認識し理解し居つたか如何か、其處までは私も知らない。露西亞人に云はすれば、彼等が遠祖の英雄的生活を憧憬するの餘りに、謡が行はれたものと云ふかも知れない。或はさうかも知れない。自分の唄つてゐる謡の一言一句すら、其の意味を知らずに居たと云ふ譯ではない。

それは絶対にあるまい。況んや俗謡に現はれてゐる奔放不羈な、己れが父の父たちを指して、冒險を探し廻る破戸漢と云ふものもあるまいし、また放埒極まる野盜野太刀の類と見るものもなかつたことゝ信ずる。

「ボガチール」といひ「ポリヤニツア」と稱して謡曲中の人物を讚美する。北部、東部にあつては、遇むいに「ボガチール」を山師と云ひ「ポリヤニツア」を、あばづれ女と觸れ廻る者があれば、やがは、正直素朴の周圍の拳に殴り付されたらう。

さうでなければ謡が流行して、代々傳はる筈がないではないか。

殊に「ポリヤニツア」などは、大なる感激を以て唄はれ、大なる誇を以て傳へられて來たものである。

既に此の史的俗謡を熱心に唄ふ人々が、大工、左官、仕立屋、靴職人、網師だとすれば彼等は本業の傍に、絶えず謡を稽古して居たのであらう。「謡唱ひ男の家に秋の收穫がない」と云ふのは、謡を稽古する時間に、土を耕す暇が潰れた爲である。

傳説時代、史詩の時代には、大地主があつても自家で使つて居る農奴を壓迫するやうな事は少しもなかつた。傳説俗謡が行はれて居る所は、近代でもその美風が謡と共に残されて來て、宛然として傳説時代の心持ちで生活し、さながら、往古にあつて史詩を吟じ乍ら、それに對する多少

の報酬を得て世を過してゐた人々の如く、自由な天地に俯仰してゐるのであつた。

従つて其の一帶は、文化の侵蝕を受くることが非常に遅かつたのである。太古の無學者が、太古の衣を被つて古風な世を呑氣に渡つてゐたのである。

我國の「巡禮」又は「札所めぐり」或は「四國遍路」は職業ではないけれども、所謂傳說的の詠歌をもつて、報謝を受けて居つた一つの修業である、が、ギリシヤでもロシヤでも「神々の歌」「傳說的史譚」を唱つて方々を巡り歩いた中世紀頃の人々は、それを純然たる職業にして居つた。

「ピリナを唱ふから、一ボルチナ下さい」と云ふやうな古い話が残つて居る。一ボルチナとは、凡そ七、八十錢位に當るだらう。今では譚などを歌つて生活する人はない。が、然し露西亞の方では今でも、そんな連中が放浪してゐると云ふやうな話が「エルザレム巡禮日記」中に書いてあつたことを記憶する。

（古歌譚研究者とか、特殊な人で、時間其他に充分餘裕のある人は、今でも家庭的にこれを研究し且つ唱つてゐる。）

かうして、俗譚史歌を唱ひ乍ら、諸處を放浪して一生を終る人々を、カリキ・ペレコジイと稱したものである。美しい聲を持つて居る人、盲人、不具者にこれが多かつた。これは何れの國も同じことである。前者は自ら好んでこれに身を入れ、後者は、他に生計の手段を得る肉體を持つて居なかつたからだ。

### 其一の五

我が國の昔に「琵琶法師」といふものがあつた。殊に戰國の世に多かつた。何某の城、何某の陣と見れば其處へ出掛けて、琵琶を弾じ淋しき軍旅のつれづれに興を添へ慰めたものであつた。それは一つの高等な職業と認められてゐたのである。

露西亞にもそれがあつた。史譚を詠つたものであつた。この點に於て、我が國の琵琶曲と露西亞の史譚とはよく似て居る。内容も英雄を主人公又は女主人公としてゐる。それも似て居る。聖堂、寺院、高貴の邸宅には、スコモキヤ、道化役者、幫間の如きが、出入するのを厳しく禁じてあつたが、史譚詠家は歓迎されたといふ話である。従つて高貴の慰藉物とされて居た時代もあつた。スタブル、ドブリニアア、アリヨシヤなどが譚はれたらしい。

だから高貴の子弟で、藝人の群に投じて、琵琶法師式の俗譚を詠つて歩いた者も少くはなかつたのである。決して恥かしい商賣と思はれて居なかつたのである事が解る。

兎に角、これを譚ひ、これを受し、これあるがために、露西亞人は偉い種族だと考へてゐた人々は、殆んど皆、無學者、無教育者、一般に下層階級の者であつて、文學が如何なるものかは、

一切無頓着で、麥を喰ひ、貧しい天地に、何の不平もなく生活してゐたのである、即ち文字の仲介を俟たずに、傳説を知り、傳説の歌を知り、これを詠つて居た者ばかりであつた。

偉大なる露西亞文學が、特色ある性質のものとして、世界の水平線に現はるゝ時機が、他國のそれよりも餘程遅かつたのは、他にも原因はあるけれども、一つは史詠に満足する世間に由るものと思はれる。

ダニレフ氏がベルムのデミドフ鑛山村で、歌謡を蒐集した話は諸君も御存じだらう。

このダニレフ（キルシア）氏は其の頃（中世期中葉）何人であるか、誰も知るものがなかつたらしい。であるから一八〇四年の五月頃、蒐集された史詠が出版された時は、世間の耳目を惹くこと非常なものであつた。妙な譚だと面白半分に、傳説俗謡を讀んだ人もあつた。それからかう云ふ連中が、次第に殖えて來たのである。一八一八年の九月頃には續編が出版された。

その頃は最早八分通り、歌謡が世間に擴まつて居たので、こんな面白い歌なら自分も作つてやらうと云ふやうな、道樂氣のある人々が、亂暴にも古謡を眞似て、歌謡を新作し、發表した歴史さへある。

かやうに一般から歡迎されたのであつた。（フローレンスと云ふ女史の記録書には、一八一九年即ち續編が出版された翌年には、素晴らしい本が隣國のライプチヒからも出たと記してある。

その頃の獨逸で此の種の出版をしたか如何かは知らないが、何しろ正確なことが記載してなかつたので、私には解らぬ。その本を持ち合せないから、如何なる史詠が集めてあるか、窺ふ事が出来ないのも遺憾である。）

それからすつと下つて、一八五五〇年のことである。即ち此の傳説古謡が、露西亞文學に新紀を劃成せんとする少し前である。ペトルザヴオズクに居た官吏のペトル・リブニコフ氏が、オロネツ政廳に同じやうな官吏生活をして居る一同僚の口から、オロネツに行はれた珍しい古風な傳説古謡を聞いたのである。その話が端なくも彼の研究心を刺戟したものと見えて、リブニコフ氏は公務の餘暇を利用して早速調べて見やうと思つたのである。

彼の同僚と云ふのも、其の管内に住んでゐる老人から、其の話を聞いたのだと云ふのである。リブニコフ氏は御用新聞に（官報のやうな新聞ではなかつたらしい）掲げた俗謡に、關連する譚を其の老人から聞いたのだといふ話だ。

リブニコフ氏は是に力を得て、益々蒐集に努めた。其の間に如何なるものが手に入つたかも知れない。

十年の後（一八六〇）シヤングスタ・フェル警吏の助力でもつて、俗謡を詠つて村から村へ流れて歩く夫婦者を探し出すことが出來た。所謂カリキイを手に入れたので、此の夫婦者に強ひて

知る限りの謠を詠はせたのであるが、耳新しいものは何も知らないので、カリキーはリブニコフ氏を失望させて了つた。

その以前に「瓶子」と云ふあだ名で通つて居る半農半仕立屋の主人が、此の道に至つて詳しくて、彼が手に入れた俗謠の或物は、此の半仕立屋が目を通してゐると云ふ話を聞いてゐたので、是非その男に逢つて、詳しい話を訊かうと考へて居たけれ共、其の男の本名が何某で、何處に住んでゐるのか丸で解らなかつた。

何でも謠に身を入れて家を亡ぼした爲に、今ではその習ひ覺えの史論を資本に、ヴォルガ河の對岸の村を、迂路つき廻つてゐると云ふ話だけ探り出して來たので、冬季に入るや否や、オネガ湖を渡つて、仕立屋搜索に出掛けたのが前後二三次もあつた。

リブニコフ氏が漸く此の仕立屋を見附けたのは一八六三年であつたさうだ。

何しろ官吏と云へば、村民が大變毛嫌ひするので、色々考へた揚句、リブニコフ氏は百姓に變装をして、村民の群に混つたのであるが、彼がラドガへ差しかゝるとき、到頭「瓶子」の仙人を發見して了つた。

丁度夜のことである。春の雪が未だ融け切らず、湖面は冬のまゝの氷で閉ざされてゐた。ラドガへ着いたリブニコフ氏は、或る土民の小屋の畔りで、火を焚いて、暖をとつて居つたが、草臥れて眠りかけると、突如、悲調な謠聲に眼を醒まし、靜かなる湖面に向つたまゝ、默然として其の謠の聲に耳を傾けたのである。

其の聲の主は白髪の老翁であつた。リブニコフ氏は、やがて「ノウオゴロドの商人」の曲を聞くと共に、その謠の主は正に尋ねる人だと直覺したのである。白髪の老人の傍には七八人の謠ひ手が群をなして、種々の謠を歌つてゐたが、老人の絞り出す皺鳴れ聲、不分明な句調に優るものはなかつた。老人の名はレオニチ・ボグダノウキッチと云つた。

漸く巡り逢つた仕立屋の「瓶子」老人のお蔭で、リブニコフ氏は、五萬章ばかり珍しいものを知ることが出來たのである。

リブニコフ氏はそれまでに蒐集して置いた歌謠を編輯して、二巻となして印行したのである。

さきに、ダレニフ氏によつて紹介された傳説俗謠は、リブニコフ氏によつて更に詳しく愈々廣く世間に知らるゝことになつたのである。

餘りに歓迎された爲に、餘りにリブニコフ氏が巨細に蒐めたゝめに、一時は其の眞偽を疑はれるやうなことであつたので、彼は次の著作に於て、俗謠蒐集の苦心談じみたものを書いて、世人の誤解を解かうと企てゝ實行した程であつた。

越えて一八七〇年に、アレキサンドル・ヒルフェルデン氏が、リブニコフ氏に教はつて、例の

俗謡吟詠者の群へ研究に出掛た。ヒルフェルディン氏はヴオロネツの東北部の村落で、十九世紀初め頃の史謡を約三百二十首許り発見したと云ふ話で、何しろあの邊は森林に沼が多い。ケノゼロ・ワドロゼロあたりを徘徊した同氏は、其の著書の中に、農民の生活情態を大いに讚美してゐる。ウォルキを用ひて交通し、森と沼との間に生活する土民の心理にまで立入つて書いてゐる。

### 其二の一

「民謡は一個人の作ではない。國民全體の詩的能力のその總計である。一國民の詩才の果實である。俗謡が詩化せられんがためには、其の國民は強く勇ましく、活動の時代を経ねばならぬ。多事にして時代の特色を現はせる人物に富む時代を経ねばならぬ。何故なれば自己の感情を歌ふやうに、自己の周囲の事のみ多く歌ふからである。彼等は、力の有り餘れる時にのみ歌ふのである。であるから、活氣横溢の時代でなくては、國民詩即ち國民的俗謡を得ることが出来ないのである」(ヘンクック・イブセン)

傳説俗謡は只その國民の仕事である。他國から輸入したものではない。従つて輸出すべきものでもない。

個人の仕事でなくて、團體の仕事である。

他の文學的産物、例へば、小説、詩などは根本から趣を異にしてゐる。一口に云へば民謡には個性がない。作者の個性がない。無論主人公の個性はある。而も歴史的と云ふよりも、荒唐な神人的な個性がある。特に露西亞の傳説俗謡は、原始人間味を帯びて居る。それは謡を見れば解ることである。

言葉を玩ぶのは詩人の業で、詩人は此の謡に限らず、その言葉を以て己の強い個性を、これに含めやうとする。

露西亞には當時、詩人は随分居つたが、俗謡には餘り手を付けなかつた。お蔭で野生の謡が野調を失はず、いさゝかの個性味をも帯びずに、傳はつて來ることが出来たのである。

事實は歴史にあつた事でも、動いてゐる俗謡の中の主人公などは、歴史を超越して居る。

前にも云つた様に、傳説俗謡の中の冒険談は、まことに荒唐無稽であるが、その基礎と云ふものは、確乎として歴史の上に築かれて居る。

例へば、俗謡中一番有名なウラジミル・モノマーク太公の祖父に當るイワン第三世の故實が附會されてゐると云ふ話もある。例令、太公のことでなくても、事實は動かす事の出来ない歴史上のだけからか、出て來て居るのである。

その詮索は私にも、深くは出来ないし、また其處までは研究しないでもいゝだらうと思ふ。

イワン時代の歌謡の背景は、主にポーランドとの戦争、クリミヤの鞆紐人との戦争、或は又シベリヤ遠征、カザン占領に、アストラハン略奪などである。

ホルタヴァの戦いを謡つた俗謡の中には「ムロンのイリヤ」10参照、「龍殺しのドブリニヤ」20参照の傳説を持ち出して合體させてゐるらしい點もある。だから、例へば、ペトロ大帝を謡つたもので、その謡中に現はれて来るペトロ大帝が、眞實のものとは、雲泥の相違があるものもあるから、比較的後に出来たものは、餘り價値がないと見ていゝだらうと思ふ。

## 其二の一

一説に従へば、キエフ期とノウゴロド期の詩謡（主として傳説俗謡）は露西亞人が創造したものでなく、土耳其や、蒙古に源を發し、それが派生したものだといふ。いづれこれに就ては詳論するとして、此處には参考として云つて置く。

また一説に従へば、俗謡が創造されなくてはならなかつた南部露西亞やキエフ、キエフの近縣を措いて現今、そんな謡を唱つてゐる者はないから、多分其處で出来たのではない。以前此の地を通過した者が、唱つて過ぎたのだらうと云つて居る。そして此の説を稱ゆる人は、更に俗謡が今でもシベリヤとか、アルハンゲルスクとか、シンピルスクに行はれて居たり、それかと思ふと、

ドン河畔のヴォロネツやベルム、それからウォルガ河口に残つて居る處を見ると、これは必ずシベリヤ放浪遊民の産物ではなからうと云つて居る。

この現象を今少しく自然的に説明しようと思へば、キエフ地方の歴史を緝けば、解るだらうと思ふ。

即ち、ウラジミル太公の謡は十世紀末、十一世紀、十二世紀に作られたもので、謡を見ると露西亞人が殆んど皆、基督信者になつて居る。そして鞆紐と接觸して居る處が詠はれてゐる。無論ウラジミル太公統治の下に於て左様である。而して主人公の活動舞臺は、キエフと其の近傍に限られ、年代は凡そ九八八年から、一一四七年或は八年に亘つて居る。

空間と時間とに一定の制限が有る處から考へて見ると、俗謡は必ず九八八年から一一四七年前後に、此の古都で作られたものだと思定出来さうである。

何故ならば、年代記に記されてゐるウラジミル太公の諸勇士は十三世紀に入る前に、悉く死んでゐるからである。其の生存中は絶えず太公の周圍に集まつてゐたからである。

九八八年には基督教が露西亞に入つて來た。

一一四七年には、モスコイが始めて年代記に現はれた。そしてウラジミル太公の一子ユリが現今存在するモスコイのクレムリン宮殿の處へ王宮を建てたと云ふ史實がある。

傳説俗謡が此都で作られたもので、シベリヤに散在するものは、此の都會で作られた謡が、種々なる事情の下に遠くへ持つて行かれたのである。そして、自然に別のものが、それを模倣して生れたものだと言ふ説明を、更に詳しくしようと思へば、『スロワ・オ・ブルコウ・イゴレヅ・エ』即ち『イゴル軍の言葉』を見ると、よく會得が出来ると思ふ。

『スロワ・オ・ブルコウ・イゴレヅ・エ』の原稿は、ナポレオン第一世がモスコーへ攻め寄せたとき市街が炎上した。そのとき(一八一二年)焼けたと云ふ。然し、其の原稿の寫本があつた。それは、カザリン第二世の手にあつて、その寫本を更に寫したものが、印刷され、傳はり傳はつて今日まで残つてゐるさうである。私が持つてゐるのは、その原稿の遠孫に違ひない。

これは文章の形を取つた謡の中で、有名なものである。十七世紀前に於て文章の形をとつたものゝ中で、またこれが一番最初のものである。

この史謡の内容はイゴル遠征から採つたもので、其の内容自身が、謡の中に活躍する勇士の生存中に出来たものだと言ふ證據そのものになつてゐる。

これを以て見るも、傳説俗謡は主として、その主人公が生きて居る間に、その住んで居た場所から遠くない處で出来たものであると云ふことが解ると思ふ。また古代記と是等傳説俗謡とを比較して見ると、謡の中の勇士が、悉く露西亞人だと云ふことも解る。

その謡の中に於ける勇士の一舉一動や、彼等の風習は、古代武士の作法から見ると一つの典型であつたのだ。かくの如く振舞はねば、武士としての威厳品格を墜すものと見做されたのである。我國近古の武士が上衲や袴を着けるのが、武士の服装の典型であり、腹を割くのが自殺の方法の一つとして、武士の威厳に適つたものとせられたやうな具合であつた。

傳説俗謡發見前後の文學者年代記 (參考)

十一世紀 (古代とする)

露希條約 (古代)

十二世紀 (古代)

ルスカヤ・ブラヅダ・ジデアイタ

ヒラリオン (キエフ管長)

ウラジミル・モノマク (一〇五三年生——一一二五年死) 時代——

十三世紀 (古代)

行脚僧アボ・ダニエル

シリル (ツロフ監督)

ネストル期

キエフ期

「イゴル兵の言葉」時代——

十四世紀

ウラジミル監督セラピオン時代

十五世紀

「ザドンシチナ」期

ニキチン時代

十六世紀

アンドレイ・ミハイロウキツチ・クルプスキ（一五〇三生——一五八三死）

恐ろしきイワン（一五三〇生——一五八四死）時代——

十七世紀

「ドモストロイ」期

ユリ・クリザンチ時代

十八世紀

グレゴリ・コトシキン（一六三〇生——一六六七死）

シメオン・ポロツキ（一六二九生——一六八〇死）

イワン・チホノウキツチ・ボソシユコフ（一六七〇生——一七二六死）

フエオフアン・プロコボウキツチ（一六八一生——一七六三死）

ワシリ・ニキチチ・タチシチエフ（一六八六生——一七五〇死）

アンチオク・カンテミル（一七〇八生——一八四四死）

ワシリ・キリロウキツチ・トレヂヤコフスキ（一七〇三年——一七六九死）

ナタリヤ・ポリソヴナ・ドルゴルキ（一七一四生——一七七二死）

ミハイル・ワシリエウキツチ・ロモノソフ（一七二二生——一七六五死）

アレキサンドル・ペトロウキツチ・スマロコフ（一七一八生——一七七七死）

ワシリ・イワノウキツチ・マイコフ（一七二八生——一七七八死）

ミハイル・ワシリエウキツチ・ダニロヴ（一七二二生——一七九〇死）

大カザリン（一七二九生——一七九六死）

ミハイル・ミハイロウキツチ・ステエルバトフ（不詳）

ワシリ・ペトロウキツチ・ペトロフ（一七三六生——一七九五死）



イワン・イワノウキツチ・ケムニステル（一七四五生——一七八四死）  
ヤコブ・ホリソウキツチ・クニヤズニン（一七四二生——一七九一死）  
セル・アンドレウキツチ・ボロシン（一七四一生——一七六九死）  
デニス・イワノウキツチ・フォン・ヴィジン（一七四四生——一七九二死）  
ミルシル・イワノウキツチ・コストロフ（一七五〇生——一七九六死）  
アレキサンドル・オニシモウキツチ・オゾレシモフ（一七四二生——）  
アレキサンドル・ニコラエウキツチ・ラデイシユチエフ（一七四九生——一八〇二死）  
イポリ・フィオドロウキツチ・ボグダーノウキツチ（一七四三生——一八〇三死）  
ガズリロ・ペトロウキツチ・カメネフ（一七七二生——一八〇三死）——時代  
傳説俗謡の發見と其の出版（一八〇四）  
十九世紀  
ミハイル・マドヴキツチ・ヘラスコフ（一七三三生——一八〇七死）  
エカテリナ・ロマノヴナ・ダシコフ（一七四三生——一八一〇死）  
ミハイル・ニキチチ・セラエフ（一七五七生——一八〇七死）  
プラトン・セヴシン（一七三七生——一八一二死）

イワノウキツチ・ノヴキコフ（一七四四生——一八一八死）  
ガプリル・ロマノウキツチ・デルザヴィン（一七四三生——一八一六死）  
ワシリ・ワシリエウキツチ・カプニスト（一七五〇生——一八二四死）  
ユリ・ネレピンスキ・メレツキ（一七五二生——一八二九死）  
アドリアン・モイセウツチ・グリボウスキ（一七六六生——一八三三死）  
ウラジスラフ・アレキサンドロウキツチ・オズクロフ（一七七〇生——一八一六死）  
イワン・ミハイロウキツチ・ドルゴルキー（一七六四生——一八二三死）  
イワン・イワノウキツチ・ジシドリエフ（一七六〇生——一八三七死）——時代

### 其二の三

十一世紀と云へば、現代から約一千年の昔である。その以前に希臘と條約をしてゐる。それは歴史を讀めば、臆ろげながら知ることが出来る。其の時代に今で云ふ文學などがあつた譯でない。それは、イラリオンがキエフの管長になつてから著しく發達した。イラリオンは處々で説教をする。その説教の中に、ウラジミル頌徳文などを加へたらしい。

此のウラジミルと云ふのは所謂前號に於て述べた「美しき太陽」に擬せられた、キエフの太公

で、今から考へて見ると、餘程偉い人であつたと見え、其頃（一〇五三——一一二五）既にピザンチン文學に精通して居る許りでなく、自らペンを執つて我が子に與ゆる教訓の文章を作つた。

此の教訓文章が、露西亞古代文學の大産物となつたのである。機あらば紹介しようと思ふ。それがずつと下つて十二世紀初葉に、ダニエルといふ行脚僧が出て、（聖地巡禮日記）を作るし、キリルといふツロフの監督が、己れの説教を文章の形にして、時代は漸くネストル期に入り、つゞいてキエフ期（一一一一——一二〇一）に進んで来る順序である。キエフ期の主産物と云ふのは、キエフの君主に關する記録である。キエフ統治者の行狀を記したものである。その他に大したものは無論ある筈がない。これは後に詳しく述べるが、十二世紀末葉に、イゴル及びイゴルの軍に一大災厄が降つて湧いた。その話は其の頃出來た散文詩を見るとよく解る。これが一寸有名になつた。それからまた、ずつと下つて「ザドンシチナ」が出来る。次の十五世紀には、ニキチンが「印度紀行」を作るし、十六世紀にはクロススキー公が「恐ろしきイワン」（イワン恐怖王）の話を書く、イワンはイワンで又、「クルプスキー公へ」と云ふやうな文を作つたのである。

その文章や記録は悉くそのまゝ今日まで残つてゐる。「家政の葉」と云ふやうな變つたものも出來た。これは臺所の切り廻しや、子供の育て方などを書いたものである。

一世紀の間の産物が、僅か一つ二つ生れたと云ふ譯ではない。以上述べた作品は其の時代を代表すべきもののみである。其の時代の人心を大いに惹きつけたと云ふ作品ばかりである。

傳説俗謡が発見され、出版されたのは、これから後のことに屬する。その發見由來に關しては前に述べたから再び繰り返すことをしない。たゞ、こゝには傳説俗謡が文章となる以前に、之だけの文學があつたと云ふことだけを示したので、これだけは承知して置かねば、俗謡を研究するにあつて不都合だと考へたからである。

この傳説俗謡が発見され、出版される三十餘年前に、スマルコフと云ふ文學者があつた。このスマルコフ以前は、未だ文學を一個の専門事業と認めて居なかつたのである。

スマルコフが現はれて、漸く、文學と云ふものは片手間にやる仕事ではなくて、やはり専門に研究せねばならぬものとした。其の點から云へば、スマルコフは露西亞の文人としては開拓第一人者であらう。

このスマルコフの崇拜者に、ワシリ・マイコフと云ふ文學者がある。「エリセイ」といふ傳説詩は、このマイコフが作つたので、擬古文體の始祖である。その以前にも無論あつたが、この人が出て、急にこれが一定の形を造つて了つたから、私は始祖といふのである。

（前の「青い酒」「イリヤの變装」は、マイコフが奨励した形式に偽せた積りである。）

丁度此の當時である。有名な女帝カザリンが佛蘭西文化に心酔して、例のヴォルテールと交際

したり、ルウサウヤモンテスキュを崇拜したのは——文學を禁じたり、ノヅキコフヤ、ラヂシチエフを苦しめたりしたのも、矢張りこのカザリンの仕業である。此の皇后に「イワン・ツアロウキッチ」の作がある。それから、ミハイル・シチエルバトフ公の「露西亞史」が出来ると、ワシリ・ペトロフの「失樂園」(ミルトン)の露譯が出た。

この時、傳説俗謡は未だ姿を隠して文壇の水平線上に現はれず、ミハイル・ヘラスコフが、傳説詩「ロシアド」を發表すると間もなく、突如として出て来たのである。

一八〇四年に傳説俗謡が出版されてから、世間の注目は悉くこれに集まつて来た。研究する人々は日毎に其の數を増して来る。まだ紹介されて居ない謡がぼつ／＼出て来る。すると、これを潤色する人も出て来る。亂暴にも故事に基いて新しく作らうと云ふ者も現はれて、兎に角賑やかな景色になつた。この状態は一八一二年、ナポレオンが大軍を率ひて侵略に来る迄続いたのである。其の後も此の研究は止んだ譯ではないけれども、以前程盛んでなくなつた事は争はれない事實である。

其の當時新作された歌謡は、内容に於ても形態に於ても、古代のものとは比較にならぬ程劣つて居る。歌謡を作つた人は、たゞ昔の事實を面白可笑しく、奇抜に書かうと考へて作り上げたものであるから、それも無理もない話である。

(この新作の傳説俗謡の一番多かつたのは、所謂モスクワ期である。モスクワ傳説俗謡は前二期、即ちキエフ期、ノウオゴロド期の傳説俗謡よりも、其の傳播された區域は廣いと思はれるほどである。)

前二期の歌謡が盛んに唱はれる地方にも流行した。ツーラヤサラトフの如き中央地縣にまで唱はれて居たのである。

これを、それからそれへと傳へ唱つた人々は、無論その作者ではないから、新作されたのではなくて、キエフ期とかノウオゴロド期に發見し切れず、探し出せずに居たものが、新しく紹介されるのだと信じて唱つて歩いたのである。或は全く無意識に唱つてゐたのかもしれない。

傳説俗謡が、半農半職人の間に唱はれたのは、何時頃からであるかといふ事は、未だ説かなかつたかと思ふが、これは確な處は私にも解らない。

然し乍ら一研究者の説を見ると(此の人は傳説俗謡の大家ではない)

「ブイリヌイは現代調に唱ふものである。ボイヤンの調子で唱ふものではない。ボイヤン調は前者よりも新しいものである」と。

(現代調と云ふのは、當時の傳説俗謡特有の調子であることが推察出来る、これからして見ると、謡は殆ど一一八五年以前から盛んに唱はれてゐたものらしい。一一八五年といへば、ウラジ

ミル太公が死んだ年から約六十年ばかり後である。つまり俗謡の中の主人公が逝いてから間もないことだと云ふことが解る。

イゴルの兵士が災厄に逢つたために「イゴル兵の言葉」が出来た。それは十二世紀の末葉で「イゴル兵の物語」が散文詩の形で世に現はれた時、傳説俗謡が文章の形を取つて現れて来る機運に逢着してゐたのであつた。世人は散文詩よりも更に美しき歌謡の出現を望んでゐたのであつた。而も出づ可くして出でず、口傳のまゝ、それから五百年の間、徒らに地中に埋れて居たのである。

五百年の後、遂に傳説俗謡はウオロネツ縣から發見され、それと同時に露西亞の學者をして二派に分たしめた。と云ふのは、或る學者はキエフの露西亞人は悉く大露西亞に屬し、次いで是等の人々は韃靼人に侵されて、生残る者は北へ北へと移住して了つたのである。その時に彼等は、彼等が生んだ詩歌をも北へ移して了つたと云ふのである。

そして現今、露西亞の南部を占めて居る小露西亞人は、棄て去られた土地を埋む可く、ガリシヤ方面から續々出掛けたものだと言ふのである。

處が小露西亞に住んで居る人々に云はせると、自分達は昔から此處に住んで居るのだと主張する。ガリシヤなんぞから來たのではないと強辯する。つまり露西亞にネストル(十二世紀中葉の傳説歴史家)を與へ、「イゴル兵の言葉」を作れる詩人を與へた種族の直系だと云つて聞かないのである。

で、つまるところ小露西亞人の方では、此の古文學即ち傳説俗謡は、此方のものだと云ひ、大露西亞人の方では、いや、それは此方の産物だと云ひ合つたのである。

そんなことは、まづ如何でもいゝとして、獨逸、佛蘭西、ノルウエイなどの傳説を調べてみると、「美しき太陽」ウラジミル太公の家臣「露西亞六十士」(4参照)と同名のものがある。また「ムロンのイリヤ」(10参照)の名がある。

これは基督教が傳來する頃、露西亞の宮廷でも、多少獨逸や諾威や佛蘭西などと交誼を保つて居つた。そしてヤロスラヴのやうに、其の子を獨逸や、諾威、佛蘭西の宮廷に嫁せしめた。ゆめに、露西亞の英雄の名が、この三つの國の古物語にまで用ひられて居るのであらうと思ふ。つまり、そう云ふやうな關係から英雄の名が、他國にまで廣まつたのではなからうかと思はれる。

傳説を研究した人には雜作なく解るだらう。その頃は、讀者も御承知の通り、キエフは露西亞の政治的中心地であると同時に知識の都であつた。地方から遣入り込んで來る田舎侍や僧侶は、種々の傳説を此の都に残して行つたのである。「ワリヤクの兵士」などがその一例であらう。

#### 其二の四

或人の話によると、露西亞文學と他國の文學とを比較すると、何とはなしに露西亞文學は借り

物のやうな氣がする、と云ふのである。即ち露西亞文學は他國の文學の傳來し歸化してたものであると云ふのである。

今少しく其の人の説を紹介すれば、露西亞に基督教が傳來せぬ以前に文學があつたとすれば、その文學は隣國の文學と、何等かの關係があるに違ひないと云ふのである。

成る程ギリシャとの條約を見れば、ビザンチンの感化が及んでゐることは解る。基督教が露西亞に傳來してからと云ふものは、餘り他國と交通しなくなつた。そして、それがために知識の流動は俗語が出版される迄、ばつたり止んで了つたのである。

廣茫たる歐洲の東部に生活する人々は、僅かに一方に、文化に浴せる國を控へて居るばかりであつたから、知識の吸収は出來難かつたのであらう。北の方は北の方で、フィンランドの猙猛な種族が控えて居るために、瑞典人と交通することが出來なかつた。

南の方は、クマニアン人、カザル人のやうな遊牧の民と絶えず争つて居た。其他にも恐るべき韃靼人がゐる。背後には役に立ちさうでない中央亞細亞の野が開けてゐたのである。

只、西北に文明なチュートン族が居つたけれ共、此のチュートン族、即ち獨逸はスラヴ人を嫌つて居つたから餘り交通はしなかつた。

當時、露西亞人が文明の歐洲へ顔を出さうとするには、僅かにポーランドがあつてポーランド

を通じてならば、如何か、斯うか、歐洲へ出掛けて行く事が出来る事情にあつたけれ共、それも、例の頑迷なリスミアニア人が文化に啓發されるに従つて、「ムロンのイリヤ」(俗語10参照)を恐れるに至つたのであると云ふ話である。

#### 「ムロンのイリヤ」の冒頭に

「ムロンの町の片畔、カラヤロフの村内に、老コザックのイリヤ住む。彼は祖母の罪のため、腕もなければ足もなく、爐の上に坐せしき、三十年を過したり。」と云ふのである。

のみならず、十六世紀に於て、英吉利が露西亞との交通を始めた頃も、シグスムンド普魯西王はエリザベス女王に献言して、露西亞に武器は勿論、機械類を輸出する事を禁じた程で、露西亞は物質文明の闇黒に放置されてゐた譯だ。従つて基督教をビザンチンから輸入した關係上、如何うしてもビザンチンの感化は免れまいが、傳説俗語はそれより遙か前にあつたもので、ビザンチンの感化とは、没交渉であると思ふ。

南部露西亞が韃靼人の侵略を受けたのは十三世紀で、南部露西亞の文化が荒廢に歸したのは、リスミアン人が押し寄せて來た十四世紀からつゞいて十五世紀である。

三世紀間連續的に苦められた露西亞人は、漸く「美しき歌」を記憶から失ひかけたのであつた。

處が下つて十六世紀に入る頃、南部露西亞人は互に團結して、コザック自治體を作り、面目を一新したのである。

これによつて、傳説は一新紀元を作ることが出來た。そしてキエフ期の傳説をも壓倒するに至つた。

是までの傳説俗謡は地に墜ちて、唱ふ者が少くなるに従つて、コプザルは益々盛んに横行し、新種族のコザック英雄の名は天下を風靡するやうになつて來たのである。

(コプザルと云ふのは、マンドリンのやうな樂器(コプザ)を携へて諸方を流浪し歩き、傳説俗謡を唱ひ、それによつて多少の報酬を受けて、渡世して居た人々のことである。)

一方、キエフや其の附近から、外敵の爲に追はれて、北へ北へと移住して行つた人々は、淋しい思ひをウラジミル期の古歌に紛らはしては、常に懐しき南の故郷へ歸りたがつて居たのである。昔の家に戻る心は、全く矢の様であつたと云ふ。

北へ移住した人々は、長い間の年月に古いスカンチナビヤの叙事詩を知るやうになつた。そしてその叙事詩を文章となした。それは中世紀頃のことである。

古事歌・傳説俗謡で、シベリヤに存在するものの中には、古いスカンチナビヤの産物も混つて居るやうである。つまり、これがためだらうと思はれる。

## 其二の五

傳説俗謡の話をするには、史歌のことも述べて、お互に兩者の區別を立てたいと思ふ。傳説俗謡と史歌とは別ものである。前者の方が古いことは云ふまでもないことで、史歌も矢張り俗謡と同じ形式であり、古い史歌の中には、韃靼人の露西亞侵入などが主として詠つてある。また中にはシベリヤに於ける、エルマークの功績とか、「恐るべきイワン」に關するものも少なくない。

〔史歌の一二例を示すならば

(1) エルマーク(コサック)

(2) ボイヤルの死刑

のやうなもので、此處に附けた番號は後に参考に引くためである。〕

既に史歌に就て、傳説俗謡との區別を述べた。次には、俚歌(俗謡)〔コリヤード〕にも、一言を費す義務があらう。俚歌も史歌と同様に、傳説俗謡に比ぶれば、ずつと新しいものである。

俚歌の中で世人によく知られて居るものは、「コリヤツカ」であらう。それはクリスマスや新年の前夜に唱ふので、例へばクリスマス祭に、習俗として卓子の上に、水を盆や鉢の類ひに容れて、其の前で人々の運命を占ふのである。かやうな場合に運命を占なつて貰ふ人々は、指環とか首飾

りとか、それを持たない人は、パン屑や石、石炭などを、静かに水中に沈めるのである。

(ジユコヴスキーの「スウェトラナ」(参照))

すると運命占言者が、何とか宣託する。宣託の最中に所謂「鉢の歌」を歌ふのである。水の中から沈めて置いた品物を取上げる際にも歌ふのである。

愛唱される俚歌に

(1)「コリヤヅカ」 (2)「鉢の歌」又は「盆の歌」 (3)「ドーズ」 (4)「いつはらぬ戀」 (5)「乞食歌」 (6)「嫁入うた」 (7)「春の歌」 (8)「別れのうた」

などがある。これも番號は後に参照するほかに意味はない。以上は私が持つてゐる「ボルヌイ・ルスキー・ピエセニツク」から抄つたもので、この稿を起す時に、探し得た俚歌に次のやうなものがある。

(9)「麵麩うり」 (10)「泣く孤兒」 (11)「嫁入と衣裳」 (12)「葦露歌」かなしき歌」 (13)「子を失へる母」 (14)「別れの場面」

機會を見て私はこの民謡をも紹介しよう。

## 其二の六

私は前條に於て、露西亞の傳説俗語は神話に基づいたものではなくて、地上の人間の記録だといつた。今其の理由とも云ふ可きものを示せば、元來、神話が何處の國にも傳へられてゐるが如く、露西亞にもあるが、それは全く地上に屬す可きもので、荒唐なる天上のものではない。

(アールヤ人の神話は、これを地上自然の森羅萬衆の中に求めて、始めて得べきものであつて地上自然から或るものを抽取つて、之に神の名を附けた。色々の自然物象に向つて神の名を與へたから、其の神は一つに限らずして幾つもある譯だ、と云ふ風に。)

石に向つて神の名を與へたとすれば、その神は、水に向つて名づけられた神とは、自から性質を異にせねばならぬことになる。この點は希臘の神々とよく似通つてゐる。彼等は、此の多くの神の子孫と稱してゐた。此の自然神話の特徴は、偶像禮拜時代から育まれたものと思はれる。それは前にも大體述べたやうに)

露西亞人は此の自然神話の神々を局限するに、その對象を、其の時代の歴史的事實、歴史的人物に求めた。

これは單純なる無生物(例へば木像とか石神、偶像崇拜時代から幾らか後のことである。とこゝろでこれより、生物崇拜期に移つて、歴史的乃至社會的に傑出した人間を神と認め、これを崇拜するやうになつた。「美しき太陽」のウラジミル太公は其の一例であらう。

英雄豪傑も其の一例であらう。この心理的傾向は、基督教が露西亞に入つて、露西亞人の心に革命の渦巻を起してから、動かすことの出来ぬ時代精神となつて了つた。

であるから、假令傳説俗謡の或るものが、露西亞の自然神話に基いてゐるとしても、要するに其の神々は私共と同じ、手と足を二本づゝ備へて居る哺乳動物に過ぎない。私が神の傳説でなくて、人間の傳説であると云ふのは此の邊の意味である。

また土耳古人や蒙古人が、佛教による傳説を傳へるに忠實であつたとしても、この二國の人々と露西亞人とが接觸して居たからとて、露西亞個有の傳説を忘れ盡して、佛教傳説を傳へ、それを根據として俗謡を作つたと云ふのは、聊か早計だらうと思はれる。

もしもそれが事實だとすれば、露西亞には此國特有の傳説はなくて、あるものは、皆外國からの貰ひものか、それとも借り物と云はねばならなくなる。

此の説をなす學者は更に云ふ。露西亞傳説俗謡又は英雄傳説は他のアーリヤ族傳説と、其の種族、系統に於て相似であつて、此の點は何人と雖も否定する事は出来ぬ、と。

この相似點に於ては、特にリグ、ウエダ、ラマヤナ、ウエツダ、アルチックなどの傳説が密接であると。

これは左様かも知れぬ。然し韃靼人や蒙古人の源を尋ねて、甲と乙、乙と丙、丙と丁と云ふ鹽

梅に、何も彼も同じ一根から分派したなど、決めつけるのは賛成出来ない。

餘り詮索し過ぎる嫌ひがあるだらう。第一他國の俗謡は別としても露西亞のものは、傳説に現はれてゐる思想が別物であるからだ。

そこで次に、傳説俗謡の代表的作品「商人サツコ」を紹介し、他に俚歌及民謡を翻譯して、傳説俗謡との比較研究をしようと思ふ。

### 其三の一

ニコライ・ゴゴリ作喜劇「檢察官」の第二幕の第三場で、ペテルスブルグのチノヴニク役人を勤めてゐる、イワン・アレキサンドロウキッチ・フレスタコフと云ふ男が、「母よ妾が爲に織る勿れ」の歌を唱ふことになつて居る。

これは有名な、而も餘程古くから露西亞人に愛唱されてゐる俗謡であると云ふことで、「檢察官」が露西亞で屢々上演されるために此の歌も廣く識られてゐる。

今、此の俗謡を、リトルフ氏、リブニコフ氏の民謡集より抜いて譯すれば、次のやうなものになる。但し歌の名は「フランニ、サラファン」(赤衣着物)と云ふ。

「織りやさんすなよ。妾のための



赤い着物を。のう母さまや  
花嫁ごろもは作るが無益  
妾しや嫁入したかない。  
解かにやならない、たちまちに  
折角結ふた麻の髪

(娘時代の鬘を崩さねばならぬから嫌だと云ふのである)

「綺麗にからんだ、此の頭飾  
可愛い、まゝに置きやしやんせ。  
絹の面帕かなぐりすて、  
妾しや、氣儘になりたいわいな。  
男まよはず、此の眼と心  
もつと綺麗な人はない。  
妾しや恥かしいのよ。娘の頃が  
輕蔑するのよ。わが一生を  
嫁に行くのは笑を涙

歡喜を苦嘆に替ゆるも同じ  
いやよいやよ、妾はいやよ  
黄金の自由は何より貴重。  
生きて居るのは、少かの間  
氣儘氣儘。人の妻にはなりやせぬ。

(後節を省く)

次に掲ぐるのは、露西亞の有名なる代表的民謡である。

### 嫁入唄

往古にあつては、嫁を貰ふのに、これを盗んだものである。それから盗む風習が漸次廢つて、買ふやうになつた。つまり嫁は買はれて來るわけであつた。この「嫁入唄」も此の時代に出來たものであると云ふ。

「彼女の母はマリウシカに諭しぬ。

彼女の愛するエフイモヅナに諭しぬ。

「行くなよ。我子

行くなよ。我愛子

林檎を取りに汝が父の園へ

捕るなよ。斑ら色の蝶

驚ろかすなよ。小さき小鳥

妨ぐるなよ。鶯の澄める聲

汝もし、林檎を取らば、

其の樹は枯れむ。

斑らの蝶を捕ふれば、

其の小蝶は死すべし。

まつた、小鳥を驚ろかさば、

其の小鳥は飛び去らむ。

鶯の澄める聲を妨げなば

鶯は啞と變らぬ

されど、捕へよ、我子

捕へよ、我が愛子

野に光る彼の鷹を、

緑の廣野。」

マリウシカは捕へぬ。

愛するエフイモヅナは捕へぬ。

野に輝くかの鷹を

その緑、その廣野。

彼女は鷹を手に取りて、

母の許へ持ち行きぬ。

「母よ、妾がゴスダリニアよ

妾は輝く鷹を捕へたり。」

(此の唄完)

### コリヤヅカ (其二の五参照)

コリヤヅカの説明は(其二の五)に於て簡単に述べてある。今、その謠を示せば、次のやうなものである。

若い男や、若い娘は、「此のコリヤダ」を唱ひ乍ら、村々を練り歩くのである。然し、これは必

すしも貧民の仕事と限つたものでない。中流家庭の女子でも、此の唄を唱し歩いて、  
『何か頂戴な』

と云ふ。謡を唱つて貰つて聽いてゐる家々では、何に限らず、菓子なんぞを此の青少年男女へ呉れる。貧乏者だから、可哀想で恵むと云ふ意味ではなくて、愛嬌に呉れるのである。それは新年前夜か、クリスマスである。

『河の彼方に、早瀬の彼方に、

ホイ、コリヤヅカ！

密林ありて、

森の中には、火が燃えてゐる。

偉大なる火が燃えてゐる。

その火の周圍に椅子あつて、

櫛の椅子あつて、

椅子の上には善い若者が、

善い青年と、綺麗な乙女、

コリヤヅカを唱ひをる。

コリヤード。コリヤード、

その中央に老爺が踞み、

はがね小刀を磨いで居る。

大きな釜は、ふつ／＼沸る。

釜の側には野羊が一匹、

殺されるのを待つてゐる。

「我がイワヌシコ

出てこい、飛んで来い」。

私が飛んで来て居つたなら。

でも、此の光る石。

私を釜へ押し込める。

黄色の小沙が、

私の心を吸ふて噪がす。

ホイ、コリヤヅカ。ホイ、コリヤヅカ。

(此の唄完)

鉢の歌（其二の五<sup>2</sup>参照）

これも、其二の五に於て略記してある。唄は次の様である。

「天鷲絨を轉び下る一つの小粒——天榮あれ！

如何なる眞珠玉も是程澄明ならず——天榮あれ！

轉びしルビーに眞珠玉較ぶれば——天榮あれ！

最も美しや——天榮あれ！

ルビーの側にありて眞珠玉の大きさよ——天榮あれ！

花聲、花嫁、目出度かれ——天榮あれ！

其三の二

獨逸の民謡に、ライン河を唱つたものが少くない。今は殆んど俗謡化して了つてゐる、ハイムリッヒ・ヒハイネの「ローレライ」と或點がよく似てゐるものに、露西亞の「海賊ステインカ・ラーチン」がある。

これは傳説俗謡と史謡と民謡との特點を具へてゐる謡である。

古い昔のことである。ヴォルガ河を上下する海賊船があつた。海賊の巨頭を「ステインカ・ラーチン」と云ふのである。此の男は所謂義賊であつた。だから貧乏仲間からは大いに敬はれ、部下からは畏れられてゐたと云ふのである。

彼は中年に達して戀を知つた。平たく云へば、頗る美人の戀人が出來て、夢中になつたお蔭で、部下を顧ることを忘れ、部下の心は漸くステインカ・ラーチンから離れやうとした。餘程感のいゝ海賊と見えて、彼は部下の不平を知つて大いに煩悶した。煩悶の結果、考へついた。

戀人も大事であるが、十幾年の長い月日に生死を共にする覺悟で暮して來た部下は、更に貴いと云ふのである。

深夜、ステインカ・ラーチンは船を抜けて、戀人に逢ひに行く、其の夜彼はヴォルガの流に戀人を投じた。

部下の不平は消える。彼の心は昔に歸らうとしても、左様は行かなかつた。戀人を憶ふ心は彼女が生ける日よりも烈しかつた。戀人を殺した翌夜、彼も亦、女の跡を追ふて、ヴォルガの水底に己れが五體を葬つたのである。

これ丈の話である。ヴォルガを詠つたものに「愛するヴォルガよ」がよく唱はれる。

これで傳説俗謡のことは、一通り書いた積りである。詳しく述べれば際限がない。私は、前號

に於て約束した代表的傳説俗謡「商人サツコ」と民謡一篇とを紹介して、本稿を次回で切り上げやうと思ふ。

### 其終りの一

——人馴れし熊は自由に遊び

草原萬物生氣溢れ

仕事に家庭の平和あり

朝は短旅を行くによし

女の小唄子供の聲

野碇の響す——

——フウシユキンの天幕小屋から——（露西亞ジプシイ小唄）

露西亞に此の *Tiigan* があり、獨逸に *Tigener* があり、佛蘭西に *Bohemien de France* があり、英吉利に、亞米利加に *Sipsy* がある。けれども生活様式が少しづつ變つて居るやうに、是等半浮浪群の唄にも變つた處があり。此處に掲げた短い文句が、露西亞ジプシイの特徴を示してゐると思ふ。これは別に古い唄と云ふ譯でない。思ひ出したから序でに書いたのである。

（其三の二）に私は「海賊ステインカ・ラーヂン」の梗概を述べた。此の謡は私も、以前露西亞から渡つて來た大學生バラライカ團が唱ふのを日本で聞いた。其の以前にも度々聞いたが、今、「Musique Hieret de demain」の著者アルフレッド・ブリウノウ氏著、一九〇三年發行の「*MUSIQUES DE RUSSIE*」を見れば、「*Il yint de st, Petersbourg accompagne d' un orchestre- excellent aui song sa direction jouna " Stenka Razine-etc" 云々。*」

IIといふのは、有名な民衆音楽家リムスキー・コルサコフ氏のこと、コルサコフ氏が一八八九年に開かれた萬國博覽會に、トロガダイロで、「*Dans les steppe de l' Asie centrale*」を演奏した際に、ステインカ・ラーヂンを謡つたと云ふのである。

此の時の樂器は無論、ドムラやバラライカなどであらうと思ふ。此のステインカ・ラーヂンは、河に投じて自殺したことになつて居るけれども、事實は彼は、一六七一年に刑死したのである。

### 其終りの二

#### 商人サツコ（代表的傳説俗謡）【逐行譯】

榮あるノヴァオロドの町に、樂手サツコ住めり、

彼に黄金の寶なく、一日華麗なる宴に行けり、

彼の奏樂に、商人も貴人も歡び合ひぬ。

或日の目出度き宴に、彼は招れざりき。

その次の宴にも、その次にも。

かくて彼は頻りに悲しみ、イルメン湖へ走り行きぬ。

青き石に腰打かけて、奏を始めぬ

彼が秘藏の楓樹の堅琴、朝まだきより夜更くる迄。

湖の波忽ち起り、湖水は砂を混へて逆卷くに。

サヅコは恐れを抱き、恐怖は彼を襲ひぬ。かくて彼は急ぎ、ノヴオゴロドに引返したり。

暗き夜は過ぎ行き、其次の日は明けたり。

されど、猶、宴にサヅコを招く者なし。

彼は再び湖畔に行きて終日樂を奏で

夜に入り恐れをなして退きぬ。

次の日も何人の彼を招く者もなきまゝに

行きて青き石に腰打ち掛け、楓の琴を彈ず。

浪は湖心に起り、砂を混へて逆卷きぬ。

されどサヅコは勇を鼓して奏で續くるに。

ワタルボヤノイ水精湖底より現はれ出で、云ふ

「多謝す、汝、ノヴオゴロドのサヅコよ！よくこそ湖底の住人を樂ませし哉。我は目出度き宴

を催し居たるなり。汝のために、水底の客は、

みな興を催して歡べり、さて識らず、我、如何なる賞を汝に與へてよきや。

されど汝サヅコよ、汝はノヴオゴロドへ歸れ。

されば、明日は富める宴に招かれむ。ノヴオゴロドの豪商も其席にありて飲み且つ食はむ。

かくて一人一人は己が自慢をすべし。或者は良馬を誇らむ。或者は青年時代の武勇を。

或者は彼がありし日の昔を誇らむ。

されど、賢き者は彼が老ひたる父を、母を、

また、無邪氣なる年若き妻を誇らむ。

その時、汝サヅコも自慢話をすべし。次のごとくに

「余はイルメン湖中に、金色鱗の魚あることを知れり。」と

さるときは、彼等は同音に、さる魚は世にあらずと

争ひ云ふべければ、汝は彼等と賭をせよ

汝の狂暴なる首と、彼等の市場なる貴き品々とを。

かくて汝は絹網を振り湖畔に至りて投ぜよ。

一投一魚、我汝に金色鰭の魚を與へむ。その時に。

汝は市場の貴き品々を受取れば、

汝は、ノヴォゴロド商人貴客サヅコとなるべし。」

サヅコはノヴォゴロドに歸りたるに、翌日果して貴き宴に招かれぬ。

富商は飲み食ひ、彼是と自慢話を始めたり。

彼等はノヴォゴロドのサヅコに向ひ問ふらく

『サヅコよ、汝は何故に自慢話をせざるか

話の種なきか、自慢の種なきか、サヅコよ』

サヅコは答へぬ。

『否とよ。ノヴォゴロドの商人等、自慢話なきかと問はゞ云はむ。

無盡蔵黄金の寶は物のかすならず、そはまた美しき年若の妻にあらず。余に誇るものなし、さ

れど云はむイルメン湖には金鰭の魚ありと！』

富商等は忽ち彼と争論し始めたれば、彼は云ふ

『余は我が狂暴なる首を賭けん。其他に賭物なし』

『我等は市場の貴重品を賭けん。六人の富める商人が市場を！』

然る後彼等は絹網を振ひて湖水へ投じに行く。

第一投に金鰭の小魚を獲たり、第二にも、第三にも、

ノヴォゴロド商人等は、爲す術を知らざりき

萬づの事、サヅコの言葉通りになりければ。

彼等は市場を開きて貴き品々をサヅコに渡しぬ。

そを受取るサヅコは此日よりノヴォゴロドの富商となり

己が町にも地方にも商ひを廣めて、巨利を博しぬ。

かくてノヴォゴロドの富商サヅコは此處に妻をめとり

白き石もて邸を建て、こゝにすべては神の代の如し。

空には赤き太陽燃え、邸にも赤き美しき日は輝けり。

空に仄かの月あるごとく、邸にもまた月は光りぬ。

群星空にある如く、彼が塔にも星きらめきぬ。

サヅコは手を盡して白石殿を美しく飾りたる後に、祝宴を張りて、ノヴオゴロドの富商、貴人、役人を招きぬ。役人の名は、ルカ・ジノヴィエフ。

トマ・ナザリエフ。

一同飲み且つ食ひ、例によりて自慢話を始めたり。或者は駿馬を、或者は勇力を、或者は青年時代を賢者は彼の老父母を、若き妻の無邪氣さを。されどサヅコは邸内を逍遙しつゝ叫びぬ。

『やよ、ノヴオゴロドの豪商達、貴人達、役人達、つゞいて市民よ、汝等は我が邸に飲み食ひて何を談らんとするか、また我とても何を高言せん。我黄金、寶は無盡蔵なり。華裳は着破るべくもなし。我侍従武士は買収し難し。我等は黄金の寶を誇とせん。その寶もて、ノヴオゴロドの萬器を良惡の別なく買ひなば全市に器の影は絶えなむ。』

此のときトマとルカの兩吏は速かに立ちて云ふ

『それをもて我等と賭するによし』

サヅコ答へて云ふに

『我が無限の寶に何を以て賭くるか』

兩吏はノヴオゴロドの民のために辯ずるに

『汝サヅコは、三萬金を以て我等に賭を張れ』

かくてそは諾されて、人々は宴席より散り退きぬ。

翌朝早く起出で、サヅコは侍従武士等を目醒まして

彼が寶のうち、彼等が望むまゝの物を取らせ

彼等を市場へ遣しぬ。されど彼も直ちに市場へ向ひて

ノヴオゴロドの凡ての器具を、良惡の差別あらばこそ購ひぬ。

翌朝再び早く起き、武士等を起して望むまゝに

寶を興へて市場へ行くに、前よりも更に數多き器具ありたれば、彼は總ての種類をまた購ひぬ。

かくして、第三の日に、彼が市場へ行けば、

そはノヴオゴロド方の勝利とてか、モスクワより

無數の器具は急ぎ市場へ運ばれ居たれば、

市場の店々は、これにて溢るゝ許りなり。

サヅコは考へに沈みたり。



『我もし、モスクワより來れる品々を買ひ盡さば、器具は猶も海の彼方より續々來るべし。我  
迎も是等廣き世界の品々を買ひ盡す能はざるべし。』

我れサヅコは、富める商人なれど、此度の勝利はノヴォゴロド方にあり。市は我より富めり。  
我はいさぎよく、三萬金の大賭を棄てむ』

彼の三萬金を投じ、是處に於て大船を造りぬ。

三十隻の暗赤き船と他に三隻と

船首は野獸に似て、船側は龍に似たり。

赤樹の船體、絹の繩索、麻の大帆、鋼の錨。

船眼は貴き風信子、船眉はシベリヤの黒貂皮

船耳は黒灰色のシベリヤ狐皮を用ひたり。

此の赤き船は、ノヴォゴロドの器具を山と積み、

ヴォルコフ河を下り、ラドガ湖を経て、彼のネヴァへ向ふ。

その水路は青海原へ通すれども、彼は船を「黄金の遊牧民」へと進めて其處に

船に積みし器具を賣り拂ひて巨利を得たり。

數多の箱は、赤金、白銀、美玉、眞珠にて滿ち滿てり。

船は「黄金の遊牧地」を離るれば、サヅコはまた

主船「鷹」に乗りて船々を導きぬ。

されど、青海に出で、より、赤船は急に止りぬ。

波浪は打寄せ來り、風は吼え立てぬ。

帆は風に翻りて、船は少しも進む事なく

其場に停止して、早動かすなりたるに、

富商サヅコは良船「鷹」より絶叫すらく、

『やよ、友よ、船人等よ、錘を下ろせ。』

青海を測れ、暗礁岩石砂地なきか』

彼等は測りぬ。されど一物もなければ商人サヅコは部下に向つて云ふ。

『やよ、勇敢なる侍従武士。我等は暫く航海したり。十二年の長日月を。然るに我等は海神ツァルモリスコイ

に對して、今日迄何物をも捧げざりき。そが爲に今に到りて海神ツァルモリスコイは我等が青海に沈まんと

を命ずると見えたり。汝等赤金の箱を海に投ぜよ』

彼等は命の通りに行へども、浪は高く、帆は破れ、船々は制せられて、猶も動かざるにより、

富人サヅコは再び云ふ。

「やよ、海神の供物少し、今一箱投ぜよ、純銀の箱を！」  
されど、猶暗赤色の船々は動かざれば、美玉眞珠の箱は青海に投せられぬ。そもまた無益なり。  
サヅコは今一度云ふ

「我が愛する勇敢の侍従武士よ。既に海神ツリシメトスミコイは我等のうちより一人を海底に呼ぶと知れたり。  
汝等運命の木札を造り、札に各自の名を認めよ。運ある者の札は浮ぶべし。されど沈める札の  
主は、我等のうちより出で、一人海中に沈むべきものなり。」

サヅコの命は果されたり。されど

サヅコの運命こそは、蛇麻草の花の總とはなれり。

サヅコ以外の船人の札は、家鴨の如く海に浮びぬれど

サヅコの札は石の如く海底に沈みけり。

富商サヅコは再び部下に向つて云ふ

『この運定めは不公平なり。これより各自他人の札を定むること、河柳を用ひて名を記せよ』  
彼等は命に従へり、然るにサヅコ一人は、海の彼方の叙里亞都グリスカスの鋼にて運を定めぬ。

かくして、他の札は軽々と浮べど

ナブートの彼の札は、哀れ沈みければ、

サヅコは種々の樹を以て試み驗し、最も軽きを撰べり。

されど、部下の重きが浮ぶとき、

軽き彼の札は愈々重きを加へて沈めり。

彼の運命の札は夢浮かばざらむ。

まつた部下の運命の札は夢沈まさるべし。

富人サヅコは云ふ。

「我れサヅコは、早せん術なきこと明かなり。海神ツリシメトスミコイは青海に我が身を招くなり。やよ、我が  
愛する勇敢の従者武士よ！ 大墨壺と鷲鳥羽筆と紙とを持ち來れ。」

愛する勇敢の部下が、此の品々を運びくるを取り、

檜樹の椅子に凭りて、彼が所有物の名を記しぬ。

そのうちより、多くは神の寺院に與へ、

多くは貧しき彼の兄弟に、彼の若き妻に、

その残りは彼の勇敢なる護衛武士等に與へたり。

かくして後、彼は泣き、部下に向つて云ふ。

「おゝ、我部下よ、愛する勇敢の者共よ！ 汝等檜樹の船板を青海の上に置け。我れサヅコが、

其の上而降らば、青海の上にて命を棄つるに恐るゝことなからむ。まつた兄弟よ。鉢に純銀を充たし、他に赤金を入れ、また他の鉢に眞珠を満たして、其の船板の上に置けよ』

かくて彼は聖ミコラの像を右手に取り、

左手には小さき楓樹の豎琴を取れり。

金の美麗なる琴絲見えたり。

彼は高價なる黒貂皮の外套を掛け、一同に打向ひて、  
いとも悲しく泣きつゝ、別れを告げたるなり。

船は、そのまゝ白き世界へ

崇巖のノヴォゴロドへと向ひたり。

彼は海原の樅極の船板に下り、海の上に身を置くに、

彼の暗赤色の船々は黒鷗の如く

迅やかに飛ぶがごとく走り行きぬ。

ノヴォゴロドの富商サヅコは異常に怖れぬ

樅の船板にて海原に浮ぶとき。

さは云へ、彼はやがて眠りに陥ちぬ。

あゝ、彼が目醒めたる時、身は大洋の底にありき。

彼は透明の波間に赤陽の沈むを見ぬ。

次に、彼は海神の住むてふ白岩の宮の、かたへに佇めることをさとりたり。

海神は神座の藁束に座して云ふ。

『サヅコよ、ノヴォゴロドの富商よ！ 我は汝を此處へ迎へたるなり。汝久しく海に航せるに拘はらず、海の王に何の供物をも捧げざりしたため、汝は今、我に對する供物として來れるぞ。

我、汝に問ひ、汝の答を得んために呼びたるなり。今露西亞にて最も偉大の價値あるものは何なりや、金か銀か、叙利亞都の鋼鐵か？ 我は此問題にて海女神と論争したればなり。』

『金と銀とは露西亞にて、いと貴し。されど叙利亞都の鋼もそれに劣ることなし。何故なれば金銀はともかくも、鋼、鐵なければ人は生活する能はず。』

とサヅコは答へぬ。

『汝は右手に何を、また左手に何を持つか』

『右手には聖ミコラの像あり。左手は樂器』

『聞くならく、汝は豎琴の名手なりと。我ために一曲彈ぜよ』  
と海神は云へり。

サヅコは悟れり。海底にありては彼の命に應ずるの外なしと。

かくて彼は豎琴を取り、弾き始むれば、

海神は俄かに踊り狂ひ、彼の長衣の裾もて

鬨を造り、外衣の袖を振はせけり。

美しき海女の合唱舞踊するにつれて、

海人の群は跳躍し舞踏しぬ。

かくすれば青海は黄色の砂に濁り渡り、

巨浪大波狂ひ荒れつゝ、數多の船、數多の人を沈め卷込む。

サヅコは三ときが間、弾じ居たるに、

海女人は彼に向つて云ふ

『汝の豎琴を破れよ！ノゾゴオロドの富人よ！汝の目には、海神が宮殿裏に踊りつゝあるやう見ゆれど、彼は海岸にありて踊れるなり。そがために數多の人々は溺れ亡び、凡ての罪なき者は失はる。』

サヅコは豎琴を破り、黄金の絃を切り絶ちぬ。

されど海神は猶も二三彈ぜよと命ずれば

彼は、豎琴は既に破れたりと大膽に答へしに

そを繕ふに鍛工ありと海神は云ふ。

サヅコは折り返し、そを繕ふことは

聖き露西亞に於てのみ出來得べしと云ひぬ。

『汝、此處にて妻をめとらざるか。汝は青海にて美しき處女を妻に持つ心なきや』

と海神は問ひぬ。サヅコは答ふ

『青海にありては、我は海神の意に従ふべし』

海神は彼に云ふ。

『汝、商人サヅコよ。第一の三百の女のうちより一人をも選ぶ勿れ。假令海女神が汝に勸むるとも、彼女等をして行き過ごさせよ。まつた、第二の三百人の女も同様にせよ。かくして第三の、最後に來る女を汝の妻とせよ。彼女は背低く、顔の色他より黒かるべし。されど心して、彼女に接吻し、體に觸るゝこと勿れ。これを守らば、汝は再び聖き露西亞に行き、美しき太陽の白き世界を見得べければ也。若し汝が彼女に接吻せば、汝は永久に青海の底にありて、白き世界を仰ぐこと能はざらむ』

サヅコは言葉の如くに、第一の三百の處女と、

第二の三百の女とを歩き過ごさしめ、第三より、最後に來りしチエルナワなる處女を選びぬ。海神は彼の爲に大祝宴を張れり。

サヅコは横たはりつゝ深き眠りに落ちぬ。

かくて、漸く醒めたる時に、彼は發見しぬ、

彼はチエルナワ河の峻岸にあることを。

眺め渡す彼の眼に映れるは、

ヴォルコフを急航し來る彼の赤黒き船々なり。

即ち、船にありては勇敢の彼の部下達が、青海の底にあるべきサヅコの事を案じゐたるなり。

峻しき岸に立てるサヅコの姿は、

この時、部下の眼にもとまれり、

青海に残し來し彼のことなれば、

彼等は驚異しぬ。彼等に先んじて町に歸りしとは！

かくて彼等は歡び騒ぎ、サヅコを祝ひぬ。

やがて、彼の邸に行きしとき、彼は

年若き妻に會釋したる後、赤黒船の荷をおろしぬ。

聖ミコラの寺院と、聖母の寺院とを建立し、

彼の罪の許しを乞ふとて祈りけり。

かくて再び彼は青海に船を浮べることなく、

町の邸に安樂に暮したりき。

此の一篇は、ギリシヤ神話のアリオンや、アラビヤ物語にも似通つた點がある。けれども、私  
は全然別物だと考へる。謠中の人物及事柄は事實である。海神又は海王は勿論露西亞皇帝ではな  
い。主人公のサヅコは、百歳の壽を保つたと云ふ記録があり、また國內諸々の寺院の建築を企て  
ゝ果したと云ふ話もある。其の考證は確でないにしても、この人の傑物であつたことは事實らし  
き。

### 其終りの三

#### エルマーク (代表的史話)

光榮あるサラトフ草原の上

サラトフ町の下

カミシン町の上

自由民コサックは集まり

彼等仲間は徒黨を組めり

ドン河のコサック、ゲレベンとヤイク

彼等の首領はエルマーク、チモフェイの子なり。

彼等の隊長はアスバシカ、キブレンチの子なり

彼等は小圖を企てたり。

「此の夏此の暖き夏は過ぎつゝあり、

寒き冬は近づきつゝあり、兄弟よ

兄弟よ、我等は何處に此の冬を過さむ？

ヤイクに行けば、恐ろしき狹路あり

ヴォルガに行けば、盜賊と思はれ

カザンの町へ行けば、帝王あり、

帝王イワン・ヴィシレウキッチー——恐ろしや。

彼處に彼は大軍を擁す。

「彼處にて、エルマークよ、汝は絞め殺されむ、

そして我等コサックは征服され、

強固なる牢獄に投ぜられむ」

チモフェイの子、エルマークは説き出しぬ。

「氣を付けよ、兄弟、氣を付けて

我がエルマークの言を聽け！

此の冬をアストラハンに過さずや

美しき春巡り來なば

兄弟よ、我等は侵掠に出でむ

恐ろしき帝の前に、我等が酒を得ずや。」

「おゝ、兄弟等よ、我が勇敢なる首領よ！

我等は銘々に船を造らむ

毛皮の橈架を、

松樹の橈を、

兄弟等よ、我等は神護の下に行かむ。

嶮山を越えずや、  
不貢の國に入らずや、

帝王、我等の主君は以て喜ぶべし

我れは自ら、白帝の許に行かむ

我は黒貂皮の皮外套を纏ひ

我は白帝の許に行きて、我が恭順を示す

「おゝ、君は我が希望なり、正教派の帝王よ、

我に死刑を命ぜずして、我が言を述ぶるを許せ、

我はエルマーク、チモフェイの子なれば！

我は盜賊なり、ドンの首領なり。

青海に航せるは我なりき、

青き海を越えて、裏海を、

そして、數航を打ち破りし者、

我等の希望、我等の正教信者の帝王よ、

我は我が反逆者の首を君に齎さむ、

それと共にシベリヤ帝國をも進すべし』

正教派の帝王は云へり、

彼は口を開けり、恐ろしきイワン・ヴィシレウキツチ

「おゝ、汝はエルマークなるか、チモフェイの子の汝は、ドンの首領なるか

我、汝と汝の徒黨を赦すべし

我、汝の信すべき忠勤により、汝を赦すべし

我、汝に相續財産として、光榮ある温順のドンを與ふべし』

(此の講完)

これはエルマークの功績を讃めた史話で、此の外に知られてゐるのに、ピョートル大帝のアゾフ  
占領や、クセニヤ・ポリソヅナ妃のことなどがある。皆當時の作に成るもので珍らしい。(以下  
参考)

「ボージ・ツアラ、フラニ」

「バフチサライの泉」

「コマリンスカヤ」

「ヨランダ」

「ツフルの許嫁」

「ドヴプロウスキ」

「ルース・アムール」

「石のまらうど」

「荒野にて」

「コパンチナ」

「ムラダ」

「エフゲネ・オニエギン」

「ボリス・ゴドゥノフ」

「皇帝に捧げたる命」

「ルスタンとリウドミラ」

「コウカサスの囚人」

「ルーサルカ」

などは各々有名なる民樂家によつて唱はれて來た史譚である。けれども、是等のうちには近代の作になるものが多い。参考のために掲げて置いた。

其の一から、其の終りまでに、私は大體に於て露西亞傳説俗譚の話を終へた積りである。民譚や史譚を挿んだのは、比較研究に便ならしむるがためである。

傳説俗譚から色々の時代を経て、今日では、やゝ散文體の民譚が生れるやうになつた。遙かに千年の昔にさかのぼる時は、其處に一つの傳説俗譚があつたばかりで、それから耳と目の兩岐に分れた。耳の方は民譚になり、目の方は今日の小説になつて居る。

私は今迄諸君と共に、耳の方を研究して來たのである。耳の方だから耳で聞くのが眞實であるけれども、何うも仕方がない。

最初は佛蘭西や獨逸、伊太利などの俗譚(傳説的)と比較する積りであつたが、考へて見れば、そうすると大變長く成る恐れがあるために全然止めた譯である。

露西亞の譚の特徴を充分説明するには、誰が何と云つても他國の譚を引合に出さねば出來る話ではない。

そこで、話は餘計な史譚や俗譚を列べて、消極的に、其の特質を示したのである。以上の大觀的記述を必要に應じて以下に詳解しやう。



## 第二章 史謠三曲

英雄スヴァイトゴル

ドブルーニアと龍

ヴォルガとミクラ・セリアニノヅキツチ

### 英雄スヴァイトゴル

英雄スヴァイトゴルは良馬に鞍置いて、  
野に乗り出す支度をした。

渺茫たる平野の旅に

彼は血管に湧き溢れる力をためすべき相手にも出會はなかつた。  
力を負ひながら、恰も重荷のやうに、彼は云ふのである。

「もしこの大空に輪、固けられてゐるならば、俺はそれを引ずり下してやるのだが！もしも此の濕へる大地に、確乎と柱が立てられてゐるならば、そしてそこに輪が確乎と固けられてゐるならば、俺は、全土を持ち上げながら、振ち曲げてやるのだが！」

かくて廣々とした草原を辿つて行く程に、前に一人の旅人が乗りつけて来るのを見た。しかし、どうしても彼を乗り越す事が出来ないのだ。

彼は跑を乗り出したが、旅人は不相變前に居る。

——大きく一跳び——だが旅人は不相變彼の前に行く。

そこで此の英雄呼んで云ふに、

「おい！そこに行く旅の者。暫く止つてくれ。俺は良い馬に乗つてゐるのだが、何うしてもお前に追ひ付けないのだ。」

旅人はハタと停つて、背負ふてゐる一對の小さい革囊を取つて濕地へ投げつけた。

「お前の革囊には一體何が入つて居るのか？」とスヴァイトゴル。

「大地の上から取上げて見たら、何が入つて居るか解るだらう」と、この男の答へ。

そこで良馬を降りたスヴァイトゴルは、片手に其の革囊を引摺み——取り上げやうとしたが駄目だつた。

つぎに彼は両手で掴んだ——が、たゞ通ふものは吐息だけで、

彼は泥土の中へ膝までぬかつた

白い顔から流るゝものは、涙でなくて血だ。

スヴィフトゴルは云つた。

「お前の旅囊には、一體何が入つてゐるのか？俺の力はまだ／＼亡びないが、俺はこれを持ち上げる事が出来ないよ」

「その中には地球の重さが入つてゐるのだ」と、この男は答へた。

「するとお前は誰だ？お前は何と云ふ者か？そしてお前の名は何だ？」

「俺は村人の子、ミクルーシカ・セリアニノヴィツチと云ふものだ。」

「ではそのミクルーシカ。神が與へた俺の運命を、どうして知ることが出来るか、俺に教へて呉れ」

『路の岐れ目に出るまで眞直に馬を乗りつける。そこで左手に廻つて、全速力で馬を放て、さうすればお前は北の山々に行き會ふだらう。その山々の或る大きな樹の下に、一人の冶工が立つてゐる。その冶工について、お前の運命を尋ねたらよからう』。

スヴィフトゴルは命ぜられた通り、三日の間馬に乗り續けて、一本の大樹と、一人の冶工に出會つた。冶工は立ちながら、美しき二つの毛を鑄てゐた。

英雄は尋ねた。

「お前は何を造つてゐるのか。冶工よ」

「俺はこれから結婚しやうと云ふやうな人間の運命を拵へてゐるのだ」と冶工は答へた。

「すると俺は一體何んな女と結婚するかしら？」

「お前の嫁になる女は、海に近いこの國內にゐる。この玉様の町の、その女は三十年も糞の上に横たはつてゐたのだ。」

そこで此の英雄は立ち乍ら考へた。

「いや何だよ、俺は是からその海邊の王國へ出掛けて行つて、俺の妻になる女を殺してやらう」さうして彼は、海邊の國の王立の町へ出掛けた。

ある一軒の、哀れな小屋へやつて来て入り込んだ。

そこには誰も居なかつたが、一人の處女が糞の塊の上に寝てゐた。

そして彼女の體はまるで縦の木の皮のやうだつた。

スヴィフトゴルは、五百ルーブル取り出して、卓子の上に投げ出し乍ら、

鋭い劍で女の眞白い胸を突き刺した。

そして彼は此の國を立ち退いた。

後で起上つた處女は、自分の身の廻りを見詰めるのだ。

彼女の手足からは、縦の皮が剥げ落ちて、

全世界に、これまで見たこともなければ、この広い世界のどこにも、聞いた事のないやうな美しい娘になつたのだ。

卓子の上には五百ルーブルの金があつた。

彼女はそれで商賣を始めた。

彼女はこの蓄へられた知らない黄金の寶で暗赤色の船々を造つて、貴重器具を積み込み、壮大なる青海原へ浮び出た。

それから彼女が聖山の畔の大きな街に來た時に、その貴重な寶を他の貨物と替へ始めたのであるが、彼女の美貌の噂は、この街と云はず國と云はず忽ちに擴がつて、人々は集りつどひ乍ら彼女の美に打たれたのだつた。

英雄スヴァトゴルも亦その中に混つて

彼女の美しさを眺めに來た。

そして彼女に戀して、口説きはじめた。

この二人が夫婦になつたあとのこと、

彼は自分の妻の眞白な胸に、一つの疵を見つけたのだ。

「これは何の疵だ？」と彼は尋ねた。

すると彼の妻は、かう答へた。

「海邊に近い妾の國へ、ある一人の見知らぬ男がやつて來て、妾の小屋の卓子の上に、五百ルーブルの金を置いて去つたのです。ふと妾が目醒して見ると、それ、この疵が付いてゐました。そして縦の皮が妾の五體から剥げ落ちてゐたのです。尤も、其の前の日までに、妾は三十年間糞尿の塊の上に横はつてゐました。」

そこでスヴァトゴルは悟つた。いかなる者でも、自分の運命から遁れ去ることは出來ないし、またどんな人間でも、其の人の良馬に跨つて、神の裁きから逃げ出すことは出來ないのだと。

(この史話完)

(註) 「スヴァトゴル」は、「史話」の中の「ボガツイル譚」で最後のものである。即ちウラジミル期の先驅としての、純神話期或は前歴史期の中で最終に來る譚でなければならぬ。この期に屬する譚で、私達の目につくものはヴォルガやミクラヤスヴァトゴルと「四十人の巡禮と一人」なので、是等は何れも、この時代の無名の英雄として考へねばならぬだらうと思ふのである。其他の一、二は擧げないけれども、それは「イリヤと偶像」の中にも現はれてゐるし、その中には、この古代民族の代表的

人物として、イヴァニウオシなどがあることを忘れることは出来ない。ところでこの英雄の名は彼が住んでゐるナナスヴィヤチウク、ゴラーク、即ち聖き山から來てゐるので、この聖き山が、いづれの邊にあつて、何と云ふ地理上の山であつたかと云ふことは研究されてゐないやうである。ロシア傳説の研究家として知られてゐるイザベル・ハブクツド女史は、それを神話的に解釋して「雲」ではなかつたかと云つてゐる。それは兎も角も、例のブラーグの「コスマの年代記」によれば、スヴィアトボルクが山に隱遁して、そこで秘かに死んだことになつてゐる。それとこれとを考へて見るのも面白からうと思ふ。そのスヴィアトボルクも、此のスヴィアトゴルと同じやうに、露西亞に對して何の敵對もしなかつた人物であつたことは、記録的にも解つてゐる。しかし、話が前に戻るやうであるが、聖き山の住人を「雲」の精として、その偉大なる劍を電光として考へて、それが夏春に空を離れて秋の暴風雨の鐵帶を支配する。その銀帶は冬の寒い手が雲の上に置かれる。そして此の雲の精は寒さの爲に凍えて冬眠をする。つまりそれがこの英雄の死であると云ふやうな考へは、露西亞人が一般に描いてゐる想像なのであつた。またかうした話に似寄りのもので、マセドニアのアレキサンダーに關する傳説がある。それは此の時代に既に露西亞にも傳はつて來てゐたし、現今讀まれてゐるノルウェーやスウェデンの傳説、アラビヤ物語の中にも散見してゐるものであることを参考のために附け加へて置きたいと思ふのである。

#### ドブルーニアと龍

若きドブルーニアは彼の強き弓をとり

火の如き小さき矢を負ひて

狩に出で、「青海」の畔に來た。

はじめのうちは、鷺鳥も白鳥も家鴨も見付からなかつた。

次の濱邊にも、その次の濱邊にも、見付からなかつた。

彼の落着かぬ心はあせりだした。

彼は振り返つて、家へ急いで戻つた。

削られた四角なベンチに腰掛けて、櫛の床の上に目を落した。

そこへ母親が出來て來てかう云つた。

『おゝ若いドブルーニヌシユカ・ニキチチよ！お前は機嫌よく戻つて來なかつたのだね』

『おゝお母さん！何卒私をプチャイ河へやつて下さいな』とドブルーニアが云つた。

『いゝえ。いけませんよ。プチャイ河へ行つた人で、今まで戻つて來た人は、一人もありませんから』と母親が答へた。

『でも、お母さん。お母さんが行つていゝと仰有れば行きますよ。行つてもいゝと仰有らなく

ても、僕は行きますよ」とドブルーニア。

彼の母は承知した。

彼は華の衣裳を投げ棄て、

旅する着物を纏ひ乍ら

ギリシヤ渡りの縁とつた幅廣の帽子を被り

今まで誰も乗らなかつた良馬に鞍置いて、彼の強弓と火の如き矢と、鋭い劔と、何處までもと

ゞく鎗と、戦争に用ふる鎗矛を携へた。

かくて一人の小さい小姓をつれて乗り出すとき、

母親はかう云つて彼に命令した。

『もしも、お前がプチャイ河へ行くならば、恐ろしい暑さが降つて来るだらうが、お前は決して母なるプチャイ河で泳いではいけない。なぜなら、その河の流れは烈しい上に激し易いからだ。そしてあの第一の流れからは、火が燃え上るだらう。その次からは、火花が降つて来るだらう。第三からは煙の柱が立ち昇るだらう』

人々は此の善良の若者が馬に跨るのを見ることが出来なかつた。

彼等はこの若者が乗り出して行くのも見なかつた。

たゞそこには、霧が遙かの平野を閉してゐるばかりだつた。

彼が、母なるプチャイ河へ出た時に、

迎も堪えられないやうな暑さが押し寄せて来た。

彼は母親の教へに従はず

頭からギリシヤ渡りの帽子を取つて、旅衣をも脱棄て

七重の絹の足袋を脱ぎ、

プチャイ河の流れに浴し始めたのだ。

『私の母は、此の河が荒つぽくて怒りやすいと云つたが、こんなに静かだ、雨水の溜のやうに。』と彼は云つた。

彼は第一の流れに、家鴨のやうにもぐつた。

同じやうに次の河流にも――

と！そこには風もないのに

雲が浮んで行く、

雲もないのに

雨が落ちて来た。

雨もないのに

電が閃いた。

電もないのに

火花が夕立のやうに降つて来た。

そこに厚い闇が空を暗くすることもなく、

陰暗な雲が降つて来ると云ふのでもなく、

猛々しい龍がダブルイニアの頭上に飛び下つて来た、

十二本の尻尾を持った、洞窟の野蠻な龍が。

「おゝー若いダブルイニア・ニキチチよ！」

と龍が聲をかけた。

「さあ、お前を喰べて了はうか？　ダブルイニア！　俺はお前の體を尻尾に乗せて生捕らうか！」

「おゝ、龍の畜生め！　お前がダブルイニアの俺を捕へるなんて、そりやいつのことだ。威張るなら、俺を捕へてからにしる。だが、お前はそのダブルイニアを、爪先にまだ引掛けてゐないぢやないか！」

と云ひ乍ら彼は第一の流れに素早くもぐりこんだ、かと思ふと、第二の流れから出て来た。

だが、うろたへた小姓は、ダブルイニアの良馬に打ち乗つて逃げ出して了つた。

その時、強弓も利劍も長鎗も鎗矛も持ち去つて了つたのだ。

たゞ残つてゐたのは一つの帽子、ギリシヤから持つて来た縁廣のそれ丈だつた。

ダブルイニアは、その帽子を掴みとり、

河岸の砂を一杯詰め込んで、

いやな獸に打ちつけさまに、

三本の尻尾をへし折つた——いゝ尻尾を。

洞窟の龍はダブルイニアへ

「おゝ、若いダブルイニア・ニキチチよ！　俺を無駄死にさせるな。俺の無邪氣な血を流して呉れるなよ。俺はもう聖い露西亞へ飛込まないし、俺はもう英雄を幽閉するやうなことはしない。お前達の乙女等や孤兒を絞め殺すやうなこともしないから。俺はお前のおとなしい龍にならう。そしてお前ダブルイニアは、俺の兄になつて呉れ、俺はお前の妹にならうから。」

ダブルイニアは龍の誓を容れて

彼女の願ひ通りに放してやつて、母の家へ戻り

祝宴の部屋の四角なベンチに座つた。

だが、狡猾な龍は、王立の町キエフの空を翔つて、ウラジミール太公の姪の美しき姫を捕へ、丘の洞窟へ連れ去つた。

丁度その時、主公ウラジミールはあまたの王子、貴族、勇女、力強い勇士、善良なる遊歴者若人の爲に、

榮譽ある祝宴を張つてゐたのだ。

ドブルーニアは母親に別れを乞ふて

その榮譽ある祝宴に行かうとする。

『いゝえ、お前は自分の家に引込んでゐなさい。ドブルーニア。お母さんと一緒にね。そして酔つ拂ふまで、青い酒をお上り。黄金の寶を、構はずどしどし費つても、あの祝宴に行くことはなりません』。

だが、彼女の忤がどうしても行かうとするから、

彼女は願ひを聞いて別れてやつた。

ドブルーニアは例の通りの身仕度をした。

小さい足にモロッヤ皮の靴穿いた。

踵の重い、爪先の尖つた靴を、

その爪先には、卵も轉がつて行ける。

その踵の下を、雀でも飛んで行ける。

彼の着物は花織りもので、

彼の外套は海を越えて来た黒貂皮だ。

彼は良馬に鞍置いて、廣々とした宮廷へと乗り出した。

そこへ着いた彼は、中央の洞の柱の黄金の輪に馬をつないで、

祝宴の廣間へつか／＼と入つて行つた。

廣間の様子がすぐ目に映ると、

二人、三人、四人の各方へも、特に太公や公妃へも、恭しく敬禮した。

すると人々は、大きな響の席の檜の卓子へ、彼を連れて行つた。

そこには香高き食べものと、蜜の飲み物とがあつた。

先づ人々は洋盃に青い酒をつぎ、その次にビールを、三番目には甘き砂糖水を、

その洋盃の大きさは、手桶に一杯半あつた。

その目量は一ブード半もあつた。

これをダブルイニアは片手に受取つて、ぐつと一息に飲み干した。

この宴席に列なつてゐたウラジミール太公は、捲髪を打ちながら、是等英雄達を見渡して、かう云つた。

「お、汝強健の英雄よ！我れ今汝等に一大任務を負はせるぞ、汝等これよりツギーの山々に登りて、美しき佳人、我が姪を連れ去りし猛き龍の許へ参れ』

すると巨きい男が、その次の者の後に隠れる——  
そう云ふ風に代る代る、小さい者の後へ、到頭、列中の一番小者の蔭に隠れて、答ふるものもない始末だ。

ところが中央の卓子から、カラムイチエッカの太守セムイオンが口をきいた。

『小さき我が父よ！王市キエフのウラジミール殿よ！ほんの昨日であつたと思ふが、私は廣々とした野原の中の、あのプチャイ河の向ふで、ダブルイニアが龍と闘つてゐるのを見ました。その時あの龍が彼を欺して、彼を兄と呼び自分を妹と云つてゐました。だから、ダブルイニアをお遣しなさい。美しき姫を取り戻しに、あのツギー山へ』  
そこでウラジミールはダブルイニアへ命令した。

ダブルイニアは然し嘆き悲んだ。

彼はこの大理石の部屋の中に突つ立ち上り、

櫛の床を踏みつけた。

卓子はぐら／＼と揺れ、

酒は瓶の中で踊り顛へた。

そして英雄達は、その打撃によつて、腰掛の上から放り出されて了つた。

ダブルイニアは宮庭に飛び出して、

黄金の輪から良馬を離し、

打ち跨つて、さつさと家へ歸つた。

彼が上等のトルコ大麥を馬の前に撒くとき、彼の庭の霧の中で、

彼は母の住居に這入つて、壁床に腰掛けながら、

彼の狂暴なる首をうなだれた。

「お前は何を悲しむのですか？祝宴の席順がお前に不相應だつたのかい。それとも似合しからぬ場所に座らせられたのかい？お前にも洋盃が廻つて来たかい。どこかの酔つ拂ひが、お前の目の中へ、唾でもかけたかい？それとも美しい娘さん達が、お前を見て嘲つたとしても云ふの



かい？」

と、彼の母親は訊ねた。

「私の宴席は一番名譽な場所でした。一番大きな場所でした。どこの馬鹿も私を怒らせるやうなことはしません、どんな娘達も私を嘲ひやしませんでしたが、ウラジミル太公が私に大層重い役目を云ひつけられたのです。私はこれからツギー山へ行つて、太公の姪を、あの洞穴の龍の手から取り戻して來なければならぬのです。」

「そんなことなら、何も悲しむには當らないよ。ドブルーニア。今夜は早くお寝み。そして明日にした方が賢いよ。何故つて、夜よりも朝の方が、人は賢くなつてゐるものだからね。」

と尊いやもめの母、アウイムイヤ・アレキサンドロヴナが云つた。

彼は彼女の言葉に従つた。

翌朝早く起き出で、眞に白い體を洗ひ潔め、やがて旅立つ支度をした。

「悲しむには當らないよ、お前のお父さんも、あのツギー山へ登つて、蛇畜生らをお殺しなすつた事があるんだからね。今、同じやうに、お前も行かなければならぬのさ。だが、決してお前のその足の速い強弓を取つてはなりませんよ。また、お前の戦鎗も、頸太棒も、鋭い劍も猶更のこといけません。」

妾がお前に七絹糸の鞭を上げやうから、それを振り廻すのです。その他に魔術の布を上げませう。お前の右の手が下りる。するとあかりがお前の目から消えて了ふ。そこへ龍がお前を引きずりに來る、そしてお前を叩きつけやうとする。そこへ小さい龍どもがやつて來て、踏みつけやうとする馬の距毛を嚙まうとする。が、その時お前は魔術の布を取つて、お前の白い顔へ當て乍ら、お前の美しい目を綺麗に拭くのです。

するとお前は以前よりもすつと力強くなるでせう。その時この七つの絹糸で編んだ鞭を衣囊から取り出して、いきなりお前の良馬の耳と耳の間と、後趾を打ち叩くのです。するとお前の栗毛が跳り上つて距にからみついてゐる龍の手を振り離し乍ら、一匹残らず踏潰して了ふだらう。そこで此の絹の鞭を振り廻す、ならば、お前は龍をねち伏せて、征伐することが出来るのです。それは丁度あの基督教の話にある獸のやうな具合にね。その時お前は十二本の尻尾を切り取つて一息に殺して了ふのです。」

かくてドブルーニアは彼の良馬に跨つて、

ツギー山の龍の洞へやつて來た。

彼は十二日の間と云ふものは、

たゞ大麥の卷食麵麩の外には何一つ喰べなかつたのだ。

その壯大な丘に乗りつけたのは丁度十三日目だったが  
龍は彼女の穴に居なかつた。  
太公の姪も見當らなかつた。

そこで彼は小さい龍どもの上を踏みつけ廻ると

小龍どもは、最早馬が跳べない程にぐる／＼と距毛へ巻きついた。  
彼は衣囊からサマルカンドの絹鞭を取り出し、

良馬の耳の間と趾を打ち叩いた。

良き栗毛はいきなりそこらを跳び廻つて、

しがみつくと總ての小龍を振り拂ひ、

一匹残らず踏み潰した。

ドブルーニアが廣々とした平野を見詰めたときに、

あゝ、呪はれたる龍が彼を目がけて、まつしぐらに飛んで来る。

龍が彼の姿を見つけたとき、濡れる地上に爪をばづしてぱたりと落した。  
柔い密な草の上に、

ある一人の英雄の屍を。

そしてドブルーニアに躍りかゝつた。

『あゝ、小さきドブルーニア・ニキチチよ！』

お前は何故誓を破つて私の子供をすつかり踏み躪つて了つたのか？』

『おゝ、お前は龍の畜生だな！お前はキエフの空で何をやつたか、お前はあの若く美しいブチ  
アチチナ姫を狙ひ取つてもいいのか？今、彼女を何の戦ひも流血もなく俺の手に渡せ』

『いや、私は無事に彼女を渡さない』

そこで彼等は一日、日が暮れる迄戦ひをつゞけた。

ところが龍は大いに勝目になつて来た。

だが、ドブルーニアは母の忠告を思ひ出し魔法の布で  
美しい眼を綺麗に拭き乍ら白い顔を蔽ふた。

彼の力はぐつと強まつた。

次の日も夕方まで闘ひつゞけた。

その次の日も――

ドブルーニヤが龍の側から逃げ出さうかと思ふとき、  
しかし、天來の聲が聞えて来た。

今三時間も闘へば、彼の勝になるぞと。

彼はつゞいて闘つたが

流れ進む龍の血の洪水には堪えられなかつた。

彼はその時再び天の彼方から聲が聞えなければ、龍を捨て、立去つただらう。

『ドブルーニアよ。もう三時間龍の側に居れ。そしてお前の長鎗を濕地に擲けて、お前の短鎗で手品を使へ。口を開けよ。母なる濕地よ。四方へ口を開いて龍の血を呑み干して了へ！』

それを守つて三時間闘つた彼は到頭勝つた。

彼は母親の言葉を思ひ出して、

サマルカンドの絹の鞭を取り出し、

十二の尻尾を斬り離し、

罪深き五體を寸断して、平野へ放り出した。

その後で龍の深き洞に入り、

ロシアの囚者を救ひ出したのだ。――

皇帝達や王様達や太公達がどや／＼と洞の中から。下々の者も黒山のやうに出て來た。

そうした囚者達を行き度い處へ行かせた後で、

若き美しき姫を探したが見當らぬ。

だが、ある奥まつた窟内に彼女は

両手を鎖でくゝられて横はつてゐた。

彼は彼女を直ぐさま助け出して、

白き世界へ導いた。

そこで彼は良馬に跨りさま

美しき姫を右の小膝にのせて

平野遙かに乗り出した。

美しき姫の云ふには

『あなたのお働きで救はれた妾はよろこんで、これからあなたを、小さいお父さまと呼びたいけれど、それはよして、あなたを本當の兄さんと呼びたい。けれども、それもよして、妾はよろこんであなたをお友達、戀人と云ひませうか？ でもあなたは妾を愛して下さらないわね。

ドブルーイヌシユカ様』

ドブルーイニアは彼女に答へて云ふやう

「おゝ、美しきブツイチチナさん！あなたは貴族の生れではありませんか、私は先祖からの百姓なんです。だから私をお友達とか變人とか云ふことは叶ひますまい」  
二人が平野を横切つた時、

大きな土塊の投げ出された馬の足跡に行き當つたがそれは膝まで這入るやうな大きな穴になつてゐた。

ドブルーニアは途中でアリヨシヤ・ポボヴィッチに追ひ付いた。

「おい、アリヨシヤ・ポボヴィッチさん！この美しきお姫様を受取つて下さい、そしてキエフ王市の美しき太陽ウラジミル公の許へ連れて行つて下さい、そして私の代りを勤めて下さい」と聲をかけた。

その通りにアリヨシヤはやつてのけた。

かうして美しき姫を送り届けた後で、

ドブルーニアは例の馬の足跡をつけて行くうちに、一人の英雄が、平野の中に行くのに出會つた。

その勇士は女の着物を纏ひ良馬に乗つてゐた。

「おい！これは、ハテナ、英雄でなかつたわい。いやまつたく勇敢な女使者か、娘か、人妻か

！」

と、ドブルーニアは呟いた。

そこでこの戦勇女のあとをつけ乍ら

ダマスカスの鋼鐵の槌矛を發矢とばかりに彼女の大きな首に投げつくれば、

この戦好きの乙女は、しつかりと良馬に跨つたまゝ

身動きもしなければ、振り向きもしない。

良馬に乗つてゐるドブルーニアは怖れて

この勇敢なポリアニツアと別れて了つた。

「ドブルーニアの勇氣は昔の儘だが、力は昔の力でなくなつて了つたわ」と彼は呟いた。

さて又行くほどに、平野のかたほとり、

周圍六尋ほどの濡れる椶の木があつた。

ドブルーニアは槌矛を取つて椶に投げ付けたが

それは微塵に碎けたので彼は仰天した。

「まつたくだ。ドブルーニアの力は昔の儘だが、元氣は昔ほどもない。」

と彼は呟いた。

そこで彼は再び先刻の勇敢な女戦士の跡を追ひかけた。

そして彼女の暴風のやうな頭へまた投げつけた。

彼女は身動きもしなかつた。後も振り向かなかつた。

ドブルーニアはいたく驚いた。

そして今度は十二尋もある濡れる榎の木で力試しをした。

榎の木は木葉微塵となる。

ドブルーニアは良馬に打乗つたまゝ、ます／＼怒りつぽくなつて

三たび女戦士の跡を追ひかけ

彼の槌矛を女に投げつけた。

彼女は、ふと振り返りさまにかう云つた。

「妾は先刻から露西亞の虜が来て食ひつくんだとばかり思つてゐたが、まあ！ 露西亞の勇士が叩くのだつたのねえ」

そう云ひ乍らドブルーニアの黄色い襟髪を引掴んで

彼の良馬からねち落し

彼女が持つてゐた深い皮囊へ押し込んで、

廣々とした平野を乗り出した。

お了ひになると彼女の良馬が物を云ひ始める。

「おゝ、ミクラの娘ナススタシア殿よ。勇敢なる女戦士の貴女よ！二人の勇者を私は迎も擔いで行くことは出来ない。力に於ては貴女もあの勇士も同じことだが、元氣ではこの勇士はあなたの二倍もありますよ」

すると若きナススタシア・ミクリチナが云ふ。

「此の勇士がよつほどの老人ならば、妾は首を斬り落して了ふが、ずつと若くて、見かけでもよかつたら、妾は此の男を妾の友達、妾の戀人と云ひませう。もし彼が妾をよろこばせなければ、妾は彼を手のひらに乗せて、彼方の掌で押し出してやりませう。そして勇士のパン菓子を拵へてやりませう」。

そうして彼を皮囊の中から引ずり出して見ると、これはまたすつかり氣に入つたもので、

「まあ！可愛い！ドブルーニア・ニキチチさん！」

と彼女は口走るのだ。

「あなたは何うして私を知つてゐるのですか？勇ましい乙女の勇士よ！私はあなたのやうな

婦人に知り合ひはない筈だが。」

「妾はキエフの町に居たことがありますよ。そしてあなたにお目にかゝつたことがありますよ。ドブルーヌシカさん。でもあなたは屹度妾を知らないでせう。妾はポーランド王の娘、若きナスタシア・ミクリチナです。そして妾は敵を探さうと思つて、この平野を迂路ついでゐるので。もしあなたが妾を妻にして呉れるならば、ねえ、ドブルーニアさん、妾はあなたの命を助けて上げませう。だが、あなたは確かな誓を立てねばいけません。でないと、妾はあなたを鳥麥のお菓子にしてしまいますよ。」

「何卒命ばかりは助けて下さい。若きナスタシヤさん。そうすれば私は屹度立派に誓を立てませう。そして黄金の冠をあなたに上げませうから。」

かくて二人は互に誓を立て

キエフの町の爛佳なるウラジミル太公の許へ向つて行つた。

そこへドブルーニアの母親が逢ひに来て尋ねるには

「ドブルーニア・ニキチチよ。お前が連れてゐるのは誰ですか？」

「あゝ、お母さんのアフィムイヤ・アレキサンドロヴナ。尊いやもめのお母さんでしにか！私は自分の相手連れて來たのです。相手と云ふのはこの若きナスタシヤ・ミクリチナのこと

です。私は此の人を連れて黄金の冠を取りに行くのです。」

それから彼等はウラジミル太公の許へ行つて

祝宴の大廣間へつか／＼と入つたが、

そこでドブルーニアは居列ぶ人々に

特に太公と公妃とに、

敬々しく禮を施した。

「おゝ、美しき太陽、王市キエフのウラジミル様！」

「やあ、ドブルーニア・ニキチチよ！そこへお前が連れて來たのは何者だ？」

ドブルーニアは今までの話をすつかり打あけた。

かくてナスタシヤはこのキリスト教徒の信仰の中に迎えられる

黄金の冠を二つ貰つたのだ。

改めてこゝに爛佳の太公ウラジミルは

二人のために三日も續いた宴を催して

かくて二人は幸福に暮したのである。

(註) この勇士ドブルーニアは歴史上の人物である聖ウラジミルの叔父だと云ふ説と、一二二四年のカ

ルカの役で戦死したリアザンのダブルイニアであると云ふ説と二つある。傳説俗話の中には、このダブルイニアはヴラジミル太公の甥になつてゐることもある。こうした爛佳な禮儀に篤い太公と相對して、恐ろしく粗暴な勇士のダブルイニアを配したのは、此の太公は「美しき太陽」——（一本には赤い太陽ともある）の性質が極端に受動的であるところから、ダブルイニアのやうな一方に極端な競争好きの性質を、この勇者の中に體現させたものであることは明らかであらう。例のアポロやヘルタレスや、ジグフリードのやうな傳説中の人物で、丁度、例のベルセウスやイエゴリー同様に、龍を退治して、囚はれの婦女子を救ふ役目を勤めてゐるのである。北方神話を参照すると、ダブルイニアはオヂンと同格であるし、ミュロンのイリヤの如きは、それに相當してゐる事實を發見する。猶、ダブルイニアがロシアベネロープのナスタシアを棄て、何處へ行つて居たと云ふ話は、ミハイル（遊牧者）が長い間石の中に閉ぢ込められてゐた神話と符合する。或はイリヤが籠の中に押し込められてゐたことなども相似てゐる。夜（闇）と冬（寒氣）が光（晝）と熱（夏）との神性に含まれてゐるのである。ロシアの詩の中で、長い間家をあけて外へ出て行つた夫の歸宅を詠つたものは、その抒情詩的立場から云ふと、西部ヨーロッパの口傳文學時代の傳説よりは、より完成されて居り、より原始的であると思はれる。

#### ヴォオルガとミクラ・セリヤニノウイチ

王立の市キエフの典佳なる太公ウラジミルが彼の甥ヴォオルガに三つの町を與へた。クルツオヴエツとオリエコヴエツとクレスチアノヴエツとを。ヴォオルガが諸國諸種族の間を歴めぐつたしるしにとて。あちこちの皇帝や王から貢がれた土産を持つて居た。それをこの莊嚴な町キエフに携へて來た。そして彼の叔父ウラジミル太公に贈つた。彼は黄金・銀・大眞珠、を集めてゐた。その他にアラビア青銅もあつた。それは錆びることも蝕ふこともないから黄金や眞珠や銀よりも貴かつたのだ。そこで今この三つの壯大な町が叔父のウラジミルから與へられたがそこには首の剛い奴共が住んでゐて誰の云ふことも聞かなければ、又、贈り物も貢物もしないのであつた。若いヴォオルガ・フセスラヴィッチは善良なる護衛隊を集合して

彼に屬する町々を占領するために押よせて行つた。

彼等が平野を乗り過ぎやうとするはづみに、ヴォルガは一人の農夫が耕す音を聞きつけた。

鋤は響を立て、犁は石に當つて鳴つてゐた。

ヴォルガは農夫を探し乍ら乗り廻つた。

彼は夕暮近くなる迄終日乗り廻つた。

そして犁が石に當つて鳴る音を平野越しに聞いたのだ。

だが、暗い夜は途中で彼を襲ふて了つた。

かくて彼は農夫の姿を発見することが出来なかつたのだ。

次の日も彼は黄昏時まで農夫を探し廻つた。その次の日も。

そしてその三日目に彼は農夫が鋤を振つてゐるところに出會した。

農夫は畦の片方へ土の塊を放り出してゐた。

農夫は濡れる椀、切り株、大きな石ころなどを掘り出してゐた。

彼の持馬の鶯牡馬は「揚げ首」と云ふ名前なのだ。

何故なら雲の上まで首をのび揚げる事が出来るから、

彼の鋤は楓樹で出来てゐた。

彼の手綱は絹、犁はダマスカスの鋼鐵で銀の飾がついてゐて、把手はほんものゝ黄金だつた。

彼の捲髪は黒貂のやうに眞黒く眉の上まで波うつてゐた。

彼の瞳は鷹のやうに澄み切つてゐた。

彼の靴は爪先の尖つた緑色のモロッコ皮なのだ。

靴底の凹みを、雀さへ飛び抜けることが出来る代物だつた。

彼の帽子は毳毛で出来て、長袖は黒天鷲絨だつた。

太守ヴォルガは次のやうな言葉をかけた。

『農夫よ。神様がお前の耕耘を手傳つて下さるだらう』

『ヴォルガ・フセスライウィツ様。あなたは軍隊をつれてお出になりましたか？ヴォルガ様。

あなたはこゝへ来る迄隨分馬にお乗りになつたでせうね。あなたの護衛兵と一緒に？』

と農夫は答へた。

『俺は自分の叔父にあたる典佳の太公ウラジミルから貰つた町、クルツオヴエツとオルエコヴエツとクレステアノヴエツを占領に來たのだ』

『ほう、さうですか。ヴォルガ・フセスライウィツ様！あそこは泥棒共が巢喰つて居ますぞ。

二日ばかり前に私はあの町に行きました。その時私は、百ブードの鹽囊を二つ鶯牡馬に積んで



居たのですが、彼奴等がやつて来て通行税を出せと云ふものですから、それをやつたが彼、奴等はまだ承知しないのです。だから私が一人を千回づゝ引つばたくと、立つてゐた奴は坐り込むし、坐つてゐた奴は引つくり返るし、寝ころがつてゐた奴は永久に腰が立たなくなつて了つたのですよ。』

そこでヴォルガが云つた。

『農夫よ。俺の友達になつて一緒に来てくれ』

農夫は絹の手綱を緩め乍ら

鋏から牡馬を外して

それに跨ると共に一緒に乗り出した。

だが農夫はすぐに考へた。

『ほう、ヴォルガ様！私は畦の中に鋏を置き忘れました。何卒あなたの家來に云ひつけて、あの鋏を畦の中から引上げ、犁の土を掻き落して、泥棒に見付けられないやうに、河柳の茂みへ投込んで下さい。もし見つかつたら、見つけた者の云ひなり次第に働く奴ですから——兄弟の百姓達よ。』

かくてヴォルガは力強い侍の中から五人を遣した。

侍達はさまざまに把手をねぢて見たけれども、

楓樹の鋏を畦の中から引き上げることは出来なかつた。

ヴォルガは改めて十人を遣した。

かくて護衛兵を皆遣して了つた。

だが彼等の力は犁を外すことは出来なかつた。

土塊を掻き落して河柳の茂みに押込むことも

ところへ農夫が駕牡馬に跨つてやつて来て

楓樹の鋏を片手で掴み

犁から土塊を振り落して雲間へ投げ上げて云ふには

『わが鋏よ。さようなら！私はもうお前を使って土を耕すまい。』

それから皆は彼等の良馬に打乗つて、

名にし負ふクルツオウエツの町へやつて来た。

それからオリエコヴェツへ。

それから小なき町クレステアノウエツへ。

そこで民衆が大勢集まつて大戦をしかけた。

その民衆は馬鹿に猜い無頼漢だった。

悪徒共は偽物の橋を拵へた。

だが若き英雄達はもつと利巧で

先ず先登に彼等の大勢を棒木の上に追ひやつた。

橋はめり／＼破れて、

敵の軍は皆小川へ落ち込んだ。

溺れやうとする者もあれば、哀れな有様なものもある。

その時ヴォルガと農夫は馬を急ぎ立て、その小川ウォルコフを渡り切つた。

勇敢な寄手の勢はそこを跳び越えた。

そこで味方の者はこの土民に報ゆるに、鞭を振つてびし／＼と殴りつけたのだ。

そう云ふ風に、思ひのまゝに彼等をやつ／＼けたあとで、

今来た方へと引き上げた。

その時から土民共は降参して、正當な貢物を献するやうになつた。

例の農夫は先に立つて行く、

ヴォルガは彼を追ひ越さうと試みた。

つしぐらに乗りつけたが、

たゞ僅かに農夫の姿が見えるばかりとなつた。

「揚げ首」の尻尾が遙かになびき

彼女の鬘が微風にそよぎ、

ゆた／＼と歩く風だが

ヴォルガの馬は必死の勢で跳ぶけれども

「揚げ首」はそろ／＼歩くのだが

ヴォルガの馬は遙か後ろに残されて了つたのだ。

ヴォルガは帽子を振つて叫んだ。

例の農夫がその聲を聞きつけたとき

彼は驚牡馬を止めた。

その間にヴォルガが、こう云つた。

「止め！農夫よ。もしお前の馬が種馬ならば、俺は五百ルーブルで買はう。」

「あなたは馬鹿ですね。ヴォルガ様、私がこの牡馬を母親から買ったのが五百ルーブルなんですよ。もし之が種馬だつたら、いくら出しても買へますまい。」

『お前の名は何と云ふのか、農夫よ。お前の先祖の名は？』  
とヴォルガは尋ねた。

『ヴォルガ・フセスラウイツチ様！今だから申し上げますが、私は耕して黒麥を作り、それを禾堆に束ねて積むのです。私はそれを家へ運んで搗くのです。それでビールを拵へて百姓達にやるのです。——すると百姓達は私のことを村人の子、若きミクラ・セルイヤニノウイツチと呼びます。』

と農夫は答へた。

(註) ヴォルガ・フセスラウイツチはオレツグ太公のことで、十世紀頃ルーリツクの役をついだ人物であることは、或は前に述べたやうに思ふが、この傳説俗語は明らかに「イゴール兵遠征物語」と年代記に於けるフセスラウイツワの朦朧とした記憶を保存してゐると云ふ事が出来る。「ネストル期」の年代記の中のオレグ(或はオルグ又はヴォククルグ又はヴォクルガ)の事蹟は史實であり乍ら、此の傳説俗語と同じやうな程度に荒唐無稽である。このヴォルガの出生に關する不思議な物語は、他國の神話にもある。例のインドラの出生に就ても、奇蹟的現象があつたと記憶する。神話時代に於て英雄が生れると必ずそれに附き物のやうに雷が鳴つて電光が閃めく。このヴォルガに就てもさうであつた。それはロシア傳説を見れば解ることである。その電の神と云ふのは龍である。神話時代の人々は雨雲中に龍を發見した。(黒雲の形がそれに似てゐる)その雷神は凍雲の間に眠つてゐるが、春が巡り來るま

で人の眼には見えない(季候の變り目)、春が來て彼自身の美しい光が出ると、彼(電光の閃き)は龍となつて現はれる。ヴォルガの變裝(變體)は雨雲の形の變化を想像して考ふべきものかも知れない。

## 第二篇 記述文學と其時代

### 第一章 傳説文學時代の背景と文化草昧

#### 時代の文學

キリスト教は十世紀の末葉に於て、ギリシヤ皇帝の娘の手により洗禮を受けたヴラジミル第一世によつて、ロシア南部の文化中心地としてのキエフ市から漸時露西亞に紹介された。當時コンスタンチノープルから殆んど無宗教の状態にあつた露西亞へ、キリスト教を布教する爲に來て居たギリシヤ・オルソドックス派の僧侶があつた。彼等は選ばれて傳道に來た委員で、彼等が露西亞へ入る前から、露西亞語に酷似してゐるスラヴ語に翻譯されてゐた聖書其他の宗教書類をその時携へて來た。尤もそこにスラヴ語と云ふものがなかつたら、露西亞人は宗教上の知識を得るためには、非常の不便を感じたかも知れなかつたので、この時これ等の宗教委員によつて齎されたものが、文學的にも宗教的にも露西亞文化の開發に於ける第一の階段であつたと云ふことは、露西亞文學史を繕く人の直に會得出来る事實である。私は、此の時代から次々に來るべき時代を追

ふて漸進して行く原始的露西亞文學の發達を物語る前に、いさゝか露西亞の語學に就て述べて置かねばならぬことがあると思ふ。この時代に於ける露西亞言語學並に露西亞文學の養育の功勞者として、今、私の頭に浮かぶのは、聖メソヂウスと聖シリルとである。彼等はマセドニアのサロニキに生れたギリシヤ行政官レオの子であつた。即ち此の二人は兄弟であつて、兄メソヂウスのことは餘り多く知られて居ないが、彼は青年時代を軍隊で暮し、且つ、一方では行政にもたづさはつてゐた人であるが、間もなく其の榮職を棄て、オリンピア山中の一僧院に入つて僧侶となつた。弟のシリル（コンスタンチン〔幼名〕）は八二七年に生れて八六九年に死んだ人だ。幼年の頃ビザンチン王宮で教育され、兄と同じく職を棄て、聖ソフィア寺院に入つて讀書僧となつた。記録によれば孤獨を愛するシリルは、コンスタンチノープルを去つたが、やがて知人等の切なる勸告に従つて再び此の町に舞ひ戻り、町の哲學議吏となつて、二十四歳の頃には小亞細亞に住するギリシヤ人が異端教マホメット宗門に歸依することを知り、これを防ぐための諸國巡遊、福音宣傳者となり、キリスト教を傳導して歩いてゐたのである。同様に又、クリミヤ半島のコザール民族がユダヤ教に轉じて行くのを見て、そこにも布教の努力を示して居た。彼の兄メソヂウスも又弟の事業に大なる興味を感じ、信仰と改宗の爲に自分の一切を忘れて、弟と共に南方スラヴの地を駆け廻つたのであつたが、それは單に彼等の宗教運動に過ぎなくて、そこに私たちは何等文學

上の功績を認めることは出來ないのである。が、或る日、と云ふ其の日は、露西亞に對して不思議な運命を齎さねばならぬ日であつた。シリルはギリシヤの故郷サロニキの町に住むスラヴ人が一たんキリスト教の洗禮を受けたる後に、寺院の勤行や、教文の意義に通ずることが出來ないために、再び異教へ轉宗すると云ふ事を聞いて、幾多の困難があつたに相違ない事業に着手したのであつた。それはキリスト教の教典をスラヴ語に翻譯することであつた。此處で一寸お断りして置きたいのは、今日そのためにスラヴ民族が活動してゐる汎スラヴ語宣傳は、當時に於ては汎獨逸語、汎伊太利語宣傳がなかつたために容易に行はれ得べくして、而も大なる必要を感じてゐた。この意味からすれば、シリル兄弟の事業は、彼等が持ち合せてゐるマセドニア方語を、モラヴィヤを第一番の順序として全部西方スラヴ語に變へて了ふ運動で、スラヴ人のためには非常な民族的好意に結果したものだと思ふことが出來るだらうと思ふ。兄弟の狙ひどころも一つは其の邊にあつた。

又他方面からこの一大事業を観察すると、この宗教的又は文學的民族語は、毎度スラヴ人が其の中間に立つて困つて來た争ひ、それはバルカン半島に居住するブルガリア人にさへビザンチン文明の優秀を奪はうとするローマと、ビザンチン文明國民の嫉妬から生ずる争ひ、そのローマの人々と如何なる接觸に於てもスラヴ民族を強く誘惑する力のある餌であつた。シリルは兄メソヂウ

スの助力によつて、スラヴ語化されたキリスト教典をビザンチン系のスラヴ人に與へた。計畫は順調に運ばれ、成功したと稱して差支へない程度までの効果を收め得た。私たちは此の時先づ第一に、その新教典を受用したモラヴィア人に、多少の躊躇を是認することはあつても、その躊躇は忽ちにして従來の教典を、この交替物と取り換へた勇氣を認めなければなるまい。

それと同時に、南方スラヴ人（例へばブルガリヤ人）も亦進んでこの新しい福音を受用したのであつた。その理由の一つは、言語學的關係が最も彼等に近かつたからで、マセドニアの方語はブルガリヤ方語と相通する點が頗る多い。たゞ彼等は、この新來語の中の妖術的煩瑣を棄て、取らなかつたゞけで、それは少數のスラヴ的語音の記號によつて増加した純ギリシヤ・アルファベットの醜惡さと、その修得に困難なことを知つたからで、要するにスラヴ語の採擇は易々として實行され、スラヴ人はケルトやチェウトン民族が全く知らないところの、新文字を獲得したのであつた。

彼等スラヴ人は此の新生文字を使用して、ギリシヤ文學や、自分達民族間に流傳する俗語或はギリシヤ俗歌、百科全書、年代記を翻譯する迄に進歩して來た。

八六一年頃にはキリスト教徒等の傳道によつて、改宗させられたフィンランド人の間にまで、此の文字は廣まつて居つたと云ふ事實もある位だつた。

だが、此の目醒しい運動は間もなく、ある外界の不利な事情の爲にパツタリ止つて了つたが、こうした運動が最も盛だつたのは此の兄弟が、モラヴィアに住んで居る頃で、モラヴィアの王や王子達が國民間に於けるキリスト教の無理解——キリスト教の基礎的教義すら理解することの出來ない有様にあるのを見て、自分達の信仰は勿論、文化普及の目的から、ビザンチン皇帝ミハイルにシリル兄弟の招待を乞うたのであつた。

かくしてシリル兄弟はモラヴィアへ派遣されてゐるわけではあつたが、モラヴィアに於ける、二人の文化宣傳を恐れた獨逸の政僧等は狼狽の餘りに、この土地に於ける彼等自身の勢力の消衰を防ぐために、この二人の兄弟を捕へて、ローマ法王ニコラス第一世へ送つたのであつた。兄弟はローマに於て嚴重な訊問に處せられた。

だが、此の兄弟に領土的野心のないことを知つてゐたローマ法王の後繼者であるアドリアン二世が、祕かに許してやつた。いや、そのみならず、兄のメソヂウスを僧長として、再びモラヴィアへ送り歸した。かくてメソヂウスは、モラヴィアに十六年の長日月を送つたが、弟のシリルは、それまでの献身的苦闘のために病を得て、そのまゝローマで死んで了つたのである。

私は、此の兄弟のことに就て可成り頁を費したやうに思ふが、かくした文化運動が、露西亞に入り込んで來るときに、露西亞の内地では前に述べたウラジミル第一世が、頻に宗教を基礎とし

た同様の宣傳に努めて居たと云ふことは、學問の普及に就ての當時の遺跡に徴しても、明らかな實事である。

また、此のウラジミル第一世がキエフを中心として、いかに、寺院に屬する宗教文化に資するための學校を建設し、且つ自分の子孫をも教育したかと云ふことは、この時代に發生したところの「新ボガツイル」を通じて知るまでもなく、古代年代記によつても認め得ることが出来ると思ふ。またかうした文明の提唱は、ウラジミル第一世の子、第一世ヤロスラヴ(教名ユーリ)(九七八)——一〇五四)によつて継ぎ守られた。

ヤロスラヴ一個人としても、この「賢明王」(彼のこと)の娘が、一人はポーランド皇子へ、一人はフランス王へ、一人はハンガリー王へ、一人はノルウェイ王へ嫁して行つた事實によつても見ることが出来る。

と云ふのは、是等の國々は、宗教文化の發達から見ても、その他の文明機關の完備と云ふ點から考へても、いづれも露西亞よりは遙かに秀れてゐたのである。

「賢明王」の娘達は、文化の輸出入の先觸れとして、外國への道を開拓したものと云ふことが出来る。

それはその後是等の國々へ、露西亞の建築法、繪畫(何れも宗教的のもの)が續々送り出され、

引替に後者の文物が頻りに持ち來たされたと云ふ證據もあることだし、一方地理上から見ても、彼等の便利を阻害するものは無かつた。

かうして、父の遺業を擴張して行つたヤロスラヴ第一世は讀書、筆寫の外に、ノヴオゴロドにある聖ソフィヤ寺院中に露西亞古代の獨立せる圖書館を建てたり、ギリシヤ僧侶を招いて、ギリシヤ文物を斯拉ヴ語に翻譯させたりした。聖シリル、メソヂウス兄弟の事業に對しては、益々その機運を高めしめて來たわけである。

十一世紀に於ける第一の文學的作物が現はるゝ迄には、以上のやうな課程があつた。しかしそれは、直接間接露西亞の上に感化を及ぼしてゐたビザンチン文明や、ギリシヤ文明、又はブルガリヤ文明の模倣に過ぎない。すべてが翻譯に止まつてゐたと云ふことは云ふまでもないことで、當時の民衆文化の程度に於ては之も亦止むを得ない現象でなければならぬだらう。

そこで十一世紀に於ける文字上の知識普及の主なる目的として考へられたことは、國民に與ふるに文字の心得ある僧侶を以てすることだつた。

その結果として露西亞人の中で最も早く文字上の知識を獲得したのは、宗教家、乃至宗教家の家庭に屬する人々であつたのは當然のことで、そして彼等が狙ふところは即ち、文學上の文化的仕事と云ふのは、筆寫、翻譯、淨書(聖典その他宗教上の書類を)に過ぎなかつたが、漸くこゝ

まで辿り着いた時に、私たちはこゝに始めて、露西亞最初の著述家を見出す機会に達することが出来るのだ。

それは其の當時のキエフ大教正であつたヒラリオンとノヴォゴロドの僧長ジチアータ・ルカの二人であつた。

「モーゼの興へたる法規とエス・キリストの慈愛と眞理」、の著者としてのヒラリオンは、徹頭徹尾聖ウラジミルの讚美者であつた。

彼はその著書の中にウラジミルの讚美と祈禱の形式とを公表する上に、多くの理論の知識と口述上の才能とを發揮してゐる。(此の他の人にも一〇五〇年頃の記稿が遺されてゐるが、これは僧グレゴリが、ノヴォゴロドの知事オストロミールに書いて興へたものと云ふ説がある)

ヒラリオンと同時代の人シチアータは、ノヴォゴロド僧長管區の説教——それには神に對する彼等キリスト教徒の感謝が書き連ねてある——を以て有名である許りではなく、その説教が最も完全な會話風の露西亞語によつて綴られたと云ふので、ビザンチン風の修辭學から、これを以て完全に解放されたロシア語の教文としての、最初の實例であると云ふことで、私たちの記憶に残つてゐる人である。

此處まで述べて來た私は順序として、次に來るべきネストルのことを述べなければならぬ。

傳説によれば、ネストルは十一世紀末から十二世紀初頭にかけて生きてゐた人であるが、この人に就てはこれまた餘り多く知られてゐないし、識るべき材料も少いのである。

だが、一〇七三年に僧侶の生活に入つた彼の年齢が、十七歳であつたと云ふところから考へると、彼は一〇五六年頃に生れたものと見なければならぬ。

一〇九一年には、キエフ市附近のベチョラに残つてゐる聖テオドシア、テオドシウスの遺跡を發見するために、出掛けて行つたらしい記録はあるが、そう云ふ紀行以外には「彼等の時代に起つた物語」の著者と、この人は單に傳説上の人物であつて、例のギリシヤ人で云へば、僧院のイグメン、シルウエステルのやうなものではなかつたか、と云ふ學者等の説も参考に止まるだけで、要するに議論は一つとして纏まつたものがない。

だが、ネストルに關する記稿として現今まで残つてゐるのは、十四世紀から十七世紀までのものに限られてゐて、ネストル研究家としては有名なラヴレンスキーや、ラヂヴィロフスキー其他二三の人々があるに過ぎない。

そして此の人達の記録も、あまり詳しくなかつたと記憶する。

その發端的年代記は、ノアの子孫の遺産であつた國々の、カタログから始まり、ずつと太古から認められてゐた地理的スケッチや、スラヴ民族の歴史——即ちこの民族がドナウベ河畔の放



浪生活から東北への移住、露西亞への到着、新しき國に於ける生活状態などに終つてゐる。

この年代記は八六二年から一一一〇年頃までの事實の記録である。

猶此の他にも彼の動物の話や、九一年の恐ろしき彗星の物語や、ギリシヤやローマの宗教的又は古代民族的の歴史譚や、例の聖シリル兄弟の話などがある。丁度この當時「バレイ」と云ふものがあつた。それは舊約全書の中から話を抄出し、それを僧侶の筆によつて短縮したものに過ぎない。

で、かうして作られた年代記の性質を調べれば、それは年代記作者の地位、階級若しくは修養によつて（ネストールのやうな人物もあるところを見れば）取扱ふ事實の上に、何等の批判もなく、或場合には甲事件と乙事件とを混交したり、ひどいのは偽造したり、想像に走り過ぎて正確な根據の上に立つて作らぬことを、左程の缺點とも考へなかつたらしいのである。

作者の大多数が宗教生活者、一般に僧侶であつたから、その記録する年代記の中には、信仰本位の取捨にもとづく種々の誤謬が発見されることも無理のない話ではあるが、しかし私ども露西亞古典文學の研究者にとつては、少なからぬ迷惑である。

先づ試みに年代記を繕いて見るならば、第一頁に現はれるのは、露西亞に於けるキリスト教の進歩の有様なのであると云ふ風に、露西亞文學史としては、先づ當然のことかも知れないが、年

代の順を追ふて事件の配列がしてある。

而もその年代を附する態度が非常に嚴格で、ある個所はブランクのまゝの所もある位である。

その用語は、寺院でのみ専ら使つてゐたスラヴ語と、露西亞語とである。（尤も「流轉年代録」は全部露西亞語で抒情詩風に書かれてゐる。そして一般人の會話に最も近いものだ。私たちはどちらかと云へば、この異本或は世話體年代記の方に、より多くの親しみを持つてゐる。何故ならば、こつちの方に多く當時の所謂流通語が用ひられてゐるからだ）。

かやうな風に當時の文人は僧侶に限られてゐたものであるから、その作品の性質が、世間的と云ふよりも、ずつと宗教の學問に片よつてゐたことは當然のことだと思ふ。であるから、十一世紀、十二世紀の宗教文學に於ける第一の試みも、僅かに宗教的感化の印象をとゞむるに過ぎなかつたので、それは宗教文學を創造したと云はれる「ウラジミル第二の説教」にも窺ふことの出来る事實であると思ふ。

このウラジミル第二世は當時の人物中では、最も頭の良い、修養のある皇子だつた。そればかりでなく、彼は非常な愛國者であつた。

自分達の兄弟が、ガリシヤのロスチスラヴィツチと争ふのに助力しなかつたと云ふことで、兄弟達の怒と復讐を恐れてゐた程の、當時にあつては極めて温良な君子であつた。そして彼は、い

つも自分の子達を戒めるために自ら教訓を書いた。

それがつまりこの「ウラジミル第二の説教」なので、大略すると、要するにキリスト教徒としての君主の徳を列べて見せたもので、一寸面白く思はれるのは、その教訓の實例に十三世紀頃の幾多の皇子の生活を描寫してゐることである。

即ちこれ又、宗教文學の一つとして數へることが出来る。

是等宗教文學の作者が修道士に限られてゐたことは既に述べた。

この最初の文學上の一種の紀念的遺物は、時代の要求を最も端的に表示してゐたのである。

即ち社會が持たなかつたところの諷刺、鞭撻の啓示をも悉く備へてゐた、と云ふことが出来るであらう。

無學な民衆——事實に於て異端者の生活を營んでゐた最大多數者は、人生の問題を明確に意識し、且つその攻究の必要を認める迄には進んでゐなかつたし、またその資格もなかつた。

即ち、彼等はそう云ふことに適すべく啓發されるまでには、到らない状態にあつた。

それよりも寧ろ彼等は、全くその當時の單純な、勞苦の多い生活を、各方面から脅かされる危険から、救ひ出すことに腐心してゐたのである。當面の問題はそこに在つた。

彼等の周圍には絶えざる外敵が彼等を狙つてゐた。だから、早く云へば休息の時にも餘暇の時

間にも、彼等民衆の空想は、自分達の至つて荒つぽいお粗末な、少しばかりの動物的欲望や欲求や要求を、これまで充して呉れたところの、或る一定制限世界を守るための肉體の力、筋肉の力、腕力の奇蹟や活躍を露骨に示してゐる神話や、傳説、史話の水準を突破して、その上に浮び上るだけの餘裕を持たなかつた。

彼等はまだ、舊態依然として、精神人間であるよりも、腕力人間である方が、生存の上便利でもあり、且つ安全でもあつたのだ。

即ち民衆は自分達を養つて呉れる王や、皇子や貴族や地主など、共に楽しい、夢のやうな生活を續けることにのみ、生活の意義を發見してゐた。

この高貴の從屬者、その從屬者にも階級はあつたが、兎に角、このドルジュニ一の階級は、生活の上の安定と便利を占めてゐて、一方最大多數の民衆の上に、主動的立場を築いてゐたのである。

彼等は王や皇子の手下であり、一般民衆に對しては、一つの権力團體でもあつたのだ。

かくして、彼等は社會の計畫、事業の目論まれる場合には、無くては叶はぬ階級となつて了つた。

當時の外敵——未開人の侵略——に備へられてゐた兵士達も亦、此の階級から組織されるやうになつたことは史實にもある通りだが、かやうなドルジュニ一（從屬階級者）の、十二世紀の生

活に於ける主なる記録は、これを文學的作品に俟つて見るには、私たちのために「イゴールの遠征物語」がある。

これは當時の皇子達が所謂 *Petit Cont* の最もいゝ傾向と理想のために立つてゐた頃、ドルジュニーの中の一人の、カリキ・ペレコジイ（琵琶法師又は樂人）の手によつて作られた、最も優れた「謠」である。

これは處々、韻律を備へてゐるが、大體は散文なので、その當時の他の禁欲主義の文學や、隱遁者風の作物に比べると、頗る奇抜で且つ新しいものであつた。

その主題から調子まで從來の作品とは、ずつと異つた色彩と感情の中に作られたものであつた。勿論カリキ・ペレコジイの中の誰が作つたのかわからない。

だが此の單一渾然とした物語歌謠が、それまで存在してゐた他の神話や傳説と同じやうに、言葉の中にある限りの技巧を弄び、更に遠い太古の神話迄も参考にしたものを見て、その神話の中に於てすら、殆んど人間から忘れられてゐるやうな名前を取つて、物語の中に織り込んであつたために、當時の人々の力の程度では、なか／＼解り難いものらしかつた。

最初、この物語歌謠は十八世紀末（一八〇〇年）に、古代研究家で同時に文學者であつたムスキン・ブーシユキンと云ふ露西亞の伯爵によつて發見されたもので、その後、北方露西亞人に模

倣され、續々として類似の物語が作られたほどの傑作であつたが、不幸にして物語の原形は、モスクワの大火の際に、神話蒐集家の家と共に焼け失せて了つたと云ふことである。

この歌謠が、その當時餘り讀まれなかつたと云ふ理由は、その解釋に骨の折れる爲か、と云ふことを私は一寸先刻述べたが、別に、シヤクノウスキの説を参照すれば、實は此の物語の内容に異教徒の信仰が盛られてゐたために、歌謠としては優れたものには相違ないけれども、何分、その時代の事で、キリスト教に反する記述文學としては、大びらに流布することを憚かつたものと見えるのである。

それは兎に角、ムスキン・ブーシユキン伯爵の手で發見された時、露西亞の知識階級は、此れこそスラヴ詩人のギリシヤ風の歌謠であるとなして、非常な歡迎を與へたものであつた。北方露西亞文學の功績は他にも色々あるだらうが、かうしたキエフ文學の古代作品を完全に保有して行つたと云ふことも、其の中に數へねばならぬと云ふ次第だつた。

それほどの傑作「イゴール兵の遠征物語」は、實に十二世紀文學のすべてを蔽ひ盡すことの出來る巨作であつたに相違ないであらう。

今その物語の筋を簡単に述べれば、相互に敵視してゐたウラジミル二世の二家族、オルゴウイツチとモノマホウイツチとの勢力争ひなのである。

一七六年にフセヴォロド・ユリエウイチ（ウラジミール二世の長子）が太公になつた。

その時中央政府が、モスクワ市の附近にあるウラジミールに移された。丁度その時に又、オルゴウイチの長子スヴィヤトスラヴ・フセヴォロドウイチが、キエフ町の太公を稱した。フセヴォロド即位後の数年間は、後者との争ひに費やされたのである。二人の皇子リウリツクとダウトイツドが、このモノマホウイチから放れて中立する。

一方では、イゴルとフセヴォロド（二人共スヴィヤトスラヴの子）が立つたさうしてこの五十年來、露西亞を頻りに狙つてゐた統治者のポーロヴィツチを前者が征服して勇名を馳せた。しかしオルゴウイチは、これまでしばしばポーロヴィツチを助けることによつて、自分の利益をばかつて來たのであるが、そうした關係から評判はよくなかつた。

かくて一一八一年、フセヴォロドは、これまで太公に反對してスヴィヤトスラヴに備はれてゐたポーロヴィツの階級間にも有名になつた。

イゴル自身は是等ポーロヴィツチの首領として働いたものであるが、モノマホウイチとリウリツク・ロスチスラヴィツチのために、打ちキエフ附近で散々に敗られて了つたのである。

かくて、ポーロヴィツに向つてゐたモノマホウイチの後胤により以上の親和を以て從屬してゐた人民の目には、ポーロヴィツがオルコヴィツチの上に、汚辱を與へた者と見なされたわけ

である。

一一八一年、南方の露西亞皇子達は、ポーロヴィツと敵對するやうになつた。

この遠征中にイゴルと、ノヴォゴロドの皇子セヴェルスキート、彼の兄弟フセヴォロド（ツルグツクの）は、共に争にたずさはることを拒んだが、戦は勝利であつた。

一一八五年に、イゴルとフセヴォロドは、ポーロヴィツ征伐に向つた。その時彼の子、ブチゾルの皇子ウラジミールもこれに加はつた。クルスクのスヴィヤトスラヴも加はつたのである。

「年代記」によれば、ドン河に近づく頃、彼等遠征隊は太陽が月のやうに暗くなるのを見て、之れは何かの凶兆だと思つた。しかしイゴルは頓着しない。そのまゝドン河を渡つた。

オスコルクに於て、彼はクルスクからはる／＼應援に來る兄弟フセヴォロドを、二日ばかり待ち合せて出發した。

かくて開かれたポーロヴィツとの戦の第一回には、見事な勝利を得たが、第二回目には見る影もなく、打破られて、彼を始め皇子達は捕虜にされて了つた。

イゴルの後悔は非常なものであつたが、囚れの彼の前に、或る日突然ラヴォルと云ふボロヴィツが現れて、救つてやるから、こつそり逃げると云つたのである。イゴルは、そんな事をしては後々の恥になるから嫌だと云つて斷つた。

だが、再三勤められ、到頭牢獄を破つて逃げたのである。その時に既に、この種族の統治者の娘と結婚してゐた皇子ウラジミルと、兄弟のフセヴォロドを連れて首尾よく無事でやつて来た。

と、云ふのが、この長物語の大體の筋なのであるが、作者は、露西亞史から見れば左程重大でなかつたこの事實を取扱つて、自分の愛國心を披瀝し、自分の考へた當時の社會状態に對する興味を、鋭い血色文字で盛つてゐるのである。

この物語を歴史的に見ることを止めて、作者の描くところに従へば、先づ、物語の山と云ふべき處は、野心の強い若い皇子達が、草原の土賊を征伐に出やうと云ふ冒険心を起すくだりから、最初は旨く行つたが、そのうちに兄弟達が連絡を断たれて、イゴルが虜になる、しかし苦心の末に逃げのびて戻ると云ふことなのであるが、そのうちに太公が前非を悔ひ始め、子どもの事を思ひ悩み、イゴルの妻は妻で泣き悲しみ、その聲が風に送られて大草原を越え、ブチゾルの陣から聞えて来る。すると彼女はドニ河を、まるで木啄のやうに飛び下つた。その時カヤラ河の流で、海鼠の皮で造つた着物の裾を濡らし、それで息子の疵跡を洗つてやる。彼はドニ河に彼女の夫を連れて来いと云ふ。

彼女はイゴルが殺された後の露西亞の悲しみを考へてゐた。そこへ首尾よく戻つて来るのだ。

「今や、國土は喜び、民は樂しみ、先づは年老へる公子達に、次に若き皇子に、歌はさゞげ向けられたり」と云ふことで終つてゐるのである——

以上述べたやうに露西亞人の知識と才能とは、最高の精神的文化に向つて、着々と歩を進められては来たが、それは單にビザンチン文學の御手本の模倣に過ぎなかつた。

つまりビザンチン風の修辭學と、他の文字上の産物をモデルとしたもの許りであつた。

これまでの話によつて、私は露西亞に於ける文化を培植し養育する「土」は誠に順眞に其の使命を果して来たことを告げねばならぬ。

文字の知識——第一階段にあつた文化——は凡ての上流社會を風靡した。

こゝに、も一とつ附け足さねばならぬと思ふのは、當時の著作家の一人に數へて恥かしくない「ソロモンの寓話」や「エスの智慧」や「シラクの子」などの著者であるところの「囚人ダニエル」のことである。

ダニエルが右の作を取て物したのは、彼の保護者であつたベレヤスラヴ公の憤怒を和らげるためだつたと云ふことだが、どう云ふ譯であるか、兎に角、彼はベレヤスラヴ公のために、ラツヘ湖に沈められて死んだ、と云ふ記録が残つてゐるだけで、その他に彼を語る材料が、殆んど無いことを遺憾に思ふ。

この他にも當時の古代露西亞文化の裏面に於て、さまざまの文献的努力をなした人は幾人もあ

つたが、さうした人々によつて築かれた文化は、やがて韃靼人の侵略によつて、悉くと云はないまでも、あらかた亡ぼされなければならぬ運命を持つてゐたのである。

十八世紀前の露西亞がその「土」の中に、是等啓蒙の根を残して置いたのは、唯僅かに寺院だけであつた。

露西亞全土を征服した韃靼の遊牧民族が、露西亞に發見した固定文化生活の畫幅に引きつけられ、迷信的空想の半野蠻人が、堂々たる建築の寺院の群像の中に、古代露西亞の宗教文化の其の畫幅に驚嘆し魂を奪はれた事の結果として、この未知物に對する彼等の恐怖心は、やがて僧侶に與へる特權の一つとなつて現はれた。

韃靼人は寺院の僧侶に對して、貢ぐ必要のないことを布告した。寺院に免税の資格を與へて、彼等及寺院を利用しようと考えたのである。

生命財産の保證を得た僧侶達は、その城壁（當時の寺院は、丁度日本の封建時代の大名の居城のやうに廣大な土地、即ち寺領を有し、そこに素晴らしい殿堂を建てゝゐた）の中に隠れて、専心年代記を書くことに耽けるばかりでなく、十一、十二、十三世紀に外來した種々の書籍の翻譯に没頭し、國民の宗教精神を弘め、道德思想を養ふことに努めてゐたものである。

彼等が云ふが如くんば、韃靼の侵入は、國民が異教を信じたために加へられた懲罰であつた。

有名な僧セラピオンは、この追ひ詰められた寺僧の中にゐたのである。彼はウラジミルの僧正であつた。

この恐ろしき時代に著作された彼の説教が、今日「セラピオンの教文」として残つてゐるのである。年代記によれば彼は稀に見る博識の僧侶であつた。

一二七四年、彼はキエフ、ベチエルスキーの教僧正からウラジミルの僧正に昇進し、一二七五年に死んだ。彼も亦、教文の中に韃靼の侵入と暴行を、國民の不信仰によるものと説いてゐるさうである。

かやうな具合に、韃靼の厄に關する事跡は、その時代の人々の心を掻き亂し惱ました。

そして是等の人々は、讀む人のために作られた印象その物の爲の、祈願風だと云はれた全部の物語の中に、その説明を見出したのである。

その著しいものが、マイ・ザドンシチナ（一三八〇年間のドミトリー・ドンスコイの韃靼征服、ドン河地方からやつて來たもの）の虐殺物語であらうと思ふ。その内容に多少の誇張があるとしても、是等の作品は韃靼に對する無限の憎悪と、韃靼の犠牲になつてゐた露西亞人に對する同胞的感情の現はれとして、興味深く見ることが出来る。

またこの「ザドンシチナ」が「イゴル兵の遠征物語」の模倣であるとしても、一三八〇年、

クリロコヴォの役に關する唯一の記録と云ふ點から見れば、勿論存在の價値を認めなければならぬものだと思は考へる。

さてこの十四世紀に於ける作品の摺經典的物語、或は古典文學の一部として十六世紀頃まで傳へられて來た宗教的内容の私的作物——即ちある一つの公認事實を取扱つた物語に對して作られたもの——の目錄を擧ぐれば「セツトの祈り」、「エノツク」、「アダムスの指揮」、「十二僧の命令書」其の他がある。

是等は等しくこの十四世紀末葉に於ける記述文學の閉鎖期を形造る要素の一つとはなつた。

顧りみればそれは、眞に個性に乏しい生活、個人の權利に對しても、社會一般の意嚮や輿論に對しても、彼等の統治者からは何の尊敬も拂はれなかつた興味のない時代であつた。

一方に於てはこれ以上の發展には好ましくない種々の境遇に、四面を取り圍まれてゐた。これ以上の發展云々といふのは、敵意あり嫉妬心の強い近隣、西部ヨーロッパに、一旦押しつけられた文化の忌避であつて、露西亞は露西亞自身の工夫による文化に、暫くは我慢しなければならぬいやな行詰りの形となつて來たことだ。

だから、稍ともすれば沈滞に傾むかうとする一部社會に、必然の現象として、新しい「疾病」が現はれて來なければ濟まない譯である。その疾病とは何であるかと云へば、あらゆる露西亞

文明の價値と、其の重きをなしてゐる事實は、すでに不可論の事であつて、それは何人も確かに信じて疑はないことだ。

即ち現在の露西亞文化は、これ以上の補足と修正の必要を認めない。これで澤山だと云ふやうな、露西亞人自身の目や心に映る幻影或は幻想である。

そうした信念を持つて、外國の如何なる嶄新な文物から受ける牽引、感化が、どれほど自分たちに取つて利益があらうと、これを恐れた。それが爲に、自分達の幸福が増進されるとは、どうしても信じなかつた。そう云ふ「疾病」なのである。

ところが、露西亞のためには、こんな不幸な事態が長く續くことを許さないものが現はれた。それは所謂「文藝復興」として知られてゐる、十五世紀から十六世紀にかけての、西南ヨーロッパを導いて行つた、やゝ漸進的ではあるが、その範圍の廣大な運動から受けた遠い餘波であつたのだ。それはまことに偶然に湧き起つた波紋であらねばならぬ。

だがそれは、この行詰りの時代に於ける露西亞自身が、來るべき十六世紀文學壇の花形と、社會的の活躍家の、最も優秀な人物を得やうとする不可避の運命だつたと云ふことも出来る。

その花形役者として突如擡頭したものに、マキシムと云ふアトスのギリシャ僧侶があつた。彼はその始め、ワシリー・イヴノヴィツチ（一四七九——一五三三）太公が、自分の圖書館に

藏されてゐるギリシヤ古文書の、總目錄を作るために（一五一八年）招かれて來たのであつた。私は今、この僧侶に就いていさゝかの記述を試みようと思ふ。

彼は、青年時代を北部伊太利で費した。と云ふ、一つの原因は、十五世紀のギリシヤがトルコ人の暴虐から安全を求めやうと、蕩擻く状態にあつた。従つて、トルコ人から最も迫害された學者、僧侶の類は、こぞつて、伊太利北部の地へ隱遁所を見出したからで、彼も、其の一人であつた。

伊太利で彼が教育の面倒を見て呉れたのは、伊太利宗教史を讀む人が、必ずや其の勇敢な魂と精力に驚ろかされるであらうところの有名な社會革新者サヴォナローラであつた。僧マキシムはサヴォナローラの感化を受けたのである。

その後伊太利からギリシヤへ戻り、アトスで僧籍に入つた。かくてモスクワに來た彼は暫く宗教書類の校正係を勤めてゐたが、それに満足しなかつた彼は、露西亞の寺院で行はれてゐた虚偽的宗教々育に向つて、正面から攻撃を始めたのである。

そして一四七九年、パミル、ヨハノヴィツチ朝の文化混沌と、一五三〇年から一五八四年までつゞいたイヴァン第四世初期の社會秩序の混亂に際し、猶太教化しつゝあつた社會に對して、露西亞語で書かれた彼の百餘種の攻撃論文とギリシヤ・オルソドワックスの罵倒とは、彼を憎み嫌ふ

反對者及び爲政者に絶好の機會を與へたものであつた。

イヴァン第四世は彼をトロイツエーセルギウスキー修道院に幽閉して了つた。

かくて忽然と現はれた彗星的人物は、また人知れず此の修道院で死んだのである。

この時まで、僧マキシムに刺戟されたイヴァン第四世の社會は、一つの目醒めを感じた。その結果と云ふべきは、社會學的にも文學的にも、この時代を代表する「ドモストロイ」を生むに至つた、ものだと稱しても差支へないだらうと考へる。

「ドモストロイ」はイヴァン第四世の道徳顧問僧正シルヴェステルのために編まれた家政學、社會學、修養等を含めた一大經濟學の、六十三章に渡る論文であつた。

後世の歴史家のためには、十六世紀に於ける露西亞の社會状態を知るべき、唯一の産物であらうと思ふ。

餘談に涉るかも知れないが、デンマルクから活字母の職工や、印刷業にたづさはる職人を招いて、僧イヴァン・フョドロヴィツチと僧ビョートル・チモフィエーフがその助手のやうな形で、ロシア文字の本が少し許り印刷されたのは此の時であつた。

歴史の上に現はれた所の「聖シリル寺院のカズマに與へる書簡」が、唯一の著述であるイヴァン第四世は當時としてはまことに傑物に相違ない。がそのイヴァン第四世が十六世紀の時代人であ



と同じ意味に於て、私は次に述べやうとするアンドルウ・ミハイロヴィツチ・クルプスキーもまた時代人であつたと云はねばならぬだらう。

この時代の特徴ある記念物として、その内容に渾然性を持つてゐるものは、イヴァン第四世とクルプスキーとが往復した書信であらう。

由來相反せる主義（宗教上の）の闘争が、此の國の社會状態を明らかに寫したものと見得るならば、今云つた私の言葉は、決して空言に終るものではないだらうと思ふ。

イヴァン第四世が大した學者ではなかつたやうに、クルプスキーもまた左様であつた。私はクルプスキーへ二通の長々しき書簡を送つてゐる。

書簡とは云ふが、優に一冊の本を作るだけの分量のものが、書簡の形式になつてゐるのである。クルプスキーの方では前後に渡つて四通の返信を書いてゐる。これも同様に大部のものらしかつた。

それは一五八三年から一五八九年頃までのものに限られてゐるが、後に彼はイヴァン第四世に背いてポーランドへ逃亡した。

クルプスキーがリヴォニアの戦に敗れ、イヴァン第四世の怒りを恐れて、一五六四年にリスニアへ入つたのが、つまりそれで、イヴァン第四世は彼に歸服をすゝめたが、彼はイヴァンに楯

ついて戻ることしなかつた。

その時、クルプスキーの書信を携へて來た使者を捕へた皇帝は、其の手紙を読んだ後で、使者の足首を床の上に釘づけにしたと云ふ史實があることを人々は知るであらう。

皮肉と諷刺（尤も露西亞文學の目的と云ふのは當時其の邊にあつたらしい）を盛つた手紙はクルプスキーへ送られた。有名な手紙の一部が、つまりそれである。

クルプスキーがモスクワ附近の、ある有力な行政官に與へた手紙によつて見れば、彼はこの恐怖王に楯衝きかねない程自我の強い人物であつた。

クルプスキーの手紙の内容は一口に云ふと、イヴァン第四世の權力の悪用を非難し、且つ帝の周圍に善良な補佐者がゐない限りは、彼の統治は無茶苦茶だと云ふ悪口なのである。このクルプスキーにして始めてこの皇帝は面目を發揮した。それは「イヴァン恐怖王傳」がクルプスキーによつて書かれたからである。

クルプスキーの眼目は、この恐怖王の性格の中にある心機を開明するにあつたらしいが、露西亞人が露西亞の功利主義的歴史の著述に手を染めたのは、これが最初だらうと思ふ。

で、私は露西亞文學が近代に入る前に、先づ此の十四世紀頃に起つた露西亞南西部の新文化と、十七世紀に於ける教育、最後にキエフからモスクワにやつて來た學者達によつて紹介された新し

き文學上の主義主張について一通りお話をしなければなるまいと思ふ。

丁度その頃モスクワにゐた少數の教育者が、露西亞に於ける文化事業の不備によつて生ずる不道徳や、政治の缺陷や、經濟上の不振を嘆じてゐた時に、露西亞西南部に突然文化の火花が散り始めた。

中心地は古都キエフであつた。が、その文化運動は非常な普遍性を以て、未開の東北部へ向つて押し流れて來た。

しかし十七世紀初頭に近づくにつれて性質は漸變したのである。キエフ文化は一般民衆を離れて、單に貴族及び富豪階級の所有物となり、この二者の知識及び徳育の標準を、高めることに役立つものとなつて了つた。

この限定された教育と云ふのは、ギリシヤ、スラヴ、ロシヤ、ラテン、或はポーランドの各言語の修辭學、詩、論理學其の他の形而上學の研究であつた。

この研究が廣められると同時に、學生を收容する學校が各地(ヘルヴオフ、ヴィルナ、キエフ、ミンスク等)に盛んに建てられたのである。そうして例のグツテンベルヒの印刷機械發明は、この運動に急速の進歩を促がさずにはなかつた。

かくしてキエフは西南部露西亞の文化發育の中心地となり、そこへ集る學者達は露西亞古代文

の根柢を築いて了つた。だが何れの時代に於てもさうであつたやうに、この華々しく且つ多忙な時代に於ても、矢張り無學と無智になれた民衆は、昔の氣儘な生活を忘れることが出来なかつた。民衆はイヴァン恐怖王統治下の有識階級、特に貴族の惨敗を知つてゐた。そして今、また同じやうにポイヤル(貴族)が新しく生れたロマノフ朝の下にあつて、不可抗の權力を奮ふのを見てゐた。

その結果として、たとへそれが「善」であらうと「惡」であらうと、すべての命令、すべての宣傳、すべての運動は皆、上流社會、ことにその中心をなしてゐる皇帝によつて始められ、發布せられて、始めてそこに效力があり成功があるのだ。それが段々と下々の社會へも惠まれて來る。

それが眞正の運動であると云ふ信念を抱くやうになつた。

そう云ふ考へはモスクワやキエフ以外の大多數の民衆の頭にこびりついてゐた。だから彼等の間に食ひ込んで行くには、當時の學問はあまり無力に過ぎた。従つてその學問は依然としてモスクワやキエフの閥門を出なかつたと云つていゝ。

ことにそうした學問を一部の都會に封じて了つたのは、民衆に憧憬され、彼等の心によつて漸時擴張されて行つた傳説の愛好であつた。

昔を愛し、傳説を尊ぶ彼等の精神生活には、何の改革も革新も必要でない許りか、それは一つ

の恐怖として見られたのである。

この極端の無識は、宗教問題に對して、殊にこの馬鹿々々しい傾向を形成したものだ。

寧ろこんな浮薄な、どちらかと云へば當時の露西人にとつては贅澤極はまる形而上學の研究よりも、より痛切にその必要を感じられたのは、物質上の向上でなければならぬことを、彼等は自覺してゐた。

その結果（一五九六年から一六四五年のミハイル皇帝時代）には、民衆の願望は容れられて、製造業者、職工、手工工人等が隣接する國から招ばれた。即ちかうした部門の知識の必要は、露西亞人をして科學に秀れた外國人を國內に入れしめたと見るべきであらう。

ところが亦一方に於ては、かう云ふ運動が起りかけた。それは西部ヨーロッパの急速の接觸によつて目醒しい進歩が、社會の中心に始まつた。だが我々は何處までも露西亞人なのだから、我々の持つてゐる個性、特徴は何處までも他國人のそれと、差別をつけて保存しなければならぬといふ。

も一つは、ギリシヤ人が昔持つて來た宗教々典、或は教義は、矢張りその純潔を保たなければならぬと云ふのである。

この保守的運動は、一六三三年に到つて僧、パトリアク・フィラレーの學校建設（彼は「奇蹟の

寺」に屬する専門學校を建て、「チユドウスキ」と稱した）に始まつて、南方スラヴ族出身者やギリシヤ僧侶の露西亞入國となり、汎スラヴ國建設運動や、スラヴ語の宣傳や、スラヴ歴史の編纂、露西亞地理の出版となつて事實化した。

その活動圏内にあつたスラヴ族オストリア土人のカトリック僧イユリー・クリジヤニツチ（一六五九年）などは、その目的がスラヴ語の筆讀を助成するためばかりでなく、獨逸の露西亞に於ける野望を斥けるためにも、彼等スラヴ人種を欺く他國人の虚偽陰謀を暴露するためにも、文法書、辭典以外に種々の小著述を企てたと云ふのである。

だが、物質主義——つまり言語學、宗教學を迂遠の修業とする一派、即ち民衆は勝つた。彼等は間もなく、功利主義一點張りの皇帝を迎へねばならなかつた。それは歴史的人物ピョートル一世の出現である。ピョートル一世の十七世紀末に於ける、所謂文化改革の嫌厭は甚だしいものであつたと云はねばならぬ。その一つの實例として、彼は、イオアキム僧正がピョートル大帝に獻策して、文化輸入者の外國人を一人残らず國外へ追ひ出して了つたと云ふことを挙げやう。

だが、十八世紀の前半期を蔽ひ盡すところの文學に資したる此の時代のことには、是非とも述べなければならぬものであらう。民衆は透徹せる人格と、實際的頭腦の持主であり、且つボガツイリそれ自身であるピョートル一世の下につて、彼が功利主義的以上の見地から考へること

の出来ない文學及教育を興へられて、そして此の偉大なる露西亞文明改革者が種々の物質學の研究機關を設立するにも拘はらず、一向これまでのスラヴ、ラテンの文學、教育専門の學校教育の擴張を計らなかつたと云ふことに對して、いさゝかの不平をも示さなかつたと云ふことは、寧ろ當然のこととして、誰もが考へて差支へないことだらうと思ふ。彼等は從來の翻譯文教の羈絆から一步も出ることを取てしなかつた。

學校は實利上の語學専門に限られた。かうした境遇の中から、事態を顧みて嘆聲を放つ者も少くなかつたが、其の中で眞實に心から叫び出した者として、私たちの記憶に甦へて來るのは、何人よりも先づ「貧富論」の著者ボソシニコーフ（イワン・チホノウイツチ）でなければなるまい。

ボソシニコーフは一六七〇年に生れた純粹の農民文人であつた。彼が著述に於ける出發點は、當時の社會生活の缺陷を衝いて、政府の注意を惹くことであつた。

丁度ビョートル第一世が、社會事業の工程を處理し始めた時に、彼は統治策の一つとして社會改革上、種々の新事業、新計畫に盛んに投資した。同時にそれまで沈黙を守つてゐた輿論が沸然として湧き上つた。

是等の計畫者、企業商人の中にあつて、一入異彩を放つてゐたのがボソシニコーフである。彼は

彼が見聞する社會の事實に就て、彼の理想に相反するものを指して、大膽に叫び出したのである。

彼はそれを熱烈な愛國的感激を以て叫んだのである。

モルヴィア人と云つて隣國の人々から嘲笑されたり、お笑ひ草になつてゐることが、彼の血を一層燃やした。彼は當時の行政に楯衝いて、寧ろトルコの正義人道と社會秩序の方がまじだと叫んで割せられたのであるが、實際彼自身に保守的性質があるに拘もらず、彼等（トルコ）に學ぶことを厭はなかつた。

そこへビョートル第一世の火のやうな感情は、遂にボソシニコーフの熱心に報ゆるに死刑を以てしたのである。

彼は捕はれてペテルスブルグのビョートル・ポーロ城の牢へ投げ込まれた。かくて、ビョートル第一世の死に後るゝこと幾ばくもなくして牢死した。それは一七二六年のことであつた。

ボソシニコーフは要するに、彼自身がたとへモルダウイヤ民族の中から、より以上理解のある人々を見出すことが出来ても、露西亞の農民がより以上有利な境遇にあつても、自分自身の力によつて一體何が出来るかと云ふことを具體的に示した人間の見本だつた、と云ふことに歸するのではなからうかと思ふ。

時に又彼と時代を同じうしてゐたビョートル大帝の顧問の一人に、ノヴオゴロドの大僧正（一六

八一年生)・テオフアン・プロボコウイチと云ふ人物があつたことを私は思ひ出すのである。

それと共に彼の作「ヴラジミール」と云ふ悲喜劇を思ひ出す。

一七一六年にプロボコウイチはペテルスブルグへ呼ばれた。ペテルスブルグに於ける彼の文  
化事業は、これまでの僧侶と軌を同じうして説教から始まる。しかし、前者等と異なるところは、  
宗教學に基礎を置く所謂僧侶文士ではなくて、平の修道者の文人として、露西亞古典文學史上に、  
素晴らしい位置を作つたのだと云ふ方が適してゐるだらうと思ふ。即ち、私が彼を指して、露西  
亞を通じ、この改造期を通じて、最初の修道者文人と云ふ理由の主なるものは、彼が僧籍の人物  
であるに拘はらず、その廣汎なる知識と、全生涯を社會改造に委ねた熱情とを以て、一方に於て  
は、彼の著作の上に自分自身を、露西亞古代精神、云ひかへれば、傳説若しくは神話文學の傳統  
から切り離して了つたからである。

以上少しく述べたやうに、ピョートル第一世が科學は無論、文學までも彼の功利主義から眺め且  
つ獎勵した結果として、社會の先覺者、文學者の中にも、科學と文藝との區別を立てる上に、い  
さゝかの正當な考察をも持ち合せなかつた人々が、その大部分を占めてゐたことは當然のことゝ  
云はねばならぬ。

それは大抵の國にも一度はいづれのそう云ふ時代があつたやうに、學者その他の知識階級者は

文學を遊戲の一つと見做してゐた。

仕事の合間々々の暇つなぎの道具と心得てゐた。

この時代の文學的産物の有様が、科學は文學の目的物に近く、文學は科學への道程と云ふ風に  
見えたのは、これを史實に基いて、エリサベス・ペトロヴナと云ふやうな女帝時代のいかなる文  
人も、カンテミールから下つてロモノソフに到るまでは、文人は教師であり、文學は餘技であ  
つたことを實證してゐる。要するに文學は獨立するまでの性質に缺けてゐたのだ。

今、話をしたテオフアン・プロボコウイチがその一例ではあるまいか。彼が文學上の著作(彼に  
は數十編の詩がある)に費した時間は、先刻云つたやうに、教師の暇潰しに過ぎなかつたのである。  
プロボコウイチに就て大體の話をした私は、やがて獨立文學の時期に近かすかねばならない。

その前に當時の巨匠カンテミール及びロモノソフの二時代を経なければならぬ。そして進み  
ゆくまゝに、その時代、及び人物の輪廓と思想とを巨細に紹介したいと考へてゐるので、それま  
での話は、こゝに行きつくまでの序説であつた。

そのために私は、ことさらに説き盡くさねばならぬ色々の事柄を一切、控へて來たことを改め  
て此處で告白して置きたいのである。

そして改めて機會を俟つた上で、以上に就ても、また後に來るところの數人の文學者に就ても

稿を新たにして説くことを願つてゐる。さてこの文學の方面で純文學者でない片手間の文人ばかりが、以上の匿名期（或は無名期）と匿名（或は無名）式の流布に依て、原稿のまゝで残されたり傳へられたりしたかと、云ふとさうではない。

職業文士（或る程度までの）さへ、最初は同じ趣味の人々の間に於ける極々狭い評判とか、名聲とか、そうした小さい勝利に満足してゐた。

でなければ、別に個人の事情で出版することを控へてゐたのであつて、そこに自然に現はれて來たのが二つの傾向であつた。

一つは、ピョートル第一世の精神を守つて、獨逸の知識上の活動を續けて行く（タチシエーフ）と云ふ傾向と、今一つは、佛蘭西の優雅な文學を模倣することの、この二つであつた。

それはカンテミールによつて代表され、つゞいてトレジャヤコーフスキーやスマローコフと云ふやうな、當代の主導的文學者によつて受け繼がれて來たのである。

そのカンテミールもタチシエーフも孤獨にその主義を守つて來た。

先づ私は、カンテミール（アンチオク・ドミトリエヴィツチ公のこと）に就て多少の記述を試みようと思ふ。

カンテミールは一七〇八年に、モルダヴィアに生れた貴族であつた。彼の父ドトリー・カンテ

ミールは即ちモルダヴィアの貴族の後胤であつた。一七一一年、ブルート河上の悲惨な遠征が行はれた後に、彼は四千幾百の同胞と、彼の家族とを率ゐて露西亞へ移住したのである。その時カンテミールは僅かに三歳の小兒だつた。やがて彼の父はピョートル第一世の顧問に起用されて、ベルスブルグに住居した。カンテミールの家庭教育は、この町のギムナジウムで始められたのである。

両親の感化を比べるならば、母親の方が強かつた。カンテミールの母親はもとギリシヤ人で、驚くべき教育のある、なか／＼惻巧な婦人だつたと云ふことで、それはカンテミール自身の手になる自叙傳を見れば詳細に知ることが出来る。

「彼女の美しい性質は同性のすべてから尊敬された。だが、それは彼女の持ち物としては一番貧弱なものである」と云はれるほどの彼女は、アナスタシウス・コントイデスと云ふギリシヤ人の僧侶の力を借りて、自ら子供を躱けた。

彼はラテン語とイタリー語を學んだ。そして十歳になつた時に、モスクワ大學に於て、ピョートル第一世の面前で、ギリシヤ語の聖デメトリウス頌徳歌を完全に暗誦し得る程、語學の才能に秀でゝゐたと云ふことである。

このカンテミールの最初の仕事と云ふのは、ピョートル第一世の指導にかゝる翻譯に従ふことで

其の後露西亞人の一教師が、皇帝に代つて彼を教導した。

この教師と云ふのは、カンテミールの記録によれば、イヴン・イリンスキーと云ふ名前でも詩形學に通じてゐたために、カンテミールに作詩を奨励したと云ふ話であるが、カンテミールが詩作に興味を持った理由の一つと見ることも出来るだらう。

十七歳の時に、他の貴族の子弟が踏んで行く道——ブレオブラゼンスキー護衛兵隊に入つた。彼がテオフアン・プロコポウイチと相識したのは丁度その頃らしい。かくて一七三一年にロンドンへ行つた。その少し前にアンナ・ヨハノヴナが帝位に即いたのである。

今カンテミールの文學上の作品を挙げるならば、彼がロンドンへ出掛ける迄に書いてゐた五種の諷刺文がある。その一部は童話だ、他は詩である。ロンドンへ派遣される前から、彼の文學上の名聲は貴族間に聞えてゐたらしい。

カンテミールが得意だつたのは詩よりも諷刺である。諷刺文を書いたのは、一つは彼が愛讀してゐたホレイシオやボワロウあたりの感化があつたために、一つは、社會的にも文學的にもこな過渡期に出會つたためにであらうと思ふ。

ロンドン以後のものに「學問の敵」と云ふ作品がある。これも諷刺だ。それは大體を云ふと、この時代の露西亞人が、いかにも科學及藝術的の職業に役に立たなかつたかといふことを書いた

ものである。

この外にも、「私のミューズへ」とか、「諷刺文を書くことの危険」などがある。それはつまるところ、カンテミール自身の諷刺觀とも云ふべき内容のものだ。

以上の外にもまだ、私の調べの届かぬ作品があるかも知れないが、これだけでも彼の藝術は、或程度迄窺ふことが出来ると思ふ。

彼のために惜しむべきは、ホレイシオやボワロウの思想の陰に隠れて見た露西亞人觀、露西亞の社會觀察が、やゝともすれば本當の露西亞人としてのカンテミール独自の思想を稀薄にしてゐることである。

詩に就て云へば、彼の詩の韻律は、或場合には半シラビツクであるかと思ふと、半歴語になつてゐることだ。その何れもが、十三のシラブルから成り立つて、シラブルとシラブルとの間で、二つの部分に頓挫してゐる。そしてその各半分には、恐ろしく鋭いアクセントが含まれてゐることが目に付き易い。その韻律と來ると、これまたひどく單純貧弱ではあるが、その代りに大きな諧調を持つてゐることが、長所と云へるだらうと思ふ。

カンテミールによつて作られた音律詩の韻律は、彼の「眞の幸福について」と云ふ一篇に用ひられてゐるだけで、その他は純字音の韻律に従つてゐる。

彼が死んだのは一七七四年であつた。その時彼はバリに逗つてゐたのである。

このカンテミールと同じやうに、テオファン・プロコボウイツの友人であり、且つピョートル第一世の顧問になつてゐたのが、先刻も一寸話したと思ふワシリ・ニキチチ・タチンチエフであつた。

タチンチエフ（一六八六—一七五〇）は砲兵聯隊に勤務したり、晩年にはアルハンギエリの知事に任命されたりした經歷の文人である。彼の才能を見出したのはピョートル第一世であつて、彼の實務上の手腕に驚いた皇帝は、直に彼をスウエデンに派遣して鑛山技手を求めさせたが、さうした方面にまるで無知識であつた彼は失敗した。失敗後の彼は、偶然の機會で露西亞地理の編纂に一身を委ねて了つたのである。

だが今日、私たちのために僅かに遺されてゐる露西亞全史五部作以外「露西亞の法規」、「イヴン第四世時代の法規」、それ以外にも相當評價されたものに「我が子エウグラーフに與ふる教訓」や、「學問や學校の利用を論ずる二人の友達の會話」などがあるけれども、文學上の立場から厳正に見るとき、彼は矢張り前にも云つたやうに、ピョートル第一世の主義を押し行つた獨逸功利派の一人に過ぎないのである。此處まで來た私は、當然の順序として少しく他の方面即ち、演劇及び戯曲をのぞいて見よう。

## 第二章 演劇と戯曲

ずつと昔の演劇に就ては、信頼すべき記録がないから、調べることが出來ない。しかし乍らこの十八世紀の始めから中程へかけて、劇曲が頻りに演ぜられてゐたことだけは充分に解る。丁度アンナ・ヨハノヅナが帝位に即いた一七三二年頃から、露西亞にオペラやドラマが始まつたと云つても差し支へない。即ち演劇の草創時代から劇然と區分することの出来る時代に移つたのが、つまりアンナ・ヨハノヅナ朝の初期であると言つて可い。露西亞の國民音樂や戯曲などは、アンナ朝以前にはなかつたと云つてよい。その頃のペトログラドへ伊太利やフランスから、種々な階級の旅藝人が流れ込んでゐて、それ／＼伊太利劇或は伊太利音樂、フランス劇、或はフランス音樂をやつてゐる以外、露西亞人で、露西亞劇或は露西亞音樂を演ずる者は殆んどなかつた。露西亞人の演劇や音樂に對する趣味及び知識は非常に幼稚なもので、この幼稚の時代はアンナ朝に入つて漸く國民自らの自覺する處となつたのである。然しかう云ふ言ひ方をすると露西亞だけが左様に聞ゆるけれども、當時ベテルスブルグに訪ふてゐた外國の旅藝人の藝術とても、それは



露西亞の方よりは、多少でも秀れてゐたかも知れないが、それほどとりたてゝ説く可き物もないのである。然し今日、露西亞の演劇が、最も盛んになり、最も優れてゐる個所に達する最初の導火線と云ふのは、外ならぬ是等旅藝人の群の見すばらしき技藝であつたのだ。今、便宜上、露西亞演劇の創始時代を三つに區別すれば、

(一) アンナ朝(トレチアコーフスキー時代)

(二) エリザベス朝(ウォルコーフ時代)

(三) カザリナ朝(フォミン時代)

となるが、アンナ朝を私はトレチアコーフスキー時代と稱へる。このアンナ皇后は、極めて藝術に興味を持つた人で、即位間もなく「學校演劇團」を組織した。列國の皇后で、みづから演劇に手を染めたのは、恐らく露西亞位ひなものだらうと思ふ。この「學校演劇團」がつまり露西亞演劇團體の嚆矢であつた。で、當時帝室の直轄に屬してゐた「スラヴィノ、ラテン、アカデミー」の學生十數名を選抜して、これに音樂部員として、ギリシヤ正教派の寺僧の中から、所謂唱歌僧を三名拉し來つて團體を組織したのである。勿論、當時劇場らしい劇場はないのであるから、また一つは、この演劇團體が皇后の内命で、出來たと云ふところから、「冬宮」の内部の隱居所で演ぜしめた。その團體の中に後年有名になつたワシリー・シリロヴィツチ・トレチアコーフスキー

がゐた。第一回の出し物はバイブルの中にあるヨセフの傳記の一部であつた。ヨセフやコブヤフアラオ王やアラオ王に隸屬する法官、判官、執政官その他に奴隸とか賢人などが出場するので猶此外にも假設的諷刺人物——例へば「同情」とか「潔白」とか、そう云ふものが、それ／＼異様な扮装で出場して、此處に露西亞建國以來の極めて古風なオペラを演つたのであるが、何しろ出し物が既にかくの如く古い上に、俳優が殆んど全部素人と來てゐるので、演劇は成功せず、主唱者アンナは失望して、第一回で此劇團に解散を命じた。演劇團體に皇室から解散を命ずると云ふことも、露西亞が最初ではないかと思ふ。で、今度はベテルスブルグの伊太利藝人を招いて冬宮の隱居所で伊太利のオペラを演ぜしめた。ところがアンナは伊太利劇と云ふのを初めて見たのであるから、非常に目新しく感ぜられた。然し、芝居そのものは面白いが、言葉が異つてゐるから折角のものが夥しく物足りないと思ふので、トレチアコーフスキーが幸ひ伊太利語に精通してゐた處から、豫め冬宮で演るオペラの翻譯をさせた。最初の翻譯は「ラ・フォルザ、デル、アモレ、エ、デル、オチオ」と云ふオペラであつた。引き続き實演された是等伊太利オペラが大成功を収めた原因の一つとして、伊太利劇團の中に有名なアラジアと云ふ作曲兼劇作家が居つて、必死の努力を見せたからであつた、アンナはそれからこのアラジアを顧問としてベテルスブルグに「オペラ劇場」(木造)を建てた。これこそ露西亞最古のオペラ劇場であつたのだ。不幸にして

一七四七年に焼失したが、この劇場が建てられて、オペラの流行は長足の發展をした。かう云ふ風に露西亞のオペラはアンナ・ヨハノヴナによつて開發された。アラジアの作曲又は戯曲を、片端から口譯して行き、トレチアコーフスキーもその間に大いに修養を積むことが出来たと云ふことで、こゝまで来ると従来は伊太利物を伊太利語で演じてゐたアラジアは、トレチアコーフスキーと協力して露西亞語で露西亞風の劇を作り、かくて伊太利劇は漸次に露西亞化して行くやうになつたので、トレチアコーフスキーは、例の伊太利の字母的ヴァスを露西亞の字音上のアクセントに變へた。このオペラ劇場で演ずるオペラやドラマ、又はメロドラマと云ふやうな種類のもは、いづれも露西亞人の目に映り、露西亞人の心を透して、充分に解釋され味はれることが出来るやうに變化して行つたのである。トレチアコーフスキーの露西亞演劇道に於ける功績と云ふのが、つまりこれであらうと思はれる。トレチアコーフスキー自身も作曲及劇作したが、それはアラジアの物に比べると、未だ堂に入つたものとは云へなかつた。トレチアコーフスキーの時代はアラジア劇全盛時代であつた。アラジアはそれまで俳優に伊太利人を使つたのを露西亞人にかへて了つた。例へば其の當時、非常な歡迎を受けてゐた「セファルスとプロシウス」上演の際の如きも、唱ひ手及俳優が全部露西亞人であつたやうなものだ。「セファルスとプロシウス」はオヴィツドの原作「メタフォルオス物語」から取つたオペラで、作曲者はスマローコフ、背景は有名

な伊太利畫家ワレリアニだつたと思ふ)序作ら述べることであるが、當時露西亞では芝居の背景畫家のことを「帝室演劇美術員」と云つた。一種の高等官だつた。此の劇の中には、例のラスモーフスキー伯爵の娘ビエログラドスカヤなどが加つてゐたと云ふ記録も残つてゐる。このオペラの上演は一七五〇年で、上演中活字に組んで上梓したのが、露西亞でオペラが書物の形を取つた始めであらうと思ふ。かうした皇室直營の劇場に於て上演された演劇がその結果に於て成功する場合には、その劇の作者には、必ず金時計が與へられる習慣であつた。この「セファルスとプロシウス」上演の時も、ナラジアはこの金時計をアンナ・ヨハノヴナから貰つたと云ふ話である。閑話休題、このナラジアとトレチアコーフスキーとの奮闘は、ベテルスブルグを始めとして屈指の都會にオペラ全盛期の初期を形成した。その流行は殆んどこの時、その頂點へ達してゐたと想像するに充分な根據もあるのである。

貴族とか豪農とか、或は大官などが、己れの邸内に大小様々の身分に應じた舞臺や演劇の機關を設けて、金にあかし暇にあかし、各自の家に隸屬する農奴や、身内の郎黨に藝道を仕込んで、楽しんだのである。先刻の伯爵毬法師などは、その尤なるものだつた。

斯様に、漲り渡つた芝居熱は素人を驅つて、芝居道へ走らせたために、それまで曲りなりにも自家の藝を賣つて生活してゐた伊太利俳優は、觀客を失つて大いに窮地に陥り、さまざまの手段

を盡して、朝廷に取り入らうとした。が、時勢は既に彼等旅藝人を顧る暇もない程の速さで日に進んでゐた。彼等の多くは、露西亞に見棄てられて、故國へ引き揚げてしまつたのである。伊太利劇を露西亞に紹介する目的で働いたアラジアも時勢に押されて、自國のオペラを、反對に露西亞から放逐するはめに至つた。一つは彼等旅藝人は、當時の劇評家の言葉を借りて云ふと、「品性が劣等で、藝が未熟で、進歩を欲しなかつた」ために招いた已むを得ぬ運命であらう。時代は丁度エリサベス朝（一七四一）に移つてゐたのである。エリサベスはアンナよりも更に熱心な劇道の研究家であり且つ鼓吹者であつた。エリサベスは即位後直ちに、焼失した木造オペラ劇場の跡へ一七五〇年に石造の大劇場を建築した。彼女は露西亞藝術の外にフランス藝術の愛好者でもあつた。

それで伊太利俳優が顧られなくなつて間もなく、ペトログラードへ興行にやつて來たフランスの喜悲劇團を頻りに歡待して、この石造の劇場で演ぜさせた。その時分の、貴族や豪農や大官などは、一週間の中の一日又は二日を割いて、必ずこの芝居を見物せねばならなかつたので、エリサベスは彼等高等遊民に命じて一種の階級に應じた「芝居見物着」を作らせた。規定見物日には、必ずその着物を纏はせたのであつて、一説によると、一着の芝居着に當時の金で數千ルーブルを投じたと云ふことだ。エリサベスの好劇家であることは此の一事でも知れる。

ウォルコフのエリサベス朝に、私は「ウォルコフ時代」と云ふ名稱を附けた。ウォルコフと云ふのは、フェオドル・グリゴリエヴィツチ・ウォルコフのことだ。ウォルコフの略傳を述べれば、あらまし同時代の劇壇の様相が解るから、ざつと擷い摘んでお話をする。

このウォルコフは一七一一年にコストロアで生れた青年で、幼年時代に其の時分夫を失つてゐた彼の母親が再婚した。二度の嫁入りをした先が、ヤロスラヴ町の一獨逸牧師に就いて初等學を修めて、に従つてヤロスラヴ町へ移つたのだ。彼はヤロスラヴ町の一獨逸牧師に就いて初等學を修めて、間もなくペテルスブルグへ遊學に出た。幼年の頃から音楽に深い趣味を持つてゐた彼は、餘暇毎にオペラ劇場へ出掛けた。丁度名人アラジアがオペラ劇場の舞臺監督をしてゐた時で、彼はアラジアの喜劇にすつかり魅せられて、自分も劇作家にならうと云ふ考へを起した。餘程アラジアの劇に刺戟されて發奮したと見へ、彼は思ひ切つてアラジアが率ゆる劇團に入門した。

ウォルコフが芝居道に入つたのが此の時で、間もなくヤロスラヴ町へ戻り、町の有志と計つて彼の家に一つの小舞臺を拵へた。其處で日夜オペラの稽古に耽つてゐたが——ある時、その町に於て公開の上演をすると、それが大分評判になつたと見え、遠くペテルスブルグに居るエリサベス皇后に識られ、招かれて冬宮内の劇場で試演をさせられた。これが、後年彼が露西亞劇界の恩人と云はれて、尊崇を集めるに至る第一の登龍門とはなつたのだ。其の時の出し物は、「罪人の悔

悟」と云ふオペラで、作者はロストフ市の市長某であつた。劇作者が素人でこれを演ずるウオルコフが素人であつたから、餘程成功を危ぶまれたけれども、ウオルコフの天才的技量と、ウオルコフを助けて働いた劇団員の一人であるイヴン・トミドリエフスキー（ウエンサン・マルチン作「ラ・コザ・ララ」の露譯者として今日まで知られてゐる人）の力によつて、首尾よくやつてのけたから、ウオルコフの名聲は一時に都の巷へ鳴つた。

ウオルコフは其の後イヴン、トミドリエフスキーと共にモスクワへ下つて帝室劇場を建てた。モスクワの帝室劇場史に於ける功績は色々あるけれども、その最も大なるものは、彼の傑作であるオペラ「タニコロシア」とすることが出来る。これは喜劇であつて、今日から當時のことを考へると、この「タニコロシア」が露西亞最古の喜劇であつたと云ふことも出来る。彼の劇の特長は、劇の中へ自作の音楽を入れて、俳優に唱はせたことであらう。このウオルコフ時代に最も盛んに行はれ、歓迎されたアラジアの作品で、今日まで史上に現れたものゝ中の、名品とも云ふべきものを數個紹介すれば、次のやうである。（全部オペラ）

セレウカス（一七四四年作）

ミトリアダテス（一七四七年作）

コードシア（一七五一年作）

許されたるチド（一七五八年作）

セファルスとプロシウス（一七五五年作）

エリサベス朝の次にカザリン朝が来る。このカザリン皇后も劇道の熱心家で、露西亞演劇が今日の盛況を呈するに至つた有力なる原因は、作曲家や俳優に天才があつたと云ふのも、一つではあるが、それよりも演劇趣味の偉大なる鼓吹者であつた皇后が三代続いたからであつた。で、カザリンは、前二者の遺志を繼いで、ベテルスベルグに「グランド・オペラ劇場」を建てた。これは餘談であるけれども、それから、ずつと下つて、文明露西亞が建設さるゝ頃に輩出した作曲家として、今日まで、世界的の天才音楽家と呼ばれてゐる例の露西亞音楽の始祖グリーンカが、處女作として有名な「皇帝に捧げたる生命」を、始めて演じた劇場が即ち此處だ。「グランド・オペラ」はカザリン皇后を記念する建築物であると同時に、大グリーンカを記念するものとして、歴史家は見てゐる。このカザリン皇后朝を、私は又「フォミン」時代と稱する。それは説明するまでもなく、カザリン朝の群才を壓して巨然と聳えてゐた人であるからだ。エリサベス朝のウオルコフに於けるやうに、私はカザリン朝のフォミンの略傳を述べて、此の第三期時代の傾向を知りたいと思ふ。フォミンとは、エヴスグネイ・ブラトノウィツチ・フォミンのことである。彼は西暦一七四一年ベテルスブルグ市に生れた。當時存在して居つた「帝室演伎學校」を優等で卒業して間もな

く、自費を以つて伊太利のボログナにあつた音楽學校に學んだ。當時の音楽學生は必ず一度、伊太利の地を踏む習慣があつたからだ。伊太利から歸るとモスクワで劇場生活的、音楽生活に入つた。カザリン皇后が死する前にペテルスブルグへ移住し勅命によつて「皇室劇場」のレベチートルになつたが、その傍ら、ペテルスブルグに滞在して居つたフランス劇團に加はつて、數十の作曲と數十の劇作を示した。その時分、カザリン皇后在位中、カザリン皇后の直營同様の状態にあつた都市大小の劇場は、その經營が太公ヴルソフの手に移つてゐた。フォミンの傑作「メルニツク、コルドウン」は、ヴルソフ太公の「新劇場」の一つで上演された。後にこの記念すべき「新劇場」は焼け失せた。私の記憶によると、それは多分一八〇五年であつたと思ふ。フォミンを説いた序でにフォミンの作品を一通り述べる。それからフォミンとその前後して擡頭した四劇作家に就いて一言して、この創生期露西亞演劇の話を結びたいと思ふ。フォミンの作品を年代順に列記すれば、次の如くである。

アニウタ（一七七二年作）

ドブラヤ・デヅカ（善き少女）（一七七五年作）

ベレイオシデニア（新生）（一七七七年作）

メルニク・コルドン（魔法粉屋）（一七七九年作）

アメリカ人（一七九七年）

僧侶の先生

ボエスラヴィツチ

運命豫言者とマツチ製造人

コロリダとミロン

オルフェウス

この中で「アニウタ」と「魔法粉屋」が一番有名である。今、是等二作をざつと述べて見ると、「アニウタ」はボポフ氏のリブレットによるもので、大體は、當時の貴族的封建制度に對する反抗を叫んだものだ。つまり階級打破を描いたもので、百姓（小作人のこと）が勞働生活の苦痛を歌に唱ふて、觀客に訴へると云ふ趣向のものだ。「魔法粉屋」はアブレシモーフのリブレットに依るもので、十八世紀中最も成功せる三場のオペラであつたと云ふ話である。その證據として、このオペラを演じてゐる時には、二十七日ぶつ通し満員で、人氣を羨んだ群小劇作家が、争つて「魔法粉屋」に偽せたものを盛んに拵へて演り出したのを見ても解る。「魔法粉屋」は自由主義の鼓吹であつた。

農奴所有者が主人公に成つてゐる。粉屋の役を勤めたクロチツキーと云ふ俳優は金時計を皇后

から貰つたと云ふことが書いてある。日本人は露西亞で自由主義とか解放とか農奴廢止を叫んだのは、例の十九世紀のトルストイやツルゲニエーフあたりが、最初の間だと説くが、そのすつと以前にフォミンが居つたことを知らないのだらうと思ふ。

兎に角このオペラが成功の原因は、作品そのものゝ性質にもよるであらうが、フォミンが戯曲の中に露西亞の民謡を挿入して、舞臺で唱はせたからであらう。露西亞人と民謡とは、國民生活に於けるパンの様な關係にあつた。民謡の露西亞人か、露西亞人の民謡かと云ふ位に切り放すことの出来ない深い密接な、關係がある處から、奇智に富んだ彼は、それまで嘗つて何人も試みなかつた斯様な企てを行つて、豫想通りに成功したのである。「魔法粉屋」は彼の出世作であつた。これを以て彼は一躍一流の戯曲作家となることが出来たのである。「魔法粉屋」が最初舞臺に上せられた劇場はベトロヴスキー町の新劇場であつたさうだ。露西亞人が民謡を熱愛する機微を捕へて巧みに利用したフォミンは、やがて、その時から出世の聲を擧げた純露西亞劇を、従來伊太利演劇家——例へば、サリエリとかサルチとかバイセイロとかシマロザなどの専横な手より解放・獨立させた。その次に一寸面白いと思はれるものに「アメリカ人」がある。これは多少作風もモザルトの影響を受けたと思はれる處もあるが、見方によると、「魔法粉屋」よりすつと後に書いただけに、彼が藝術的手腕の圓熟に達した處を見ることが出来る。「アメリカ人」とはアメリカ・イ

ンデアンのごとで、作中に、グスマンとシムラと云ふ男が戀のことから決闘する。つまり「戀の決闘」と改題して差し支へないやうな大體の内容である。

フォミンと時を同じうして、マチンスキーやバスキエウイチがある。ミハイル・マチンスキーはヤギンスキーの邸内に生れた。生れ乍らの農奴であつたが、ヤギンスキーの芝居道樂から、送られて伊太利に遊び、歸國後ラズモフスキー伯爵の私立劇團に加つて傑作「ゴスツニー、ヅウオル」を書いた。バスキエウイチは、カザリン二世のチャンパー音楽家として、カザリン皇后自作のオペラへ作曲した人々の功績は、オペラに國民的センチメントを加へたことだ。

すつと下つて、巨匠チャイコフスキー作「ジエラウエル」は此の人の物語から取つたものだ。フォミンほどの天才ではなかつたけれども露西亞演劇の獨立に盡力し、フォミンが試みたオペラの中に民謡を入れることを引きついで、流行の域にまで達せしめたことは、演劇研究家の忘れてはならぬところである。カザリン作「オレグの御代」は、この女帝と、伊太利人サルチと共力して作曲したもので、今日まで残つてゐるさうだ。是等三人の外に、俳優として、作曲家として數ふべきものに、マキシム、リリゾントヴィツチ、ベレゾフスキー、ヤドミトリー、ステパノヴィツチ、ホルトニアスキーなどがあつたが、是等二人は永い間伊太利で教養を受けたために、作品に兎角伊太利風の處が多く、伊太利趣味から割り出した物が多數を占めてゐた。それがために前

の三人ほど、露西亞人には歡迎されなかつたやうである。それから間もなく、史上に見るが如き露西亞大革命が起つて、一時演劇は下火になつてゐたが、大革命後は以前よりも、更に大きな勢で復活し、遂に今日の盛況を呈するに至つたのだ。今から考へると、今回述べた時代の演劇は勿論幼稚であり、單調であるには違ひないが、かうした時勢の下にこれだけの發展が出來たことは流石に露西亞だと頷かねばならぬところであらう。

以上は主としてトレチアコーフスキーを主としての演劇の發達に就いての記述であつた。私は文學史上に於けるトレチアコーフスキーに就いても一言言及したのである。トレチアコーフスキーの處女出版とも云ふべきものは、「愛の島への旅行記」であらう。だが、その出版當時よりも後年の作、「綴語法に就ての問答」、悲劇「デイダミヤ」及びテレーマークの詩の翻譯と「古代移動的及び現代の詩形學」などが、彼のオリヂナルのものであり、この作者の重きをなしてゐるものだ。このトレチアコーフスキーと時と場所を同じくして改造期の文壇にミハイル・ワシリエヴィツチ・ロモノソフがある。

天才ロモノソフ——農夫——詩人——星學者——地質學者——化學者——物理學者——政治經濟學者——である天才ロモノソフは、實にかうした改造期の中に生存してゐた數多の文人、學者の群から一頭拔んでゐた巨匠であつた。露西亞文化の來るべき成熟と發達の期待を一人で背負

ふてゐたのは彼であつた。ロモノソフの作品は彼の先驅をなしたさまざまの原始的古典文學期の扉を閉すための鍵であつた。そして又彼の後から來る新らしき十八世紀、十九世紀文學の新紀元の門戸を開くための鍵でもあつたと云つて差し支へないと思ふ。彼は文字通りに「露西亞近代文學の父」であつた。外來文學の重壓から、外來科學の重石から、自由なる露西亞文學と露西亞の科學とを救ひ出して導き、露西亞人をして獨立の立場に進めた第一人者であつた。彼は彼自身が大學校の教場であり、專門學校の實驗室であり、應用の工場であつた。彼は一種の百科的天才であつたと云ひ得るほどの、多藝多才博學の詩人であつたのだ。そして詩の上に於てトレチアコーフスキーやスマローコフが貢獻したより以上のものを、彼は詩以外の科學に於ても成し遂げた。同時に彼は露西亞の社會を他國人の利益と經濟的專擅から救ひ出さうと努めた大膽な戰士であつた。彼はビョートル大帝の遺業と精神とを、彼の力の及ぶ範圍の中に、晩年まで實現することに努めた精力家であつた。十八世紀、十九世紀に於ける露西亞の、新らしい文學上の言語を創造した功績も亦彼に歸すべきものであつた。かく露西亞文學の新紀元の先頭に立つロモノソフ(ミハイル)は、一七二二年、デニソフヅカに生れた。それはホルモゴリンに近いアルハンギエル縣にある小さい村であつた。彼の父ワシリイ・ドロフイエヴィツチは貧しい農夫で、傍ら漁業に従つてゐた。ロモノソフは幼年時代から漁業に馴らされた。寒い北國の荒つぽい粗野な、不毛な、しかし、

神秘的な、そして莊嚴な風物は、ロモノソフの性情を養ふことが多かつた、彼の母親エレナ・イワノヴナの感化も少ないとは云へなかつた。彼女は同じ地方のある小さい村の牧師の娘であつた。彼女は少年のロモノソフを残して早世したのである。彼は母の死後、彼の家にいつまでも留ることが堪えられぬ苦痛となつて來たと云ふのは、彼がその癖であつた讀書に耽るのを嫌つた繼母は、ある時は彼を戸外に突出して、寒氣と餓に任せたとさへある位だつた。彼は間もなくその地方の役人に一年間モスクワへ行つて居ることの許可を乞ふたのであつた。それは、直ちに許されたが、しかし一年のうちに再びその村へ戻らなければ、逃走した農奴と云ふ名義で捕縛されることになつたのである。それを彼は覺悟の上でモスクワへ出て行つた。モスクワへ着いた彼は、スハレヅ塔の附近にあつた、ある學校に籍を置いた。しかし、やがてザイ・コノ・スバスキ学校へ轉じた。この學校を卒へる前に既にその課程を修了した十二人の生徒の一人に選ばれて、ベテルスブルグへ送られることになつたのであつた。ベテルスブルグから獨逸へ派遣された彼は、マルブルヒで有名なウオルフに教はり、次にフライブルヒでヘンケルなどについて學んだ。學んだ學課と云ふのは一切の部分的科學から言語學に及んでゐた。かくて一七四一年に再びベテルスブルグに戻つた彼は、そこでビョートル第一世の精神の實現を畫つたのである。彼は一七六四年に死んだ。彼の著作の中には、彼が死ぬ少し前にカザリン二世が、禮を厚くして親しく

彼の寓居を訪れたと云ふことが書いてある。科學の方面に於ける彼の活動は暫く措くとして、その文學上の事業に就て極く簡単に述べれば、當時のやうに、あらゆる意味に於て手近に手本とするやうな作品のなかつた露西亞に、文學者としての彼の出發は、止むなく外國文學からの門を潜つた。従つて彼の在來の西歐文學の形式に導かれやうとした。しかしそれは西歐の擬古文學の純然たる外形の模倣に過ぎなかつた。ロモノソフの或詩は、かうした關係から全然擬古體になつてゐる。それでも、長い間、カンテミールやトレチアコフスキーやスマローコフに苦しめられた世間は、未だ嘗てこの作者が見たこともないコンバットの恐怖を表現すべく工夫された質問と感嘆に充ち満ちた技巧の單純な詩を、よろこんで歓迎したものである。そこでカンテミールやトレチアコフスキーやスマローコフなどが苦心した詩形學の問題が彼の詩によつて解決されたと云ふことによつても、彼は世間に受けたものであつた。ロモノソフは理論ばかりでなく、實際に於て露西亞韻律詩の中に字音の力がいかに秀れて使用され得るかと云ふことを、試みて見せたのである。その他にも短詩の要點が、寺院用のスラヴ語の使用によつて、それを純文學的に效果あらしめ、且つ露西亞語の純文學的淘化に就ての工夫を試みて、いづれも相當の結果を收め得たのである。その外にも、外來語とスラヴ語との混合した從來の文詞から、注意深く言葉を選び分けた功もあつた。このロモノソフを通じて、擬古主義の文學は長い間露西亞に行はれるやうになつた。



その彼の作品の全部はビョトルやエリサベスに至る二つの頌詩によつて、代表されてゐると思ふのである。彼はさまざまの形體の詩節を用ゐて、その詩節を叙事詩的に戲曲的に書いたが、それよりも詩人としての彼を有名ならしめたのはやはり、短詩であつた。彼の抒情的短詩の特徴とも云ふべきものは、二つの悲劇「タミールとセリム」及び「デモフォン」によつて會得出来るだらう。また彼の著作「ロシア詩形學の理論に就て」の一論文は、彼が獨逸留學中に、ペテルスブルグへ送られたもので、彼は只その要素に於て、トレチアコーフスキーに共通點を持つてゐると云ふだけで、その枝葉に至つては、全然かけはなれてゐると云ふことが出来る。たとへば六、音步詩其の他の韻律が、何故一定數の字音によつて制限されなければならぬのか自分にも解らないと云つた彼の言葉を見ても解る。彼の詩に於ける修辭學は、最初に露西亞語で書かれた。その後ラテン語に變へられた。しかし、そうしたことは彼が詩人としての獨立した仕事とはいへないのである。何故ならば、そうしたものに與へられた一定の規約ともいふべき法則は、元來カウシンやホールやガットシエツドやヴォルフなどによつて作られたものを、勝手に抄採したに過ぎないからである。それに就て一寸述べたいのは、このロモノソフ時代には、露西亞文法といふものが、たゞ一つあつた。(尤も一七五五年には彼自身で露西亞文法を編纂したが)それは、アダドウローフによつて作られたもので、その他の文法書は皆スラヴ語で編まれてゐたのである。ロモノソフが詩作

の上に用ゐた文法書は、ギリシヤ語とラテン語を基礎的根柢として作られたメンチスモトリツキの文法であつたらしい。猶この他に彼は文法をして、宗教上の事柄にだけ拘泥して用ゐられてゐる弊をのぞき、且つその誤謬を正し、文法そのものを一個の獨立した科學とするまでに完成した。ロモノソフ文法が即ちそれである。ロモノソフは文學上の言葉を二つに分つて、一つを方言、或は普通會話語とし、一つを寺院用のスラヴ語とした。「露西亞語に於ける寺院書の價値に就ての考察」に見るやうに、ロモノソフは彼の天才を以てしても、やはり文學上の傳統と言ふのか、趣味と云ふか、兎に角、さうした學者的傾向から、自分自身を解放することが出来なかつたのである。この著述に於ても、彼は形式と云ふものを三つに分け、高、中、低として考へてゐる。スラヴ語と露西亞語に共通な言葉は高、殆んど用ゐられてはゐないけれども、すべての人々に解るやうなスラヴ語であるなら、中、純露西亞語は低の部に入るのだと説いてゐる。今日から見てこの瞬間的時代の過程に文學と科學とは宗教から完全に解放さる可くして解放されたが、文學と科學とは、當時の社會に於て二つの勢力としての獨立的學問とはなるに至らなかつた。その偉大なる天才と、社會的にも科學の上にも多大の貢獻をなしたと自認するロモノソフも、要するにたゞ時代人として見られなければならぬものならば、ロモノソフとは互に敵視しあつてゐた文學の上の反對者アレキサンドル・ペトローイツチ・スマローコフも、この改造の時代から近古

藝術の黄金期として輝き出たカザリン二世への過渡期に於ける時代人の一人であつたと云ふことに、何人も異議を挟まぬことだらうと思ふ。だが、彼はロモノソフ程多方面に渉る才人ではなかつた。しかしたとへば、今、テオフアン、プロボコーウイチを修道士文人といふ意味に於て、スマローコフは露西亞文學に於ける、最初の純文學者と稱することが出来るだらうと思ふ。スマローコフは一七七七年に生れて、一七七七年に死んだ悲劇作者であつた。彼は生れ落ちる時からの貴族であつた。そして、そう云ふ階級の青年と同じ道を踏んで、陸軍元帥ミュニツヒの貴族士官學校に入つたのである。士官學校に於て受けた教育は、しかし彼のためには何の役にも立たなかつた。彼は其處に在學中から別の方面——即ち文學に興味を見出したのであつた。そしてエリサベス朝に陸軍司令官を勤めてゐたラズモーフスキーの副官に進み、その機會に女帝と相識るを得たと云ふことである。彼の作品は、彼が一七四七年に「コレヴィ」と云ふ悲劇を出版するまでは、まるで世間から顧みられなかつたものであるが、この悲劇が書かれたために彼は一躍して、その當時の形ばかりの文壇に持て囃され且つそれが、女帝を喜ばすこと斜でなかつたものと見へて、其の後女帝はトレチアコーフスキーやロモノソフにまで悲劇の執筆を命じたほどであつた。エリサベスの後にアンナ・イヴァノヴナが即位すると間もなく、ポーランド王オーガスタスからベテルスブルグへ伊太利俳優の團體がつかはされた時に、女帝イヴァノヴナはその伊太利俳優に

實演を命じた。時の劇場監督になつたのが、スマーロコフであつた。(演劇と戯曲参照)

カザリン二世の黄金時代に於ける第一人者とも云ふべき作者は、デニス・イワノヴィツチ・フオン・ヴィジンであらう。彼は古代武士の家柄に生れた。彼の先祖の一人は、一七〇九年から一七一〇年にかけて、ピョートル大帝時代にピョートル・フォン・ヴィジンとの名で、リヴォニア戦争に於て、子供のデニスと一緒に露西亞へ虜になつた。その孫の代から露西亞人になつてしまつたのだ。彼の自叙傳によれば、彼は恐ろしく厳格な父親を持つてゐた。彼はその父によつて家庭教育を受けて、大學に學んだのであるが、大學在學中は主として西部歐洲の寓話の翻譯をつゞけてゐた。丁度その頃、この大學出身者の作品のみ出版する人があつて、彼の寓話はその人の手によつて出版されたいが、彼の「自叙傳」によれば、彼はその翻譯の出版による報酬としてホルベルヒ寓話で價格にすれば、凡そ五十ルウブルほどの書籍を貰ふと云ふ約束になつてゐた。ところが、面白いことには、彼はその時受取つた書籍の挿繪がひどく卑猥なもので、彼の生道心はこれが爲に恐ろしく惱まされたと云ふのである。大學を中途で廢めた彼は、セミヨノフスキー聯隊に入つた。彼の才能が認められたのは、それから間もない事で、彼は或る重任を帯びて外國へ遣られた。それから閑散の身になる頃、デルチャヴィンやクニアジュニンや俳優ドミトリエフ

スキーなど、交るやうになつた。

この自叙傳が彼半生の鳥瞰圖なのである。長月日の外國滞在後一七八二年に彼ははじめて文學の生活に入つたと云ふことが出来るといふのは、その年から創作に没頭して餘念なかつたのである。「若者」と云ふ喜劇もその年に書かれた。それは彼が外國滞在中に作つた「騎兵隊」より以上の喝采を博したところの、云はゞ彼の出世作である。喜劇「若者」(或は未丁年者)は露西亞に於ける農奴所有者の生活を描いたもので、その描寫の力の深刻なことは、それが喜劇であるに拘はらず、一つの大きな悲劇的恐怖を與へたものである。たとへ作者が、さまざまの場合に於て、それを喜劇的に導かうとするためのユーモアがあるに拘はらず、この喜劇に於ては、人間の全性情は、一つの重苦しい農奴制と——一般人の心や頭や感情を支配するところの農奴制の犠牲、ことに、世の中のあらゆる美と善とを呑みつくし、法律によつても制することの出来ない專横を教へ込むものだと云ふ意味の主張として受取るとき、それは勿論恐ろしい喜劇には相違なからうと思ふのである。

このフォン・ヴィジンと時を同うして、當代文士の不完全な性質を代表する一方に於て、またフォン・ヴィジン其の他の人々よりも、すつと掛け離れた個性の鋭さを示したものに、フォン・ヴィジンの友人であつたガブリエル・ロマンローヴィツチ・デルジャヴィンがあることを、記憶せぬ

ばならぬであらう。彼は陸軍々族の貧しき貴族の家に一七四三年に生れた。そして一般の青年貴族が受くる所の正規の教育を受けた後に軍隊に入つた。十年の勤務の後相應の位を地作つたが、それまでは別段に彼に一般人と變つたところはないのである。一七六四年から一七七二年までの生活に私たちは彼の極端な頹廢的性質を認めぬわけには行かない。

すつと後に來るべき詩人ミハイル・レルモントフにもかうした傾向を見るが、いづれも心の奥底には確乎とした道德の礎石としての良心があつて、いかに放埒にまた自棄的にすべての「善」と云ふのを投げすてた破壊の生活に於ても、徹底した放蕩者とはなり切ることが出来なかつた露西亞人なのである。

一七四四年から一七七五年にかけて、露西亞に起つた所謂「プガチョフの叛亂」に際し、彼はカザン市とオレンブルグ市に於ける暴徒鎮撫のために、政府の祕密委員の一人に任ぜられて、この二市に向つたが、かゝる新任務上の關係から、ヴィアゼムスキー太公と近づきになり、太公の取立てで、國會の進行係にもなつた。しかし太公にも祕密で、ある貧しい娘と結婚したことが、遂に太公の知るところとなり、太公との友誼は絶たれてしまつた。しかし彼の社會的地位は、一六一六年八月の死の日まで保たれてゐた。

ヴィアゼムスキー太公と仲違ひをする頃の彼は、眞實文學生活に入つて、身を文學に捧げてゐ

たのである。短詩「神」と「ムルザの幻影」などが作られてゐた。晩年の彼が行政官を被免されて、生活の資に窮する頃から、彼の文筆は職業化して來た。彼が「プガチョフの叛亂」後、始めて発表したのは「メッシュチエンスキー太公の死」なる數齣の短詩で、これに引續き「王位に生れた子供の北國に於ける誕生」が作られた。この二篇によつて彼の文才は、一般に認められたのである。

女帝即位にあたり、女帝に贈つた詩「フェリスタの寫繪」などは、女帝の親作にかゝる物語の模倣であるとの説もあつたが、とにかくデルジャヴィンの詩の特徴は、彼の作品を十分に讀破しなければ解らない。

作品を通じて見るに、ホラシオやアナクレオンやオシアンの影響を受けてゐること。彼が中期の放縱な生活を送つたエビキュリアンに對する心的溺惑を否定するわけにはゆかない。かやうに此の時代の文人が外國文學の影響を、生活に作品にうけたものは、またヒツプリトス・フィオドロヴィツチ・ボグダノヴィツチに於ても見られる事實だ。

ボグダノヴィツチがダシニコフ伯爵夫人の斡旋で、莫斯科の或る外國語學校に教鞭を執る頃は、ヴォルテールの熱讀者であつた。ヴォルテールの「リスボンの破壊」を讀み耽つたものである。彼が首府ベテルスベルグに轉住する時分には、既に翻譯者としての名聲を贏ち得てゐた。處女出

版「二重の幸福」といふ詩に見ゆる、黄金時代の科學による文化生活の効果、法律と寺院の權力による人生の贖罪に關する思想などは、正にヴォルテールの影響である。

彼が作家としての立場を確立し得たのは、後年の作「ドゥセンカ」なる寓話だ。而もこれさへラフォンテインに感謝すべき多くの内容を有つてゐる。このボグダノヴィツチが當時の露西亞の社會に於ては、いかに文學が急速の發達を成し得ないものであり、たゞ僅かに遅々たる進歩のみゆるされるものであるかといふ實際の證人であつたやうに、「ロシアド」『ヴラジミル』『ヴェニスの尼僧』『科學の果實』の作者で、當時の社會から、これまで傳承されて來た文學上の理論に従つて作られた擬古抒情詩を、完全目標として、露西亞へ移植した第一人者であり、その抒情詩に於ける前者<sup>オ</sup>デルジャヴィンの位置が、希臘に於けるピンダルのそれであるやうに、希臘に於けるホーマーといはれたミハイル・マツヴィエヴィツチ・ヘラスコーフ（一七三三—一八〇七年）によつても明らかに立證される。

ヘラスコーフに次ぐイヴン・イヴノヴィツチ・ケムニステル。ヴシリイ・ヴシリエヴィツチ・カプニスト。われ／＼は露西亞に新聞雜誌のやうな定期刊行物が現はれる時代に、以上のやうな、生氣あり才能ある多くの文星を有つてゐたのだ。ケムニステルはデルジャヴィンの推賞せる文章によつて、永久に滅びない名作家となつた。その名文は「心理學」といふ寓話で、今日まで讀み